

「鬼殺隊レビューだったけど…」抜かねば無作法な「世界に飛ばされた件…」

抜かねば無作法

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とあるアニメを見て、仕事中でもとある漫画のセリフが頭の中で鳴り響き続け頭がおかしくなって書いた作品です。

滅茶苦茶なことが許せる方がどうか寛大な心でお読みいただければ幸いです。

目次

抜かねば無作法な世界	1
鷹狩（意味深）とは武士（意味深）の嗜み	18
（二元）上司の気持ちになるのですよ！	31
戦いは数です兄上／心頭滅却すればサラマンダー娘も抱けますよ	
兄上	44
縁壺の実写化は役者が死ぬ	66
世ノ理ヨリ外レシ者	87
世ノ理ヨリ外レシ者（後編）	111
ホワイト企業と輪廻転生（体験版）	124

抜かねば無作法な世界

「あ…ああ…もう逃げきれない」

何らかの原因でエンジェルハイロウが欠けた一人の天使が森の中で木にもたれかかる。

中性的で整った容姿を絶望し切った顔で歪め、目の前には凶暴なモンスターが立ちふさがりもはや逃げ場はないといった状態だった。

通常天使はこの世のありとあらゆる攻撃を通さない、代わりにこの世には限定的な干渉しかできないのだが、輪が欠けた状態だと普通に物理的に干渉が可能となってしまうため、目の前のいかにも肉体で戦いそうなモンスターには無力となってしまうた。

(…ここで死んだら僕はどうなるんだろう?)

振りかざされたモンスターの腕を眺めながら天使はおのれの死を悟る。そんな時だった…

―月の呼吸―式ノ型 珠華ノ弄月

独特な呼吸音のような音がしたかと思えば、欠けた月を思わせるようなエネルギーの力場が魔物に降り注ぐ。そして魔物はまるで刀で豆腐を斬るかのようにいとも簡単に切り裂かれ、血の雨を降らせながら地面へと崩れ去った。

(…綺麗…)

天使ことクリムヴェールが感じたものは美だった。まるで真っ暗な夜の中に輝く月のような輝きを放つ、魔力とも違う自分も知らない初めて見る技に対し安堵以上に驚きが隠せない。

そしてしばらく技に見とれているとその技を放ったであろう存在がクリムの目の前に現れる。

「これは驚いた…天の使いか…」

長い黒髪を後ろで縛り、額や首元から頬にかけて揺らめく炎のような黒い痣、顔立ちは人間の基準に当てはめるのなら整っていると思えるのが、六つ眼を持った異貌と近寄りたいたい雰囲気は先に来るものが

ある。

「あ、あの…」

どこか威厳さえ漂う威圧感を持ったその人物はその六つ眼を大きく見開きながらこちらをじっと見つめる。…クリームは怖くなった。目をそらそうと、男が持つ剣に目をやる。しかしその剣は刀身、柄、縁金、鞘の至る所に生きているような目が浮き出していた。そして血管のように赤い筋が走り不気味さを増しており、まるで生きた魔剣のようだった。…正直滅茶苦茶怖くなった。

「こちらの世界の…お伽話でしか…聞いたことが無い眉唾物の存在だった…まさか実在するとは…」

「すみませ〜ん。」

「…天界があるのなら…縁壺ならば行けるだろうな…しかしそうなる…と厄介だな…」

クリムのことを認識してはいるが会話する気があるのかわからないのか分からない、その男は独り言を続ける。

どうしたものかとクリームは考えたが、そんな彼の気持ちに通じたのかこの男の仲間と思しき人物たちが木々の間から現れた。

「黒死牟そつちは終わったか…ん、その坊主はもしかして天使か？初めて見たな。」

「俺もだ、二百年以上生きてきたが実在していたとは。いったい何があったんだ？」

「私にも分からぬ…見たところ…魔物に襲われているようだったが…」

「このあたりの怪物強えからな…ま、とりあえずは街までは連れて行ってやるよ、ついてきな。」

その二人は黒髪で啞え煙草と無精ひげが特徴的な剣士と、弓を持った金髪の少年のような風貌のエルフだった。黒死牟と呼ばれた六つ眼の剣士と違い、話しかけづらい雰囲気は感じなかったので話しかけてみることにする。

剣のことなどほとんど分からないクリームから見ても黒死牟が先ほどはなった一撃は、長きにわたる人生（人間基準）でも稀にみるほど

の練られ、研鑽された見事なものだった。そんな彼とチームを組む二人も相応の腕を持つ冒険者に違いない。そう考えたクリームは賭けに出してみることにした。

「あ、あの…あなた方は相当な腕の冒険者とお見受けします！身勝手なお願いだとは思いますが…しばらくの間あなた方のそばに僕をおいてくれませんか？」

「天界には…帰れぬのか？」

「天使の輪が欠けた状態では本来の力も出ませんし、天界にも戻れないのです…ですから治るまでの間だけでも…駄目でしょうか？」

頭を下げ、お願いするクリーム。それに対しスタंकとゼルは何かを考えたのち、ゲスイ笑顔を浮かべ答える。

「…その天使の輪が治れば天界に行けるんだな？」

「え？は…はい！」

「じゃあ輪が治ったら俺たちを天界まで案内してくれ！それなら治るまでの間全力でサポートしてやる！」

「本当ですか!?!ありがとうございます!!でもどうして天界に行きたいのですか?！」

クリームは明るい笑顔を浮かべながら喜ぶが、同時に疑問もわいた。そんな疑問にスタंकは口にくわえていた煙草の煙をひとはきしながら答える。

「…天界にもスケベな店はあるのかな…って思ってな。」

「…はい?！」

あまりにも意外過ぎる答えにクリームは硬直する。そんなクリームを無視してスタंकとゼルは自身の思いを熱く語りだす。

「俺たちはな！ありとあらゆる種族とエッチするために！ジャングル、海底、砂漠、雪山、ダンジョン！」

「あらゆる場所に行くんだ！そこにかわいい子がいるのなら…」

「天界でも俺たちは行く!!」

「は…はあ…」

「いや〜楽しみだな！天使とエッチできる店があった日にや文字通りの天国じゃないか！」

「いやいや！もしかしたら神様が働いている可能性もあるぞ!!」

「すっげえ夢が広がる！」

「ビバユートピア!!」

「…」

とんでもない人たちに頼ってしまったと内心頭を抱えるクリム。もしかして黒死牟と呼ばれた剣士も同じなのかと、そちらに眼をやる。すると黒死牟は頭を抱えて呆れているようだった。

(良かった…この人はまともそうだ。)

近寄りがたい雰囲気はあるが、真面目で武骨なイメージも併せ持っていたため、それが盛大に音を立てて崩れることが無いことにクリムは安堵する。そんなクリムを知ってか知らずか黒死牟はクリムにある質問を投げかける。

「天の使いよ…そなたは継国縁壹という人間を知っているか？」

真剣そうに尋ねる黒死牟に対し、クリムは自身の記憶を遡る。そして名前からしてかなり珍しいものだったので、もしも知っていたら覚えていただろうと思ひ答える。

「…すみません、そのような名は聞き覚えありません。」

「…では…このような顔をした男を…見たことがあるか…私のような痣を持ち…私に似た顔の人間だ…」

真ん中二つ以外の眼を閉じ、再び質問を投げかける黒死牟。しかしやはりクリムには心当たりがなかった。

「…すみません、僕は見たことがありません。女神様ならもしかしたら何か知っておられるかもしれませんが…」

「…そうか…」

クリムの答えに黒死牟は特に落胆した様子を見せなかったが、ここではないどこかを見つめるように空を眺め出す。

「…やはり…そう都合よくはゆかぬか…」

「…あ、あの黒死牟さんでしたか、あなたも天界に行きたいのですか？その継国さんって人を探すために。」

クリムの質問に対し黒死牟は憂を帯びた表情で、クリムの方を向かずに答える。

「…いや…私は天界などに行けるような者ではない…」

「そうなんですか？」

「ああ…ただ…そなたが天界に還ることが叶う様になった暁には…
一つ頼まれごとを聞いて頂きたい…」

「継国さんって人を探してほしいってことですか？」

「…もしくは…こちらに来た時に…私に知らせてほしい…」

「それぐらいならお安い御用ですよ。」

スタंकとゼルの願いよりはずっとまともな内容だったため、クリムは快く引き受ける。

「…そういえば…そなたの名を…まだ聞いていなかったな…」

「そういえばそうでしたね。僕はクリムヴェール、クリムと呼んでください。」

「…私の名は既に知っているようだが…黒死牟という…この咎人共の名は…」

「いやいや咎人じゃねえし!!ちゃんと合法的に行為を行つとるわ!!
…俺の名はスタंकだ、よろしくな。」

「俺はゼル、こいつらと組んで冒険者やってる。天界の店の件頼んだぜー!」

そうして一応の自己紹介がすみ、街へ向かいだす一行。そんな道中でスタंकはある疑問を抱く。

「そういえばお前、性別がよくわからないけど、男だよな?」

「…これは驚いた…よもや貴様がそのようなことに…気を使えるとは…」

「失礼な!!これでも俺はレディには丁寧なんだよ。」

「…ならば…少しは食事処でも気を使え…それと先の質問だがこの者は…」

「そりやもちろん!僕は男ですよ!ほ…ほら、ズボンもはいているし、膨らみもあるでしょー!」

黒死牟の言葉を遮りクリムが熱弁する。

「…いや…この者は…まあいい。」

「透き通る世界」によりクリムの性別を見抜いた黒死牟はそれを訂正しようかと思つたが、クリムにも何やら事情がありそうだと判断したので、これ以上の詮索は無作法だと途中で取りやめる。

「そうか、なら問題ないか。」

「さつさと目的の街に行こうぜ、折角だから奢つてやるぞ少年。」

「食事をごちそうしていただけるのですか？ありがとうございます
!!」

「いや、サキユバス店に決まってるだろ。」

てつきり食事の話かと思つていたクリムはスタंकとゼルの言葉に数刻固まった後、顔を真っ赤にし声を荒げる。

「ええええええええ!!いやいやいや待ってください!!僕そんなところ行つたことも…というかしたことも…」

狼狽えまくるクリム、そんな様子を見てスタंकとゼルは面白そうに笑みを浮かべる。

「おうおう、初めてだつてよ。」

「そりや、奢りがいがあるな。どうだ黒死牟、折角だからお前も一緒に行つてみるか?」

「…要らぬ…それより…少々腹が空いた…」

「んじゃ、食酒亭で腹ごなししてからにするか。」

「あの…天使として…ふしだらなことはいけないことかと…ねえ聞いてます?」

クリムの訴えが聞き入れられることはなかったのは言うまでもない。

「黒死牟さん、追加の血酒お持ちいたしました。」

「…ああ…礼を言う…」

ここは王都のとある宿屋兼酒場の食酒亭。文字通り飯と酒を出すお店でスタंक達の活動拠点でもある。ここはこの世界を象徴するかの如く雑多な種族の色んな連中が飯を食ったり酒を飲んだり、情報を交換したり、掲示板の掲示物を読んだりと思いいいに過ごしている。

黒死牟も倒れていたところを店の看板娘に助けてもらったときは、この世界の在り様に天地がひっくり返るぐらい驚いたものだが、今となってはなれたものだ。

「じゃあ、黒死牟さんはその『地球』の『日本』ってところからやってきたんですか？」

「ああ、コイツ以前にもたまにだが流れてくる奴も居たらしいぜ。」

「…もつとも…ほかの者が来たと思しき…日ノ本は私の知る日ノ本とはずいぶん違っていているようだったので時代がそもそも異なっているやもしれぬのがな…」

「大抵はひよろい人間で戦いなんてしたことが無いらしいんだが、黒死牟は種族とかそういうの関係なしに最初からクソ強かったぜ。」

「俺の倍、400年も剣士やってんだからベテランもベテランだよな。マナは…正直直視できたもんじゃねーけどよ。」

聞くところによると黒死牟は死んだと思ったら、自分も知らないうちにこの世界に来ていたらしい。それ自体は異世界転移者の中ではメジャーなパターンだったのだが、黒死牟はほかの転生者たちとは違い最初から英雄級もかくやと言う強さを持っていたため勝負を仕掛けられたスタंकたちも危うく死にかけてという。それから紆余曲折あつて黒死牟は自身の《とある目的》のためにスタंकたちに呼吸法を教え、この世界のことを知るためにスタंकたちが受け持った依頼を手伝うことで生計を立てるようになったらしい。

「…強い…か…私など大したものではない…400年無駄に生きても…日輪にはまるで手が届かなかつたのだから…」

「そう謙遜しなさんなって！お前のおかげで俺たち仕事が前よりも捗るようになったんだからな。…最初に出会ったときに腕試しで殺されかけたのはいただけがないがな。」

「…私としても日光の下を歩けるようになったのは大きな収穫だった。日光を防ぐ…妖術…この世界での知識も非常に有用なものが多いのもまた良き…」

「まあ、一番捗るようになったのは何と言っても夜の性活だけではないやあ黒死牟先生には頭が上がりませんなあ!!」

「…貴様たちの…呼吸法の使い方は…目に余る…素質があるだけに余計だ…」

スタंकたちはこの世界でも指折りの実力者ということもあり、黒死牟から見ても非常に鍛え抜かれ、質のいい筋肉を持った体をしていった。

そして一見細身に見えるゼルもこの世界に来てさらに昇華された『透明な世界』を以てして見れば、実に力強いエネルギーが渦巻いており、血鬼術でも再現不可能な妖術（魔法）を使い、黒死牟も一目置いている。特に日光を防ぐ防護魔法など黒死牟の元上司が見たら狂喜乱舞間違いないだろう。

そんな下地が出来上がっていた彼らなので呼吸法も割とあっさりあっさりと習得し、つい最近では常中も会得するなどその成長は目を見張るものがあった。

…だが黒死牟にはどうしても気に入らないことがあった。

「何を言うか！俺たちは呼吸法の真の使い方を開拓したに過ぎない！ビバ 『性の呼吸』!!」

「その通りだスタंक!!ビバ 『夜の呼吸』!!」

酔った顔でジョッキを高らかに掲げながら高らかに叫ぶスタंकとゼル。それをクリムは啞然としながら眺め、黒死牟と店員のメイドリーは頭を抱えながら呟く。

「…最低ね。」

「…呼吸法がこれほどまでに俗にまみれた使われ方をすると…縁壺の目をもってしても予見出来なかったであろう…今からでもこちらを始末するべきか…」

「…私としては大いに賛成と言いたいのですが店が汚れてしまうのでやめてください。」

「…そうだな…このような俗人の血で汚すのは…さすがに無作法というもの…」

そんな様子を尻目にスタंकとゼルのトークはまだ盛り上がりを見せる。

「いやー、あそこ」の疲れない呼吸法というのは実に偉大だぜ!! 楽しめる回数が増えるってのはやっぱりいいよな!!」

「だよな!! その分延長料金もかかっちゃうのは少々困りもんだがそこは呼吸法で強くなった体で稼いであぶく銭を増やせばいいってもんだしな。移動での疲れがたまらねえし、依頼も多くこなせるようになったからな。」

一見スタंकとゼルの主張は性欲にまみれた大俗物のたわ言のように聞こえるだろう。

しかしながらかつて黒死牟がいた世界では、呼吸法の開祖がとある炭焼きの家系に残した舞をベースとした疲れない呼吸法により、病弱なはずの男が六人もの子供を作ったことから夜の世界でも呼吸法は強いことが実証されている。

なお黒死牟は知る由もないが、結果的にはその炭焼き一家に生まれ育った長男と長女は呼吸法を扱う者たちの悲願であった鬼の根絶に大きく貢献したため、夜の呼吸法は確実に世の役に立ったと言える。

…つまり何が言いたいかというとエロと性欲は偉大で、世を救ったといっても過言ではないということだ! まさしくエロは世界を救う

!!

…無論このことは記録に残せたものではないし、呼吸法の開祖者も当然知らない。正しさが全て受け入れられるとは限らないからだ。

「…よもや…貴様ら…そのために…呼吸法を必死に鍛錬したのではあるまいな?」

怒りを通り越して呆れを含んだ声で質問する黒死牟に対して、スタंकとゼルはさも当然といったばかりに答える。

「それが全てに決まってるだろうが!! エロはとにかく偉大なんだよ!!」

「その通りだぜ！新たなエロの境地、向上のためなら鍛錬など苦もねえぜ!!」

最初は無理やりやらされたことだったが、呼吸法が夜の生活にも強いということが分かってからはまるで人が変わったように習得に熱が入った。正直知らなければ良かったという思いが強くなる。

「…聞いた…私が愚かであった…」

「ここまで来ると清々しささえ感じますね…黒死牟さん、心底同情します」

「…ある意味凄いですかね？この二人…」

二人がここまで言っておいても黒死牟が彼らを始末しないのには理由があった。そしてそれは黒死牟の目的に関係している。

黒死牟の悲願、それは「呼吸法の開祖者」…ひいては「日の呼吸」の使い手に打ち勝つことである。もちろん自分がこの世界に来たからと言って「呼吸法の開祖者」もこちらの世界に来ているとは限らないし、来ていたとしても時代が大昔ならばもう死んでいるだろう。

しかしこの特異な種族が数多存在するこの世界では呼吸法が広まれば、その中から「日の呼吸」を再現しうる存在が現れてもおかしくない。

そしてその「日の呼吸」の使い手と戦うのが黒死牟の当面の目的だ。幸いにして黒死牟は種族的に寿命は無いに等しいのでそう言った存在が現れるまで待つことが出来る。

そしてまだこの世界に来てそこまでたっていないが片鱗は既に見えている。性欲の権化と言っているスタルクとゼルだが彼らは、その恐るべき執念で呼吸法を習得しただけではなく「日の呼吸」の片鱗も片鱗…正確にはヒノカミ神楽の動きの片鱗を独自に再現してみせた。

これは黒死牟が教えたものではない、先も述べたが「病弱なはずの男が妻との間に六人もの子供を作った疲れない呼吸法」という曰くつきの技術をスタルクとゼルは本能の赴くがままに自然と体得した結果だ。

収斂進化と言ってしまうのは簡単だが、より多くのエロを楽しみた

いというある種生物として正しい激しい情動がこの奇跡を生んだのは間違いない。

そして『呼吸法の開祖者』がかつて言った『道を極めた者がたどり着く場所はみな同じ』という言葉が世界をも超えて実証された例でもある。…やはりエロは偉大だということだ!!

「それよりよお黒死牟、お前そろそろお金結構たまってるだろ？つーことはさ…」

「…何が言いたい？」

「またまたく言わなくても分かってたんだろ。そろそろため込んだもん放出しようぜ！何せ俺の年より長い300年以上だもんな。」

非常にあくどい笑みを浮かべながらスタックとゼルは黒死牟に絡みだす。こう見えて黒死牟は結構金を持っている。普段の生活では食事（主に肉）と嗜み用の酒（吸血鬼用の血酒）ぐらいいしか出費しないうえに、武器は自前で生成できるうえに強力なモンスターも狩っているのにお金は地味にたまっているのだ。ちなみに性欲は鬼になってからは特にたまつてはいない…いないはずだ!!

「ちよつと二人とも黒死牟さんにたかるなんて最低よ!!」

「そうですね、黒死牟さんも困っているじゃないですか!!」

二人の絡みに対して、クリムとメイドリーは二人を止めようとす。一方の黒死牟は何かを考えているのか六つ眼を閉じたまま腕を組んでいた。

「馬鹿!!俺たちは別にたかろうだとか奢ってもらおうとかそんなやましいこと考えていねえし!!」

「そうだが、そのところは俺たちしっかりしているから!!自分の分は自分で出すわ!俺たちは単に黒死牟の溜まりに溜まったものを吐き出しに行こうぜって言っているだけだ。何もやましいことなど考えてねえよ。」

「…十分やましいじゃない、黒死牟さんもこの馬鹿二人に何か言つてあげてよ!!」

「…」

「…あのー黒死牟さん、どうかしましたか？」

腕を組んだままの黒死牟は何も答えなかった。それに対してメイ
ドリーは心配そうに声をかける。いつもならここで黒死牟は『下らぬ
ことに付き合う気はない』だの『そんな時間があれば鍛錬をする』な
どというのだが、今回はそう言った言葉が出なかったので若干心配に
なる。

「黒死牟さん、どこか具合でも悪いんですか？」

クリムも心配そうに声をかけるが一向に反応が無い。

「おいおい黒死牟、どうしちまつたんだ？」

「酔ったとか眠いとかってことはねえよな…睡眠も必要ないし、酒
に酔うこともない種族だって言ってたから。」

さすがにいつもと様子が違い過ぎる黒死牟にスタンクとゼルも心
配そうに声をかける。

すると考えがまとまつたのか黒死牟は目を見開き、話し出す。

「…貴様らに…もう一度聞きたい…真に色欲のみで…呼吸法を会得
したのか？」

「へ？」

突然の質問に困惑するスタンクとゼル、しかし別に嘘をついていた
わけではなかったなので、その言葉を肯定する。

「ああそうだが…それがどうかしたのか？」

「…そうか…」

黒死牟は残っていた血酒を飲み干すと短い言葉と共におもむろに
立ち上がる。スタンクとゼルはいつものように黒死牟が会計を済ま
せ鍛錬に向かうのだなと思ったが、ここで黒死牟は信じられない言葉
を口にします。

「…貴様らの…余興に付き合うのも…一興か…」

「…は!?!…」

4人はまるで信じられないといったばかりに口をポカンとあけ唾
然とする。求道者めいた一面を知るスタンク、ゼル、メイドリーはも
とより、出会って一日目のクリムも黒死牟が纏う雰囲気からそう言っ
た事柄に興味が無いと思っていたため驚きが隠せなかった。

そしてそんな四人を無視して黒死牟は続ける。

「…遊郭に行くのだろうか…付き合うといったのだ…」

その言葉に黒死牟以外の四人は顔を見合わせお互いの頬をつねり合う。そして痛みを感じたのでこれが夢でも幻惑でもなく現実だと理解する。

「マジか!? ついに黒死牟サキユバス店デビューか!! こいつは気合が入るぜ!!」

「スタンク! 店どうするよ!! 忘れられない思い出にするためにマニアックなところ攻めてみる? それとも最初だからまずは定番のところで経験を積ませるか?」

「かー!! 悩むぜ!! 実に悩ましいがやはり最初は経験を積ませてそれからレベルアップが俺たち冒険者らしいだろ。」

「つーことは、定番のお店ニヤンニヤン天国かねえ。あそこなら初めての奴でも問題なくいけるはずだ!!」

「ニヤンニヤン天国か…まああそこなら問題ないだろ。俺としてはエルフも捨てがたいんだけどな。」

「馬鹿!! お前トラウマ植え付けてどうする!! 黒死牟は元人間とは言えマナを感じ取れるんだぞ!」

「そうなのか。じゃあやつばニヤンニヤン天国が鉄板だな。」

いち早く復帰し、爆発的にヒートアップするスタンクとゼル。奥手な友達を引っ張り出すことに成功したかのように盛り上がりを見せ、今から行く店についてあれこれ思案しだす。

完全に余談だが黒死牟はこの世界に来てからの鍛錬で「透明な世界」をさらに昇華させマナを見通すことも可能となっている。

「ちよちよつと…何言ってるの二人とも…黒死牟さんもどうしちゃったんですか? 頭がおかしくなっちゃってますよ!!」

「そうですねよ、どこかステータス異常にでもなってますか!?!」

一方のクリームとメイドリーは一足遅れて正気を取り戻し慌てだす。そしてそれを黒死牟が手で制止する。

「…いや…私は正気だ…あくまでも考え抜いて…出した結論だ。」

「じゃあ、何で何ですかせめて説明してください!!」

常識人が一人減るかもしれない状況にせめてもの説明を求めるメ

イドリー。黒死牟はその問いに対してどこか憂を帯びた声で答える。

「…たどり着く…道が…見えなくなつて…久しい…400年近く生き恥を晒し…異なる世界に来て尚…私の目指す道がまだ見えぬ…そんな中こ奴らは…短き間に…道の片鱗とは言え掴んで見せた…私はその本質を見極めたい…」

「いや…この二人はただエロイことのためだけに…」

「…それでもだ…その中に私が知りたい答えがあるやもしれぬのなら…私は探す…それに長きにわたり生き恥を晒して来たこの身だ…今更…」

「…黒死牟さん…」

実に求道者らしい答えと、自嘲を含んだ長きにわたる年月を感じさせる音色にメイドリーは言葉を失う。自分は彼の過去は知らないし、前の世界でどういった人物だったのかは当然知らない。

でもきつと彼は前の世界で自分の想像もつかないくらいに大きな間違いを犯したのだろう。そしてそれでも必死にもがいて前に進むうとしているのだろう。止まるすべなどどうに忘れ、魂が摩耗し身を焼きながらなお手を伸ばして、届かない太陽に手を伸ばし続けている。

「…それに…こ奴らの生き方は…我が世では見たことが無いもの…」

スタंक達の戦い方は美しさというものは一切なかった。ただ泥臭く生き残るための戦い方。

鬼殺隊のように命を捨てても一矢報いようとする戦い方とは程遠い…されど自身に媚び鬼になつた者たちとも違う、自分が自分のま何としてでも生き延びようとする戦い方。

それはかつての世界では見たことのないもので、黒死牟は大いに興味を持った。

「…はあ、分かりましたよ。そこまで言うなら止めはしません。ただほどほどにして下さいね。」

「…無論だ…」

こうして黒死牟は新たな道を探すため、新たな戦場サキユバス店に身を投じ

ることになった。

「結局僕も行くことになってるんですか!!」

「…400年生きてきたが…遊郭に来るのは初めてだな…」

上手くいけば止めてくれると思っていた黒死牟がまさかまさかの寝返りをしたため、流されるままにクリームも店に連れられてきた。

一方の黒死牟は何とも言えない表情をしていた。

「初めての奴が二人いるから、いい子見繕ってくれ。」

「特に六つ眼の方は、このいかにも硬派な感じをぶっ壊せるくらいの頼む。」

「おまかせにやー♡」

「ちよつと、スタंकさん、ゼルさん!!聞いてます!?黒死牟さくん!!」

「…性格に支障が無ければ…問題ない…」

ここまで来て往生際悪く叫ぶクリム、一方の黒死牟の方は昔の頭の悪い子供のような同僚（姉）みたいな性格の者が来なければ別にいいくらいに考えていた。

そんなこんなで案内されたお部屋、そこで待っていたのはどこか虎を思わせるような毛皮や耳をした娘だった。

「おー聞いていた通り凄く硬派そうなお客さんだナ。随分変わった服装してるけど、どこからきたんだナ？」

「…この世界ではない…日本という国だ…」

「もしかしてお客さん、転移者さん?うそく見るの初めてだナ!!」

「…初めて…ということは縁壺にあったことは無いということか…まあ奴はこのような場所には来るはずもないか…」

「ちなみに前の世界ではこういうお店来たことあるのかナ？」

「…いや…無い…ただかつては妻と子がいた…もう顔も声も思い出せぬがな…」

「随分いけないお客さんなんだナ…これは忘れられないようにしないといけないんだナ…」

「(…ここまで来た以上は…抜かねば無作法というものか…)忘れられないようにか…ならば…見せてみよ…その実力のほどを…」

「任せるんだナ…！それじゃまず一緒にシャワー浴びるんだナ…」

「…よかろう…」

350年以上こちらの『実戦』からは離れていたが、そう簡単にやられると思われては困る。それでもスタンプやゼルに…今となっては非常に腑に落ちないが呼吸法を教授した身だ。負けるつもりなど毛頭ありはしない。

「お、お客さん凄すぎだナ…。しばらく立てそうにないナ…」

「…潜在的に光るものはあるが…まだまだだな…修練が足りん…」

息も絶え絶えな娘に対し、まだまだ余裕を見せる黒死牟。長きにわたる修業の力は伊達ではなかった。

「や…やってしまった…あらゆることを全部に、一気に…」

ナニとは言わないが下腹部にある大事なものの二つをいっぺんに失った穢れ無き天使(元)は顔と欠けた輪を真っ赤にしていた。何かを得るためには同等な何かを必要とするが、それを一気に済ますのはこの少年には少々刺激が強そうだった。

「おうこれで一つ成長したなクリーム君よ！黒死牟先生はどうだった？」

「350年ぶりはどうだった？良かったか？」

「…光るものは感じた…磨けば…良くなるやもしれぬ…」

「いまいちよく分からねえが、良かったってことでいいんだな？」

「そうとらえてくれて構わぬ…思えば…この世界に来てから…あれほど近くで人以外の種族と接したのは初めてだ…」

「そうかそいつは良かった!!折角だからレビュー書いてみてくれよ、お前がどんなこと書くかすごく興味あるし。」

「…いいだろう…」

鬼：黒死牟

八

見た目は華奢な娘であったが…筋肉の機能は野生の虎の特徴を継いでいるのか…しなやかで力強く…中々に上質なものであったと言えよう。それに加えて技を抜いうる知性も併せ持っているため呼吸法を学べば…才にもよるが鬼殺隊の柱にも…匹敵するやもしれぬ…今後の進展が楽しみな種族だ…

「…おい、ちよつといいか？」

黒死牟のレビューを読んだスタンクとゼルは顔を引きつらせる。

「…何だ？…何か可笑しなことでも書いていたか？」

「何だじゃねえよ!!サキュバス店関係ねえじゃねえか!!」

「そうだよー！これじゃただの異種族レビューだ!!店と嬢について書けよ!!」

「…解せぬ…」

店については迄理解できるが、娘に関してはちゃんと書いたつもりだった黒死牟はどこか釈然としなかった。

鷹狩（意味深）とは武士（意味深）の嗜み

拠点（食酒亭）から往復で2週間かかる程度には遠い森の中にある、有翼人専門のお店、『妬き鳥・秘伝のタレ』

基本料金は40分3500G。店独特のプレイとして、基本プレイに含まれる水浴びプレイ、追加オプションでは超高層の部屋、砂浴びプレイなどがある。

店にやってきた黒死牟はその中でティンとくる嬢を見つけ指名する。そして追加オプションに森林浴プレイを追加する。

「クラウンちゃんご使命入りまーす♪」

「……前評は問題なき……実物のほどはどうか……」

「オプション追加までやるとは随分楽しそうじゃねーか。黒死牟もしかしてサキュバス店の魅力が理解できたのか？」

「……少し違うが……思ったより……楽しめそうだ……まだ見ぬものはやはり面白い……」

「ほーそりやまた、レビューが楽しみだぜ。言っとくが前みたいなのレビューは無しだ。最低でも嬢の感想はちゃんと書けよな。」

「……今回は問題なからう……前評判通りならな……延長したら……待てるか？」

「ああ、構わねえぜ。ゆっくり楽しんで来い。」

「……では向かうとするか……」

指名を入れた嬢へと向かう黒死牟、その姿はこれから戦場に向かう武士そのものだった。

「黒死牟の奴どんな娘を指名したんだろうな？気になるな。」

スタंकは嬢を選びながら呟く。ついこないだまでストイツクさ

の塊のようだった黒死牟が自発的に指名し、オプションまでつけたことは少なからず衝撃的だったようだ。

「そうですね。前と違ってかなり自発的に選んでましたからね。」
「しかも追加オプションまでつけるは、挙句には延長、随分と熱心だったな。」

「良かったら拝見いたしますか?」

「おっ!気が利くねえ、サンキューな。」

場合によってはどの子に入ったかは秘匿しておくもののだが、この一行は後でレビューを纏めると宣言していたため、仲間内ならば情報を開示してもいいと判断した受付嬢はスタंक達に黒死牟が指名した嬢のプロフィールを見せる。

「どれどれ?あいつはどんな娘を選んだのかなーつと。」

「ちよつと!後から黒死牟さんに聞けばいいじゃないですか」

「馬鹿、これは必要なことなんだよ。あいつのレビューのレベルを上げるためにはな。それとも何か?クリームは気にならねえのかよ?」

「そりゃ...気になりますけど...」

黒死牟が選んだ嬢の詳細を下世話な気持ちで眺める一行。そして異変は訪れる。

「ば...馬鹿な...」

その詳細を見た一行のうちNGを喰らって不貞腐れていたナルカミが、突如体を震わせその場を後ずさりしだす。その顔は蒼白となっており大量の冷や汗が噴き出していた。

「嘘だろ...オイオイオイ!死ぬわあいつ!!」

突然叫び出すナルカミに対し一行はギョツとナルカミの方を振り返る。

「おいおい!!いきなり何だっつてんだ!!」

「ど、どうしたんですか、ナルカミさん!?そんなに震えて...」

「あり得ない...というか何であの一族がここに...絶滅していなかったのか...」

「絶滅!?!いったい何なんですか!?!黒死牟さんが選んだ方は一体どういった方なんですか?」

絶滅などという物騒なワードと何故ナルカミがここまでおびえているか分からないクリムは慌てながら説明を求める。そんな質問に対しナルカミは体を尻尾全体を威嚇を行うガラガラヘビの尾先もかくやといった具合に震わせながら答える。

「いいか、有翼人種にとっては基本的にラミア種が天敵だが、猛禽類系の有翼人は逆にラミア種の天敵になっている…ここまでは分かるな？」

「それぐらい知ってる。」

「基本中の基本だわな。」

様々な種族と接する機会の多い冒険者たるものならば、基本的な情報であったためスタンクとゼルは普通に頷く。クリムはそのことは知らなかったが、天使として異種の婚姻に携わったことはあり、今までの経験で猛禽類系の有翼人とラミア種の婚姻に携わったことはないたためナルカミの言葉は真実なのだろうと察する。

「その中でもトップクラスにヤバいのがカンムリクマタカの有翼人だ…」

ナルカミとて冒険者として修羅場をくぐってきた身だ、命の危機など何度かあったことだろうし。しかし骨の髄から震えるように、恐怖に染まり切ったナルカミの顔を見て、黒死牟が選んだ嬢が猛禽類系の有翼人とラミアの関係を抜きにしてもヤバいというのが見て取れる。

「一体何がそんなにヤバいんだ？そりや今から殺し合いをするんならまだ分からんでもないが、ここはサキユバス店だぜ。荒事は御法度のはずだ。」

「そうですね、ナルカミさん。いくら何でも考え過ぎですよ!!」

何とかナルカミをなだめようとするゼルとクリムだったが、ナルカミの震えは止まらない。

「殺し合い？殺し合いだったらいっそ楽だよ!!そこまで苦しまずに終われるんだからな!」

「じゃあ何が問題なんですか?」

「…奴らにとってはラミアも獣人も人間も関係ねえ…全てが捕食対象で嗜虐心を満たす対象なんだ!!」

「全て…ですか？」

「…ああ、奴らはそう…別格なんだ。」

カンムリクマタカ…その鳥は黒死牟のいた地球においては、猛禽類の中でも特に大型で猿、鳥、蛇、鹿が主な獲物となり、その中でも猿が好物という種である。当然霊長類である人間すら捕食対象となり、猛禽類の中でも抜きん出たよう猛さと猿の頭をいともたやすく砕く強大な鉤爪をもってして、現地では恐れられている。

その凶暴性と力強さはこの世界でも健在であり、ラミアは蛇と人間両方の特性を併せ持っているため本能的な恐怖が染み付いているとナルカミは説明する。

「何というか…どうしてそんなのがサキユバス店で働いてるんだ？」

少々引きながらもスタंक達は例のサキユバス嬢について考える。どう考えてもこのような店よりも紛争地帯が良くて冒険者をやるのが自然だろう。

「ドMな客専用なんじゃねーか？責められるのが好きな奴ならいけるだろ。」

「多分そうだと思う。殺してはいけないってことは、逆に言えば苦しみが長く続くってことだからな…とはいっても俺の知り合いにもドMな奴がいるがそいつでもアレはキツイはずだ。正直俺はこの店NG喰らって今はホツとしてるよ…」

恐怖が一向に収まらないナルカミを見てスタंकは吸い終えた煙草の火を消しながら、つぶやく。

「まあ今回はご愁傷さまとしか言えないな、帰ったらなんか奢ってやるよ。」

「ああ…すまねえな…少し気が楽になった。」

「うし!!それなら良かった。さくそそれじゃあ俺たちは嬢の選びに戻るとしますか。」

とにかく事情が分かれば下半身の欲望に素直な男たちは切り替えが早い。それはある意味で知性あるものとして正しい姿なのかもしれない。

『有翼人は何といつても感じやすさがすごい！攻める度にいい声で鳴いてくれる。まさに俺の小鳥ちゃんだ！鳴き声も非常に甘美で美しく、官能的！まさしくエロのオーケストラコンサートホールだぜ！こいつあ股間もスタンディングオベーション！』

「つとまあ他の連中はこんな感じだが、アンタはそういうのも求めてるって顔じゃなさそうだな。ついでに言うならばDMって訳でもなさそうだ。」

「…そうだな…私が求むるはそういうった戯れではない…」

黒と白が入り混じったセミロングの髪に、焦げ茶色の翼、バストはFはあるかといった感じだったが、何よりも特徴的だったのはその肉体だった。その引き締まった肉体は、如何にも凶暴そうな足の爪と体中に散見される戦場傷、そして端正ながらも威圧感を放つ顔と相まって鋼のような強靱さを感じさせる。

まるで神話の戦乙女のような存在感を放つクラウンという名の有翼人の女は風貌とは裏腹に割とフランクに黒死牟に話しかける。

「やっぱそうだよな!!それとよ、アンタに最初にあつてから聞きたかったことがあるんだけどよ…もしかしてアンタ転移者か?」

「…いかにも…」

「ほう、オレの推測は当たってやがったか。正直俺が今まで見たことがある転移者とは随分違ってたから実は違うのかと思ってたぜ。」

「…ではなぜ分かった…私は他の者とは様子が違うのだろうか?」

その問いに対しクラウンは少し考え答える。

「何というか転移者って言うのは雰囲気が違うんだよ。マナでも種族でもなくて…なんて言ったらいいかな…とにかく違うんだよ。」

「…左様か…ついでに聞きたいが…貴様は継国縁壺という男を知っているか？姿は私によく似た人間種だ…」

「ん〜オレもいろいろな場所を巡ってきたが、そんな名前の奴にも、アンタみたいな顔の人間にも会ったことは無いな…そいつは強いのか？」

「…ああ…世の理を乱す程にな…」

どこか懐かしむように話す黒死牟を見て、クラウンはその人物が大層な強者だと判断し興奮する。

「そりやまた挑みがいのある奴だな!!ぜひ会ってみたいぜ!!」

「…血の気が多し…故に滅びへと向かったか…」

「まあオレらの一族は昔少々やりすぎてね…残ってるのはほんの僅かなんだよなあ。」

クラウンの一族はその凶暴性と強さを活かして、傭兵のような活動を行っていたが血の気が多すぎたため、種族間紛争で少々やりすぎてしまい、調停者に粛清を喰らった過去がある。

そんな中でクラウンはほかの一族とは違い、長く楽しむにはどうすればいいかを考えるだけの冷静さを持っていた。

自分たちだけでは組織の力には無力…ならばできるだけ長く戦えるような職に付けばいいと、体色を変え女騎士となったが、いつしか普通の盗賊程度では満足できない体となってしまった。

そして粛清を喰らった一族の出では上の階級に上がり、より楽しむことが出来ないと知っていたクラウンは冒険者となるが、モンスター相手だどこか楽しむことが出来なかった。

その後、他部族の紛争地域などを彷徨い悩んだ結果自分は単なる勝利ではなく知性ある強者を屈服させることこそが、自身の性癖だと気付いたクラウンは強い冒険者たちもたまに来訪し、身を隠すにも都合がよいサキユバス店に就職する流れとなった。

そして今日嬉しきで鳥肌が立つほどの上客がやってきた。こんなにプレイが始まるのが楽しみな日が来るとは想像できなかったくら

いだ。

「さて話はここまでにして…そろそろおっぱじめるか。」

「…良からう…」

「頼むからアンタは簡単に壊れてくれるなよ…これほどの上物初めてだからな…最初から殺す気で行くぜ!!」

「…それが賢明だろう…長生きしたくばな…」

いつもは殺してしまうときさすがに権力が出張ってくるので手加減はしていたが、今日のプレイではこちらも殺す気で行かないと届かないどころか自分が確実に食われる。そう感じたクラウンはその顔に普段は抑えている凶暴性を全開放する。

さあ森林浴プレイ開始だ!!

『セキセイインコって飼ったことある? 懐くと手のひらで…交尾し出すよねあいつら…何が言いたいかっていうと…鳥ってエロい奴はエロいんだー! セキセイインコならぬ、セクシー淫行…実によし!』

「…実によし…」

森の木々の間を猛禽類独特の優れた目をもってして、器用にかいくぐりながら飛翔するクラウン。それに対して黒死牟は木の枝や幹を巧みに利用し、跳ぶ。

無論これは飛行デイトなどといった生易しいものではない。両者の間ではお互いを喰らいつくすための体術の応酬が繰り広げられており、達人でも近づくことが困難なフィールドと化していた。

「そこだア!!」

「…狙いは正確だが…まだ青い…」

こちらがわざと作った隙に飛び込んできたクラウンに対して、かつて己の子孫である若き柱に対してやったように攻撃からのカウンターを決めようとするが、それをクラウンは手足を使って払いのける。

その様子を見て黒死牟はわずかに目を見開く。自身のカウンターは隻腕になったとはいえ紛れもなく天才であった子孫から刀を奪い取るほどのものであったにもかかわらず、この娘はそれを払いのけたのだ。

「…良き動きだな…」

「危ねえ、危ねえ、やっぱり剣一辺倒じゃなかったな。」

カムムリクマタカ特有の強靱な手足を持っているとはいえ、これはただ力任せにやっただけでは絶対にできない芸当だ。相手はただ凶暴なだけの獣ではない、理知を備え見極めができる芸者だ。

「たまらねえぜ!!これがオレが求めていたものだああ!!」

黒死牟がカウンターを狙っていることを察知したクラウンは大いに興奮する。おそらく一度組み敷かれれば、自身の力をもつてしても抜け出せないということも理解した。

当然相手に隙などあろうはずもない、間違いない…目の前の相手は特上の存在だ。

「これほどの上物を知ってしまったらもう元の生活に戻れなくなっちゃまうじゃねえか!!」

「…そのようなことは…私の関知するところではない…」

「ツレナイこと言うなよ!オレをこんな体にしやがったツケを払いやがれえ!!」

一見無茶苦茶なことを言っているようにも聞こえるが、猛禽類の仲間には空中で足を絡ませ合うことが求愛行動となっている種もいる。今のクラウンにとって森の木々の間を飛翔し、黒死牟との間で体術の読み合いをするこの行動は非常に性的興奮を覚えるものであった。

…黒死牟の知らぬ間にツケはどんどんたまっていったのだ。

「…鷹の目と…翼…そして体術…素晴らしいものだ…」

一方の黒死牟にも興奮(非意味深)の感情はあった。鷹の動体視力、

強靱な手足の筋肉、そしてそれを活かせるだけの体術、目の前の相手は間違いない逸材だ。

「まだまだ続くぜえ!!」

再び飛翔する二人：早く済ませないと延長確定だぞ!!

森の中で数十本の木々が何かに挟られたように斬り倒されている。きつとこの場所の元の姿を知るものがいたらこの惨状に大層驚くことだろう。もつともこれを引き起こした原因である一人の鬼と、一人の有翼人種は気にも留めやしない。

「…面白い…だが…そろそろ…終わりにするか…」

刀は今現在持っていない。やろうと思えば今からでも体から生やすことが出来るが、それはこの戦い（プレイ）においては無作法極まりない。

故に黒死牟は己の腕を剣に見立て構え集中する。

(…あの構え、何らかの技が来そうだな。)

魔法は扱えないと事前に黒死牟から聞いており、飛び道具も刀さえも持っていないことは承知しているが、クラウンの勘は今の距離では不味いと感じこの場から離れようとする。

しかし例え一定の距離があろうとも居合においては黒死牟のほうが上手だった。

「…楽しませてくれた礼を尽くそう…」

―月の呼吸― 陸ノ型 常夜孤月・無間

「な…!?!」

無数の斬撃を対象に向けて集中させて放つ技。威力こそ刀を持った時の技には及ばないものの鬼の膂力と、呼吸法によって底上げした力は間違いなく脅威だった。更には、何百年も鍛え続けたであろう黒死牟の技は一振り一振りが全て死そのものである。

「これは不味い!!」

振り払われる刀の軌道に沿うように残る月光は、一つ一つが黒死牟の斬撃。クラウンは背筋に冷たいものが流れる感覚を感じる…が、その闘志が衰えることはなかった。

「諦めるかあ!!」

この技を避けることは、普通はほぼ不可能だ。なので近くにあった木を強靱な手足を使って引き裂きそれを投げつける。

障害物により威力を落とす攻撃、それでもまだこちらに向かってくる。しかしクラウンは驚異的な動体視力と蓄積された経験をもってして、どこを飛ばばダメージが少なく切り抜けられるかを瞬時に見極める。

「まだだ!!まだオレは戦える!!」

黒死牟の技の全てをよけきることは出来なかった全身にはまるで斬り傷のような傷が刻まれ、自慢の翼や首筋の冠のような羽毛には所々血が滲んで汚れてしまっていた。

それでも諦める理由にはならなかった。意識を集中し再び索敵を開始しようとする。

「…天晴なり…」

しかし技を避けるために意識を集中してしまっていたクラウンよりも早く黒死牟は懐に入り込み、体術をもって組み敷く。黒死牟は分かっていた、刀を使わない技ならばこの相手には止めとはなりえないことを、ゆえに技を隙を作らせるための一石として使用したのだ。

「俺の負けか…」

もはや、抵抗することはかなわない。決着はここに付いた。

「あまり動くと出血がひどくなる…これを飲むがいい…」

黒死牟から手渡されたのは回復薬だった。本来はクラウンとのプレイでボロボロになるであろう客に対して使用するために店員が渡したものだだったが、逆の使われ方をしたのは今日が初めてだった。

「あく悔しいぜ!!」

これにて森林浴プレイ終了です。

『ボクとは全く違う質感の、綺麗な羽がとても好きです。でも…受け身体質らしいので、攻めるのが苦手なボクには少し困ります…森の湖で、のんびり一緒に水浴びする基本プレイは冷たくて気持ちいいですが…砂浴びプレイは誰に需要があるのでしょうか…』

「さすがに今日は砂浴びプレイをしたら傷口が開きそうだぜ。」

「…貴様は…何を言っているのだ？」

「気にすんな、ただの独り言だよ。」

森林浴プレイを終えたその体を惜しげもなくさらしながら水浴びに興じるクラウン。当たり前だが、異性に裸体を見せることに恥ずかしさなどない。

(やはり…まだ慣れぬな…)

こうも簡単に夫でもない男に裸を見せることには違和感を隠せないが、世界が違うのだからそこに余計な横槍を入れるのはお門違いと思いつく。今はかつての上司の呪縛も存在していない一体の存在としてここに立っているため少しくらいの自由さには寛容なつもりだ。

「それよりよ!!傷がふさがったらまた体の疼きが止まらなくなってきた。きちゃった。どうしてくれるんだよ?」

「…もう一戦交えるか…それもまた一興か…」

まだ戦い足りないのなら相手になるぞといった具合に構える黒死牟、それに対しクラウンは呆れたように訂正する。

「そうじゃなくてコッチの方だよ。責任を取りやがってたんだ!!」

「…なぜまたそのようになった?…貴様は戦いを求めていたのではないのか?」

「そこはそこ、コッチはコッチだ。お前はオレを組み伏せた、知ってるか?俺たちの間ではそれが本当の意味で認めるってことだぜ。」

「…知らぬな…」

「ふざけんじゃねえ!!このままじゃオレは次に卵を三個産まなきや

ならなくなっちゃうじゃねえか!!黒死牟、テメエが何とかしやがれ
！」

顔を赤らめながら怒鳴るクラウン、どうやら諦めるつもりは無さそ
うだと判断した黒死牟は示談の条件を話し出す。

「…条件がある…」

示談の条件を聞いたクラウンはいい笑顔をしながら快諾する。条
件も内容はクラウンに呼吸法を伝授し、強くなったらまた戦うとい
うものだった。

「良いぜ、今より強くなる方法を教えてもらって、コツチも鎮めるこ
とも出来るんならお安い御用だ。」

(快諾したか…ここまでくれば抜かねば無作法というもの…)

さあ延長確定だが、第二ラウンドの始まりだ!!

ラミア：ナルカミ

0

原始の恐怖が…ここは地獄か…

鬼：黒死牟

九

非常に得難い体験であった…有翼人とは…いやクラウン…貴様は
面白い…引き締まった肉体に機能美…技も我流であそこまでとは…
使うつもりはなかったが抜かねば無作法だったのでつい使ってし
まった…何にせよこれからの成長と再戦が…非常に楽しみだ…

「…実に満足であった…」

「…前のレビューよりは良くなったのか？」

「どっちの戦いのことかよく分かんねえけど、まあこのレビュー見にくる奴らならば都合がいい方に解釈してくれるだろ。」

「カンムリクマタカ怖い…カンムリクマタカ怖い…」

(二元) 上司の気持ちになるのですよ！

「……」

流れるようにきれいな黒髪、胸は決して大きいわけではないものの数々の鍛錬と実戦で鍛え抜かれ無駄というものが一切省かれた実に完成された体つき、美麗でありながらも精悍さも兼ね備えたその顔は六つ眼と痣を差し引いても十分に美人と言えるもので、その姿は一つの芸術品のようであった。

そしてそんな和服を着た女性剣士は絶賛不機嫌であった。

「だははははっ!! いかん苦しい!! 笑い過ぎて腹が!」

「滅茶苦茶美人になつてんじゃねーか!! ヤベエ、マジうけるわ!!」

「……貴様ら命が惜しくないようだな……」

「そう怒らないでよ黒死牟、その姿ならどんな男もイチコロ間違いなしだよ!!」

「……全員纏めてで構わん……来い!!」

美人の正体……怪しい薬を飲まされ女となっていた黒死牟……もとい黒死嬢は額に青筋を浮かべてキレかかっていた。

(……全く……とんでもない店もあったものだ……)

ここは大魔導師デミア製の性転換薬剤をくれる宿屋。

変身した後は提携しているサキユバス店からサキユ嬢を呼んで、経験豊富なお姉さんに手解きされる百合百合プレイが体験できるといふ何とも業が深い店だ。

「お客様！女の子のままじゃないですか、申し訳ありませんが部屋へお戻りください。」

そして変身の間は様々なトラブルの原因になるため、外出は厳禁となる。今もまさにクリムが店員の召喚術により拘束されている。

「そんなーどうして出たらいけないんですか!?!」

「…大太刀が無くなっている…」：確かに…クリムならば現状の状態でも外に出ても問題ないように思えるが…」

クリムの見た目は非常に整った中性的な顔立ちの童だ。そもそも今は大太刀（意味深）が無いにせよ、普段の顔立ちとも別段変化した点もない。何が問題なのかと黒死嬢は疑問に思うが、その疑問にゼルが答える。

「じゃあさ、お前らもし出られたらどうする？」

「別に何もしませんけど…だから出してください!!」

「…恥を晒すつもりはない…薬が切れるまで大人しくする…」

クリムとは違い黒死嬢ならば力づくでもここを突破することなど容易いが、わざわざ衆目に恥を晒したくはないため今は大人しくすることになっている。

「女湯に行く!」

「素人の裸を見まくってやる!」

「…確かに出たら問題ですね。」

「…清々しいぐらいに強靱な精神力だ…」

さも当然とばかりに堂々と宣言するスタンクとカンチャルを見て、このままの姿で出てはいけけない理由を痛感する黒死嬢とクリム。しかし話はこれだけでは終わらなかった。

「だが、こんなのはまだかわいい方だな。ここで女になって男に告白しに行くやつが結構いたんだ。」

「え、それって…」

「…まさか…正気か？」

「フフフフ…そして一夜を過ごし翌朝布団で男に戻るといふ恐怖の話が、外出禁止が徹底された原因ともいわれている。」

「…冗談ですよね？」

「…度しがたいにも程がある…ん？」

実におぞましく聞くに堪えない話を聞き黒死牟はあることを思い出す。

かつての上司であった鬼舞辻無惨は鬼殺隊から身を隠す隠れ蓑を作るため、そして青い彼岸花の情報を得るためにいくつかの人間の

家に姿を変えて潜伏していた。富豪の家に養子として入り込んだり、貿易業の人脈目当てに夫を殺し、新たな夫の座と社長の地位を手に入れたり、まあいろいろやっていた。

そういう事情もあってか鬼舞辻無惨は様々な場所に入り込むために、姿かたちを変化させることが出来るのだが、その中には女性の姿もあつた。…もう一度言おう、何を血迷ったのか女性の姿もあつたのだ。そしてゼルの話を聞いてある考えがよぎる。

(…よもや…いや流石にそのようなことが…)

鬼舞辻無惨が女性の姿になって何をしていたのかを黒死嬢は考えてしまう。さすがに自分の思い過ぎではないだろうかと思うが、思い返せばあの上司は気分気分で動きまくっていたのでふとしたきっかけでどういう行動をするか分からないところもあつた。

もしもゼルが話したようにナニを行っているとしたら…そこまで考えて黒死嬢は気分が悪くなった。

「…うつ…」

「どうしたんですか黒死牟さん、気分でも悪いのですか？もしかして薬が体に合わなかったとか…」

「いやそれは無いはずだ、この薬はあらゆる種族に対応してる。それが例え転移者であつてもだ。」

「でも黒死牟は他の転移者たちと種族が違うよね、それでももしかしたら…」

「お客様方！当店の薬は政府公認のクリーンな物で怪しい薬剤は一切入っていません!!」

何やらややこしそうなことになってきたので事情を話そうか迷う黒死嬢。もしも鬼舞辻無惨の支配がまだ存続している状態ならばさすがに話す気にはなれなかったが、今となっては元上司だ。ぶっちゃけあのブラック組織に特に未練も何も無い、なので話すことにした。

「…いや問題はない…私のかつての上役のことを思い出ただけだ…」

「上役？ああ、そういえばお前元は別の鬼の眷属だったとか言っていたな。」

「確か、鬼舞辻無惨とかいう名前だっけ。そいつがどうかしたのか？」

「……その上役が先の話と同じようなことをしていた疑いがある。」

「……マジか!?一応聞いておくがお前の元上司って元は男だよな?」

「……ああ……しかも一夜ではない可能性すらある……」

実際には呼吸法の開祖者に死の直前まで追いやられた時に隠れ住むときや、開祖者の関係者から隠れるために少しでもバレない確率を上げるために女性の姿を取っていただけなのだが、いかんせん気配や体のつくり（声以外）まで変えていたため勘違いが加速した。

「異世界にもそういう趣味と技法があるのか。こいつはまた勉強になったぜ。しかし一夜ではないかもしれないか、こいつはまたレベルが高いな。さすがにそこまではマネしたくはないな。」

「俺も同意見だ。」

「ボクもだよ。さすがにそんなことしてたら男に戻れなくなりそうだよ。」

かつての上司に言われの無いレッテルを張り付ける黒死嬢。上司にあらぬ疑惑を植え付ける部下の屑の行いだ。その上司に下がる評価が残っているかどうかこの場では言及しないでおくが……

「それはともかく、選ぶとしよう!!」

「俺らを女にしてくれるお姉さまを!!」

「経験豊富なお姉さんに手ほどきされる百合百合プレイを体験だ!!」

「……改めて……凄いとこころに来てしまったものだ……」

ノリノリでカタログを見だすスタンク達を見てかなり引き気味になる黒死牟。ふとクリムの方に目をやる。クリムは顔を赤らめて男娼用のカタログを見ていた。この店ではサキュ嬢の男版であるインキュバスボーイを呼ぶこともできる。……誰得かまでは分からないが。(……両性だからどちらでもいいけるのか……そういえば男が女になって……女と遊ぶ……これは何というのだ?)

男同士ならば戦国時代にもあった衆道と言えるのだろう。男と女ならば普通の関係だろう。しかし、男が女になって女と遊ぶなどとい

うのはさすがにどういふことなのかは黒死嬢の知識にも存在しなかった。

元上司ならばそのあたりも知っているのかもしれないのだが、今はないので聞くことも出来ない。…まあいたとしても聞く気にはなれないだろうが。

「……ともあれこのようなことには興が乗らん…」

この店はあるまでサキユバス店ではなく宿屋という体なので別に嬢を呼ばなくても、ただのお宿としてパートナーと楽しんだり、一人で異性の体を楽しんでもいい。そう聞いていた黒死嬢はこのまま薬の効果が切れ、黒死牟に戻るまでやり過ぎそうと画策する。

「いや、お前それじゃレビューにならないだろうが!!」

「そうだぜ、今更逃げるなんてのは無しだ。折角美人になったんだから楽しめよ!」

「騎士…そっちだと武士っていうのか、目の前の戦いから逃げるなんて名折れだよ。」

「あのー黒死牟さん、皆さんもこう言っていることですし観念したほうがよろしいかと。」

無論そうは問屋が卸さない、そもそもここにはレビューを書きに来ているのだ。

しかし黒死嬢はそれを無視してその場からやり過ぎそうとする。膠着状態となりこのまま黒死嬢以外が呼び出されるかもしれない時間となったとき、店員がこちらにやってきた。

「えーつと…そちらの六つ眼の方、少しよろしいでしょうか?」

「…何だ?」

「(こちらを…)」

黒死嬢は自分に何の用か尋ねるが、店員は黒死嬢に何かを手渡すとそのまま何も言わずに戻っていった。渡されたのは何か書かれた紙だった。

「……」

「黒死牟さん一体何を貰ったんですか?」

「もしかして裏オプシヨンか何かの紹介か?それだったらちよつと

ズルいぞ!!」

話しかけられるが黒死嬢は何のリアクションも起こさなかった。食い入るように紙を眺めている。

「なんだか様子がおかしいぞ黒死牟の奴。」

「だね、随分思いつめた様子をしているみたいだけど。」

「……この話…受けざるを得ないか…」

「何だ何だ!?急にヤル気になりやがって、そんなにいいオプシジョンだったのか?」

「…いや…そういうものではない…」

「じゃあ何だよ?」

「……探し物が…見つかるかもしれない…」

黒死嬢はもう一度その紙を見つめる。そこには『あなたと同類の転移者の情報があるから指名してほしい』と書かれていた。

「手紙ちゃんと読んでくれたんだ。指名してくれてありがとうがとね♪
コツチのほうは久しぶりだから」

「……そんなことはどうでもいい…それより研究と言っていたが…
学者あるいは医者なのか?」

「しがないけどね。なので今はこういう店にも顔を出してるの。」
どこか妙な女だった。マナも体の作りも一見おかしく見える部分
が無いがどこか違和感がある…ここにいるのにここにはいない、そう
感じる存在だった。そういう種族なのだろうかと黒死牟は考えるが、
警戒しておくことに越したことはない。

「プレイの前に一応聞いておくけどあなた転移者さんよね?向こう

がいつの時に来たの平成？令和？それとも西暦で聞いた方が良かったかしら？」

「……平成…令和…聞いたことが無い…年号が変わっているのか…私が出たときの最後は大正だ…」

「ということはやっぱり過去…つていいのかは分からないけど他の大部分の転移者さんたちと違う時代からここに来たんだ。」

「……」

『やはり』や『大部分』といった言葉を使うあたりこの女は自身の探し物と何らかのかかわりがある。なぜなら自身が探している存在もそうだからだ。

そしてここまですれば多少の対価は覚悟するつもりだ、これを逃せば次はいつになるか分からない。

「……協力の見返りは…」

「もう本題？もう少しトークを楽しんでくれたっていいじゃない♪」

「…人形相手に長々と話すつもりはない…」

「あら、気づいてたの？結構苦労してコレ作ったんだけど、ねえねえどうやって見破ったの？教えて欲しいな♪」

先ほどから感じていた違和感。この感覚に近いものを黒死嬢は知っていた。鬼という生物の中には血鬼術と呼ばれる特殊能力を持つ鬼がいるのだが、その中には自身の分身を作り出すというものがある。純粹に戦闘に特化したものもあれば、相手をかく乱させるために自身とそん色ない正にもう一人の自分と呼べるもの等様々な種類があるが、この女もそういう術の一種に近いものなのだろうと黒死嬢は判断する。

「…いいから本題に入れ…」

「いけずね、まあいいわ。そんなに難しいことじゃないわよ。まず一つにこのまま私とプレイを楽しんでもらうこと。」

「……一つということは…まだあるのだな…」

「もう一つはそのうちでいいからこちらに店のどちらか、あるいは両方に来てくれること。なるべく早い方がいいけど。」

そう言つて女は二枚の紙を黒死嬢に手渡す。

「できればご友人たちも誘つてあげてね、その方が色々と捗るし。」

「…良からう…ただし強制はせぬぞ…」

「そこは多分大丈夫でしょ。あの人たちの感じなら自分から進んでくると思うわよ。」

「…その点については同意しておこう…」

黒死嬢は女の言葉に同意する。しかし彼は気づいてなかった、その女の中では自身も同類という扱いになっていることを。

ベッドの上で二人の女性が戦い合っていた。その内目が六つあるほうの女性は苦戦を強いられており、防戦するので手いっぱいだった。

「その蕩けを必死に耐えるお顔もすごく可愛いね。じゃあ、次はこつち行つてみようか」

女の手つきに頭に霞がかかったような感覚に陥りる。まるで酸欠状態にでもなったかのようなのだが、体力的には特に消耗しているわけではない。にもかかわらず体が上手く動かない。

「…ぐ…少し待て…」

「だーめ、待ちません」

女がそう宣告した瞬間、電流が流れるような感覚が下腹部を中心に全身に広がっていった。ビクビクと身体が意思に反して跳ねそうになり、声にならない嬌声が出そうになる。

…がそれを精神力で跳ねのける。正直刀傷に耐えるよりもよっぽどきついが、こんなことに屈してしまえば生き恥どころの騒ぎではない。

「おお、いい反応。やっぱり初めてなんだね♪ま、地球から来たんなら当たり前か。」

「……経験があると思うか…そんなものを経験した者は元上役だけで十分だ…」

「え？向こうにもこういう事できる存在がいるの！すごく興味ある!!教えて!!教えて!!」

「……思い出したいことはない…吐き気がする…」

「そんなこと言われたら意地でも聞きたくなっちゃうなあ…えい！」

「…う……貴様…」

長年生きた勘でこの女の好きにさせるのは不味いと感じた黒死嬢は切りたくはないが切り札を斬ることにする。それにこれ以上やられっぱなしは性にも合わなかった。

「どうかな？答える気になってくれたかな？」

「……好き勝手やってくれたが…それも終わりだ…」

「えっ、は……!?!?すつご……いい!?!ゆび、ふかいい！」

最初受け身でいたのはこの状態になったときの体の感覚を慣らすためと、どのようにすれば相手にイニシアチブを取れるかを知るためだ。相手はかなり人間に近い種族なため感覚器官も人に準ずるのだろうと判断した黒死嬢は自身を犠牲にして得た情報をもとに攻めに転じる。

「ちよ、いく、いっっちゃうからあ！もつとやさしく……!」

無論このようなことは黒死嬢も初めての経験だ。しかしそこは己の技術をもってカバーする。この世界に来てマナの流れまでわかるようになったこの技術にかかれれば相手の体の流れもより正確に読み取れる。

無論それが人形相手にどこまで有効かはさすがに黒死嬢にも分かっていなかったが、相手はとにかく精巧な人形だった。故にそういった感覚までも網羅されており、弱点も引き継がれていた。

「え？っつうっつうっつう!!ダメええええまたきちやうっつう!!」

今は事情があつて刀（意味深）を抜くことは出来ないが、それでも

体術がある。抵抗を許さない体勢に組み敷きさらに即興で作り出した体術（意味深）で相手の力を奪い取る。

…恐らく歴史上初の透き通る世界の使い方である。と同時に絶対に記録に残してはいけないものだ。

（……私は一体何をしているのだ？）

その疑問に答えてくれる人材はここにはいない。

鬼：黒死嬢

伍

……初めての経験であった……最初は戦場での刀傷よりも余程耐え難いと思っていたが…慣れれば何とかなるものである…相手が底意地悪かったため最初は受身に甘んじざるを得なかったが…最終的には攻めに転じることが出来たため良しとしよう…しかし女というのはかのようなものに耐えていたとは驚きだった…後、戦いの中で元上役を思い出すのはいただけない…とはいえ今回は得るものがあったため悪い気はしない…非常に不本意ではあるが…

「あーやつば元上司を思い出すのはキツイか。元上司の性転換百合百合プレイとか想像したくはないわな。」

「でも得るものがあると言ってるあたりちやつかり楽しんでやがるなコイツ。もしかしてソツチもいける口か？」

「でも黒死牟、どうやって攻めに転じたの？初めてだと難しいと思うんだけど。」

「……道を極めていけば…そのうち分かる…」

「道ねえ…さすが黒死牟先生は言うことが違いますなあ、俺たちも

精進しなくては。」

「……」

黒死牟は思った。こいつらならばおのれの欲望の赴くままに本当に透き通る世界にたどり着きかねないと。無論それを見たいかどうかは別ではあるが。

「どうしよう、クリム君も両刀疑い大なのに黒死牟さんまで……常識人がどんどんいなくなってく……」

「……待て……疑いがあるのは上役だ……私は普通だ……それにクリムは……いや何でもない……」

「(クリム君がどうかしたのかしら?)でもその上司の血が……もしかしてそれが悪影響を及ぼして……黒死牟さん一度検査してもらった方がいいと思いますよ。」

「……否定はしないでおう……」

冷静に考えれば確かにあの上司の血で鬼になったのは、不味かったのかもしれない。昔は『ありがたき血だ』などと考えていたが、今となってはただの変態の血を自分に入れてしまったのではないかと思うようになり始めた。

《性転換の宿屋》にて

「種族は人間じゃないみたいだけど、いろいろと似てるのよね。顔立ちとか真つ赤な痣が特に。」

最初は偶然だった。情報収集をしていた時に偶然見かけたレビュー記事の写真を見かけたのが切っ掛けだった

「師匠、また危険なこと首を突っ込んでるんですか?以前酷い目に遭ったのを忘れたわけじゃないでしょうに。」

「失礼ね、あまり下手なことをして敵対するのは避けるべきだと私

も考えているわよ。貴重なデータを二つも録れなくなるなんて大損したくもないわ。」

「ああ、さすがに懲りてましたか。」

ティエスは師の言葉を聞いて安堵した。目の前の師は世界最高位の大魔導士には違いないのだが、如何せん知識欲が強すぎるところがあり、そのせいで以前とある転移者とひと悶着あり手痛い目に遭ったことがある。

しかも今回の客はその対象と深い関係がある人物ときた。一応普段とは違う姿のデコイで接客したらしいが正直聞いていて気が気でない。

「なので、今度はもつと深く調べられる店に来てもらうことにするわ。今回のだけじゃデータは全然足りないし、やはり血液か精液が欲しいものね。まさか《性転換の宿屋》に来るなんてね、てつきり私の店か《水槽のハーレム》の方に来ると思ってただけど…まあデコイの転移が間に合ったから結果オーライか。」

全くこりていない師を見てティエスは溜息を吐く。

「そもそも、店を紹介したところで来てくれる保証などどこにもないのでは?。」

「その心配は無用よ、つるんでいるお仲間さんたちのことを考えれば私が何もしなくてもいずればどちらか…あるいは両方の店に来るはずよ。」

「だったら今回は余計なことしなくても良かったんじゃないのですか?。」

「保険よ、万が一のためのね。」

「保険ですか?。」

「そつ、まず第一に天使の子なんだけど、これまでの記録では天使があそこまで直接的に現世の存在に触れあつたことはない。おそらく輪が欠けている影響でしょうけど、記録がない以上この現世にいつまでとどまっているかが定かではない。」

「もう一つは何です?。」

「もしもあの黒死牟とかいう異世界人があちこち動き回ってばつた

りと出会って殺し合いとか始めたらそれこそもったいないわよ。」

黒死牟という異世界人と、彼と深い因縁にあるであろう人物。もしも両者が出会えば高確率で争いごとになると、その女性は考えていた。なのでそのあたりを調整するため、こちらから接触し情報を与えることにしたので。そして現在それは上手くいっている、次に自分の店に来るときは天使の少年も一緒に来てくれるだろう。

「それにしても継国縁壺ねえ…あなたはあのイレギュラーとどんな因縁があるのかしら？ 黒死牟サン♪」

今回はそこまでは聞けなかったが、イレギュラーの名を口にした時の黒死牟の顔はあらゆる感情が混ざり、非常に複雑だった。

まあ自分としては研究が進めば問題は無いと考えているのだが。

戦いは数です兄上／心頭滅却すればサラマンドー
娘も抱けますよ兄上

長きにわたり活動を続ける火山。一見あらゆる生物の存在を拒むかのような地ではあるが、ここはあらゆる種族が存在する異世界。適応できる種族はそれなりに存在し、またここで採れる有用な物資も存在するため人々はたくましくこの地に根付いていた。

そしてそんな物資を必要とする商人や経営者の使いもこの地を指すのは必然であった。

「そういえば何でわざわざ依頼してまで仕入れてきてもらうんでしょうか？街に売っていないとか…」

「街で買えなくはないが、この方が安く済むからな。」

「そうなんですか、具体的にはどのくらい？」

「まず直接火山地帯に買いに行く場合は50kgで25000G、んで街で行商人から買うと75000G」

「三倍も違うんですか!!」

あまりの価格の違いに驚くクリム。しかしゼルは特段不思議とは思っていないさそうだった。

「まあな、安全とはいいいがたい輸送ルートだからその分費用が掛かるんだよ。それでも必要とするところは必要とするから、商人側も値段を足元見てさらに吊り上げるからこうなる。」

「それはまた…随分と世知辛いですね。ちなみに僕たちが行く場合は?。」

「それはだな…つとお客さんだ。」

「お客さん?。」

ゼルは質問に答える前に別の方向を見つめる。クリムもつられゼルが見ている方角を見ると断続的に噴火活動中の火山から岩らしきものが飛んでくるのが見えた。

「火山岩?いや違う…あれは、モンスター!!スタंकさん!黒死牟さん!」

スタックと黒死牟も同じ方向を向いていた。既に臨戦態勢だ。

「……いつ見てもモンスターという妖は不思議なものだ……だが邪魔をするのであれば容赦はせぬ……」

黒死牟は刀を抜き月の呼吸の技でモンスターを迎撃しようとする。しかしそれをゼルが制止する。

「待て、ここは俺がやる。ここ一週間ほどで体が鈍ってるしな。」

「……良かろう……」

「アイスニードル!!」

両手をかざし魔法陣を展開するとそこから冷気の針と形容すべき攻撃が放たれ、火山岩に扮したモンスターを穿ち、活動を停止させる。

「ひゅーさすが。」

「凄い！でもまだ遠くの方のモンスターは残ってます!!」

「そう焦るなって、まあ見てな。」

撃墜を逃れた岩石状のモンスターは地面に降り立つと、不利を悟ったのか仲間同士で合体をはじめ二体の大きなゴーレム状のモンスターへと変貌した。

「二体いるけど誰がやる?」

「二体は俺にやらせろ、俺もここ一週間での鈍りを解消したい。少し試したいものもあるしな。」

「俺もまだまだ物足りないな、それに確認しておきたいものがある。」

「……いいだろう……見せてみる……」

迎撃態勢に入る二人に対し、黒死牟は手出しの必要は無しといった具合に刀を鞘に納める。

その代わりこれから起こることを見定めようとする。

「いいんですか? 援護しなくても……」

「……問題は無い……それよりもこれから起こることをよく見ておくことだな……」

「二体何が起こるんです?」

「……奴らが見つけた《道》が《形》になったか……それを知る必要がある……」

意味深なことを言う黒死牟を他所にスタンク達はそれぞれの相手を迎撃し始める。

「とりあえず用意するのはこれぐらいで十分か、アイスニードル!!」先ほどと同じ魔法陣を展開すると冷気の針が放たれゴーレム状の合体モンスターを穿つ。先ほどまでとは違い体格が大きくなっていくためこの攻撃に込められた魔力量と空いた穴の大きさからみてクリムは倒しきれてはいないだろうと予想する。

しかしその予想に反しモンスターはそのまま倒れこみドスンと大きな音を立て、やがて崩れ去った。

「えええええええ!!何で、あの魔力量の攻撃だといくら何でもあのモンスターはやられないんじや!?!」

「ああ、何でって…そりや適当なところを撃つたら無理だろうけどコアを全部撃ち抜けば倒せるだろ。」

「コアを全部ですか?でも結構な数が合体してましたよね。それをすぐに全部見極めるなんて…」

ゼルの言いたいことを要約すればこうだ。一体一体の岩石モンスターをそれぞれ一つ一つの細胞に見立てるのなら、あのゴーレム状のモンスターは多細胞生物であり、その核を全部破壊すれば機能を停止するということらしい。

もちろん言葉にするのは簡単だが実行するのは難しい。合体したモンスターは合体する前とはかなり形状が異なっており、元のモンスターのコアがそれぞれどこにあるかが分かりづらくなっている。それを一つならともかく、すべてを短時間で見抜くなど普通では考えられない。

「い、一体どうやって見抜いたんですか?」

「どうやってって言われてもな…なんか集中して目を凝らせば見えるようになったんだよね、相手のマナだけじゃなく内部までも。」

「…なるほどな…どうやら貴様も《見える》ようになったということか…」

「多分ね、黒死牟の言っていた《世界》ってこういうものだったんだ。」

「ゼルの奴やるじゃねえか。こいつは俺も負けてられないなど。」

一方負けてられないとばかりにスタンクも敵の攻撃をかわし大きく跳ぶ。そして腰に差した自身の愛刀を素早く抜刀すると、モンスターに斬りかかり十二分割に切り裂く。その様は刀に纏った白い炎のようなオーラも相まって、複雑な軌道を描く白く光る彗星のようだった。

「……ついに《片鱗》が形になったか……ふふ……これは面白い……」

「あの一瞬で大きなモンスターを十二個に!? それに僕の気のせいですかね、スタンクさんの剣に白い炎のような何かが……」

「お、クリムにも見えるのか。実はこれ俺も何なのか分かんねえんだよ、お前分かるか?」

「魔力とも違う、マナとも少し違う、なんだか不思議な感じですよ。元々の技ではないんですね。」

「そうなんだよ、いつの間にかできるようになった。……多分あの時の経験が活かされてるのかな。」

「多分俺もだな、ちょうど《世界》が視えるようになったのは1週間前からだし。……うわ思い出しただけでも鳥肌が立つ。」

「……あれは地獄だった、もうあんな経験はしたくねえ。」

（1週間前? 確かその日は……）

まるでトラウマを刺激されたかのように震えだすスタンクとゼルを見てクリムは1週間前に何があったかを思い出す。そしてそこであつた出来事を思い出し顔を引きつらせる。

（ま、まさか……）

ふと黒死牟の方を見ると先ほどまでの笑みは消え、苦虫を一ダースほどかみしめたような顔をしていた。

* * * * *

……時はさかのぼり1週間前。

「おい、あれ見てみろよ。」

いつも通り、今日の店を探すために街を散策するレビューアーズ一行。そんな彼らの目に留まったのは一軒のサキュバス店だった。

「何だよ、普通の淫魔店じゃん…ん？」

その店は街の裏角にある以外は一見普通の店だったが、看板に書かれた内容が普通ではなかった。

「安ッ!?何だこの値段設定は!!いや、たしかにガチのサキュバスは大体安いけど…でもこれはいくら何でも破格すぎだろ!!」

「…さすがに詐欺なんじゃないですか？」

時間無制限で人数無制限、それでいて一人頭500G。《淫魔の狂喜乱舞》と看板に書かれたその店の値段設定は価格破壊という言葉すら生ぬるく感じるものだった。

「よーし、とりあえず入るぞ。」

「ボツタクリなら腕づくで出ていくまでよ。」

しかしこの程度で怖気づくようなら、はなからレビューアーズなどやっていない。彼らはいっただってチャレンジャーなのだから。

「本気で言っているんですか？黒死牟さん皆さんを止めてください。」

「……もし問題が起きればどういった門番が出てくるのか…楽しみだな…」

(あ、だめなやつだこれ…)

黒死牟は店の内容よりも、もめごとが起きた場合に出てくるであろう店の《交渉人》と戦えるかもしれないことを期待していた。その様子を見てクリームは観念する、彼らを止めることは不可能であると。

「いいですか？この部屋に入ったら、向こう側から解放されない限り、出してはもらえません」

(……この女……いくつかの血が混ざっているのか……恐らく悪魔と豹の獣人……興味深い……)

受付の言葉と共に一同はガラス張りとなった何かの実験室か拷問部屋のような部屋へと向き直る。

「オラーツ!!何してんだ!早く来いよ、タマついてんだろ!」

「何怖気づいてやがる!それでも男か!」

「根性とチ○ポ見せてかかってこいや!!」

「途中、やり過ぎで死ぬようなことになっても、当店は一切責任を持ちません。以上のことを踏まえて中にお入りください。」

(……下級の鬼のようだ……理性というものが感じられん……)

獲物を待ち望む目でこちらを見つめる様子を見て、黒死牟はまるで低級な鬼のようだと思つた。違いがあるとすれば低級鬼は血肉を、低級淫魔は精を求めて暴走しているということか。……あまり変わらないいかもしれない。

「低級淫魔の詰め合わせ部屋かよ……」

「通りで安いわけだ。」

「でもこの金額で店が成り立つんでしうか?」

「ああ、それでしたら心配ないですよ。中の淫魔さんたちから貰つてますし。かといつてタダだと逆に警戒されて客が来ないんですよ。」

「なるほど、勉強になります。」

「……話に聞いていたサキユバスとやらとは随分様子が違うが……」

「サキユバスが様々な方法で誘惑して男を襲うのに対し、淫魔は一言で表すなら逆レイプって感じだな。」

「……理解した……」

つまりは血鬼術を扱える理知的な鬼をサキユバスとするならば、血肉に飢えた低級鬼が低級淫魔に当たると黒死牟は理解した。

「それにしてもいくら何でも酷過ぎませんか？もう帰りましょうよ……」

ガラス越しの低級淫魔の様子を見てクリームが至極真つ当な意見を述べる。しかしこれで止まるようならレビュア^{大馬鹿}ーズ等やっていない。彼らに後退の二文字は無いのだ。

「ゼル、補助呪文を強めにかけてくれ。」

「おう！」

「って何で行く準備してるんですか!？」

「お前あそこまで言われて引けるのか？男として!!」

「単純にこんなところ入りたくありませんよ!!黒死牟さん帰りましょうよ!!」

「……そうだな……私が期待していたものは無さそうだ……」

戦いは無さそうだと、クリムの意見に同調し店から出ようとする黒死牟。しかしそれに待ったをかける者がいた。

「もしかして黒死牟怖いのか？ん？」

「……何……？」

「いやいや別に臆病者とかそういうこと言ってるんじゃないんだぜ。ただ剣士歴400年の黒死牟サンが逃げを選択することもあるんだなあーって思っただけ。」

「……」

「レビューのことなら心配はいらんぞ、戦えないお前の分までしっかりやってみせよう。」

「こ、黒死牟さん、気にしちやだめです！彼らの口車に乗っちゃひっ!!」

クリームは何とか黒死牟を引き留めようとするが、その顔を見て戦慄する。不機嫌が溜まりに溜まって今にもスタンク達に斬りかかりそうだったからだ。

「……言いたいことはそれだけか？…この私が低級鬼の如き存在に臆するだけでも…いいだろう乗ってやる…」

「そう来なくっちゃな！補助呪文かけとくか？」

「……必要ない…このような数だけの連中…片手間で事足りる…」

「さすが黒死牟!!男として憧れるぜ！」

「うむ、全くだ。実に豪快で男らしい選択、見習いたいほどだ。」

「無茶苦茶です!!こんなことに命を懸けるなんて!!」

憤慨するクリームに対しスタンクは優しく微笑むと、諭すような口調で述べる。

「いいかい、クリーム：男には決して引いてはいけない時があるんだ。分かるね、今がその時だ。」

「分かりますが今は絶対その時じゃないと思います。」

いくらい顔でいいセリフを言おうともやっていることはただの馬鹿だ。クリームは呆れてこれ以上ものが言えなくなった。

「話はまとまりましたか？それではみなさん、もう一度確認します。

この淫魔の部屋に入ったら絞りきられるまで出してもらえません。泣いても喚いても、叫んでも漏らしてもです。絶対途中で解放してもらえませんし、私も助けに行けません。」

受付嬢の言葉と共に分厚い扉が開かれる。

「よし！行くぞお前たち!!」

「「おう！（…良かろう）」」

戦場へと歩みを進める男たち。その背は歴戦の古強者を思わせ実に勇ましいものだった。

「大丈夫かなあ、みんな。」

クリームは不安だった、彼らは蛮勇と勇気をはき違えているのではないかと。

淫魔の部屋に入っていくらか経過したのち、黒死牟は全くもって想定外の事態に追いやられていた。

(……このままでは危険だな……何か策を考えないと……)

全集中「常中」と上弦の鬼としての再生力を駆使し、戦線を維持しながらも黒死牟は心の中で焦りの色を隠しきれなかった。

ここまで追い詰められたのは、柱三人と鬼食いの少年と戦った時以来だと感じるぐらいに。

(……低級な鬼と同じようなものと侮っていたが……不覚……慢心であつた……)

店に来た当初に見た低級淫魔の様子からそれほど苦戦はしないだろうと知らず知らずのうちに心の奥底で慢心していたらこの様だ。

この世界はかつていた世界とは違う。自身の常識を超えた種族が共存する世界で一目で得られる特徴などほんの表面的なものでしかない。なのにこの世界で依頼をこなしていくうちに知らず知らずのうちに慣れが生じ、心に隙が出来てしまっていた。自身の不徳の致すところだ。

(……次から次へと……厄介な……)

相手は低級鬼のような様相を呈しながら、その実上弦の鬼や柱上位者に匹敵しかねない厄介さを有している。それでも一対一ならば多少手間取りはするだろうが、負けることはなかった。一番の問題……それは数だった。

「クソ!!このままじゃキリがねえ!ゼル、まだいけるか?」

「まだな……だがこのままだとジリ貧になる!」

「こちらこそそろそろ不味い!!黒死牟、何か策は無いか……って黒死牟はどこだ!」

ブルーズは黒死牟に意見を求めようとするが、あたりを見渡してもスタンクとゼルの姿は確認できるのでに黒死牟の姿が見えなかった。

「待て!!あいつ逃げたとかじゃないだろうな!」

「さすがにそれは無いだろ、でも確かに姿が見えねえ……ブルーズ、臭いでどこにいるか分かるか?」

「この状況では匂いが入り乱れすぎて良くわからん。」

ブルーズも黒死牟の姿が見えなくなっただけから臭いで何とか探そうと試みていたが、密閉された部屋に充満した雄と雌の匂いが邪魔をしてそれどころではなくなる。

だが、部屋のガラスや扉が破壊されていない以上この場所のどこかにいるのは確かだ。

そんな中、ゼルがあるものを発見する。

「…ちよつと待て!!あいつのmanaを確認できた!」

「マジか!!どこだ?」

「…あそこだ。」

「な、信じられん!!」

三人が目にしたもの、それは低級淫魔によって形作られた山だった。当然黒死牟の姿は見えない…見えないのだが、低級淫魔のまるで何かに吸い寄せられているような様子を見て一同は察する。

「…あいつ生きてるんだらうな?」

「…manaが感じられたから生きてはいるんだらう、多分。」

「酷い光景だ…あまりにも劳しい。」

黒死牟は山の中心部にいた。上弦としての再生能力と呼吸法の達人としての回復力の驚異的な早さは低級淫魔からすれば食べても食べても次から出てくるごちそうのようなもので、本能的に引き寄せられていたのがこの光景の原因だ。

これまで黒死牟の積み重ねてきたものが一気に裏目に出た形となる。

(…どうしたものか…)

一方山の中心部で力を吸収され続けている黒死牟は考える。今は呼吸と再生力で凌いでいるが、状況で言うのなら無限城の一室で上弦か柱の群れを相手しているような状況だ。さすがの黒死牟も数と質の両方の暴力を食らえばいつかは力尽きる。

(…少々危険だが手数を増やすか…)

今は刀（意味深）が一本しかないため体力の減りもそれに準じたものだが手数を増やせばそれだけ失われる体力も増える。

しかしながら一体すら倒すのに時間がかかるであろうこの状況では、仮に一体倒したとしても次の相手と戦っている時間がそのまま倒した相手に回復の猶予を与えることになってしまう。回復した敵がまた戦線復帰など戦場においては悪夢でしかない。

さらに言うならば、時間の経過とともにスタंक達の方にいる低級淫魔もスタंक達が倒れた瞬間こちらになだれ込むことになる。

（……こうなることが分かっていたればクリムも連れてきたのだがな
：奴の大太刀（意味深）ならばこの場において大いに役立ったであろうに……いや過ぎたことか……）

クリムの規格外の大太刀（意味深）ならばこの難敵相手にも通用する可能性が高かった。今更ながらクリムを多少強引にでも連れてこなかったことを黒死牟は悔やむ。

しかしいくら悔やんでも仕方が無いと思考を切り替え、目の前の問題の対処に専念する。

（……刀を体から生やす要領で問題は無いはずだ……）

侍としてあるまじき、刀を体から生やすという戦法……柱たちに敗れてからは二度と使うまいと心に決めていた技ではあるが、今は剣士の戦いではない。それにこんなところで死ぬのは本意では決してない。意を決して体を変化させようと試みる。やり方は単純だ、そもそも鬼というのは新たに手足を生やすのは朝飯前な種族で、黒死牟の刀を体から生やすという戦法ももとはと言えばそこから派生及び発展したものだ。刀（意味深）を増やせない道理はない、そしてそれをいざ実行しようとして……

（……何だこの醜い姿は……こんな姿になってまで生き延びたいのか……違う私は……）

黒死牟は幻視してしまった、異形の侍ではなく全身から刀（意味深）を生やし、あまりにも醜悪な姿へと成り果てた自分の姿を……

『生き恥』や『惨めな化け物』、『お劳しい』という言葉すら生ぬるく感じるほどのその姿は鬼となって久しい黒死牟に感じるはずのない

強烈な吐き気をもたらす。

「……うつ……私は一体何を……なぜこのようなことを……教えてくれ縁壺……いやお前でも分からぬか……」

「黒死牟!?まだ意識があったか、大丈夫か?」

スタнковの呼びかけに答える余裕もない黒死牟はそのまま崩れかける。その様子を見てスタнковはいよいよ不味い状況になってきたと危機感を強める。

(畜生……ここまでだったのかよ……)

「ちよつとお!このままだと本当に死んじゃうんじゃないんですか!!」

「まー普通4人で入る店じゃないですからね……」

受付嬢の言葉を聞きクリムは絶望する。やはり彼らは勇気と蛮勇をはき違えてしまったのだ。

(皆さんどうかご無事で……僕には祈ることしかできません。)

天使が人間のために祈るといふ審判の日もかくやという状況。ガラス越しで繰り広げられる光景もそれにふさわしく悍ましいものだった。

(まあ……何だかんだやりたい放題やって楽しい人生だったか……)

薄れゆく意識の中でスタнковの脳裏にこれまでの軌跡が走馬灯のごとく流れ出す。

父親と反りが合わず、剣一本を持って家を飛び出したこと。そのまま冒険者となり、根無し草の生活をしながら世界を巡ったこと。その

中で知ったサキュバス店の魅力に大いに感銘を受け、股間の羅針盤に従うようになったこと。

いつしかエルフにナーガに犬獣人にハーフリングに悪魔：様々な種族だが、同じ志を共有する同士も増え色々と馬鹿をやったものだ。それに加え最近では見た者がいないとされる天使に異世界から来た剣士まで加わった。本当にいろいろなものを見た人生だった。

（ああ、もう一度行ってみたい店もあったんだけどな…あとメイドリーとも一発やつときたかったなあ…）

人生に悔いが無いかと問われれば、絶対にノーだろう。それでも危険と隣り合わせの冒険者家業をやってきたのだ。根無し草の死にざまなどこんなものかと納得しかける。

しかし心の奥底では彼はまだ死を受け入れてはいなかった。

（つて…こんなところで終われるかよ!!お前もそう思うだろ、なあ!!）
薄れゆく意識の中でスタंकは己を奮い立たせ、目覚める自身の一番の相棒に語り掛ける。

いつも愛用している剣は今手元にはない。だが人生の中で誰よりも何よりも自身と共にいた剣は残っている。まだ戦いは終わっていない。

（例え相打ちになっても…いや違うだろ俺は!!俺にはまだ見ぬサキュ嬢がいるんだ!全員と遊ぶまで死ぬるか!!）

相打ちでは意味がない、例え泥を舐めてでも足搔いて生きてみせる!!

それはかつて別世界の地球という星に存在した鬼殺隊：手足をもがれようとも、おのれの命を燃やし尽くしてでも悪鬼を滅そうという信念とは違うもの、生きるために戦う信念であった。

（落ち着け、呼吸を整えろ、こういう時のために呼吸法を習得してきたんだろ!!）

生き残るために必死に役立ちそうなことを思い出そうとする。少しでも長く、少しでも生き残る確率を上げるために。

『型を教えることは出来ない？そりやまた何でだ、常中まで使えるようになったんだぞ。不足ってことはねえだろうが。』

『…いや、貴様の場合は元より培った剣の技がある…無理に既存の呼吸の型に合わせる必要は無い…』

『でも知っておいて損は無いだろ。』

『……そもそも既存の呼吸は元は鬼を滅することを目的として編み出されたものだ…だが貴様は鬼、この世界では吸血鬼と言った方が正しいのか…それだけを相手すればいいわけではないのだろう…』

『なるほどな、確かに俺の相手（意味深）はエルフに人間、獣人、有翼人、淫魔他にも様々な種族だからな。一つの種族に拘るっていうのは性に合わんかもしれねえ。』

『（淫魔？）…然り…挑むべき相手が多岐に渡るであろう貴様の剣技（意味深ではない）に対しては私としても口を出すべきではない…故に貴様の型は貴様自身で見つけるほかない…』

『つまり俺だけの型を見つければ、さらに夜の性活に強くなるってことだな！』

『……そういう話は聞いたことはないが…まあいい…一つ私から言えるのは道を見つけ出すには強い意志が必要だということだ…そのためには一度死の淵に陥る必要があるやもしれぬ…』

（そうだ！あらゆる種族と戦う（意味深）のが俺のスタイルだ!!鬼退治のためなんかじゃない、今こそ俺の本当の道を…）

敵は強大、だが生き残るには戦って勝つしかない。かつて言われたように今こそ己の型を完成させる時だ。

自分の生き方を改めて見つめなおしたスタック。変化はその時に起こった。

それは白いドラゴンだった、白いドラゴンのような何かが自身の剣（意味深）に顕現したのをスタックは確かに見た。

（…何だこれは？俺の剣（意味深）にドラゴンが…ゼルが使った中に

こんな補助呪文は無かったはず。だが幻覚じゃねえ、これは一体？）
もちろんこの店にドラゴンがいないことはスタンクも重々承知しているし、ゼルにかけてもらった補助呪文にこんなオーラを出させるものはない。このドラゴンは本当の意味で道を見つけ、型を使いこなしている証”として顕現している物なのだが、スタンクはそこまでは分からなかった。

だが白いドラゴンのような何かが自身の剣（意味深）を纏う様を見てスタンクは確信する。

この力ならば戦える、状況を切り抜けられる。

「理屈は分からねえが、いける!!今の俺ならば!」

その眼はいつもの気だるげなものとは全く違う、燃え盛る炎のような強い決意と覚悟が宿っていた。

死中に活を見出したのは何もスタンクだけではない。ゼルやブルーズもまた極限状況下で新たな境地へと至ろうとしていた。

（スタンクの奴…そうだよな、こんなところで死ぬるかよ!!）

ゼルは必死に生き残るための方法を模索する。200年以上生きてきた中でもとびつきりの窮地であることは間違いなかったが、それでもこんなところでは死んでいられない。

体感時間を圧縮し、己の感覚を研ぎ澄ませ、何とか敵の弱点を探ろうとする。そしてそこで見た…

（見えた…：マナの流れだけじゃ無い！骨格、筋肉、内臓の働きさえも！これならば的確に攻めることが出来る!!）

普段感じているマナの流れに加え、相手の体の詳しい構造まで読み取り、より効率的な反撃行動に移るゼル。かつて炭焼き一家の親子は神楽を舞い続ける事のみ集全神経を集中する事を起点として到達したが、ゼルはエルフとしては珍しいぐらいに動き回り様々なものを見てきた観察眼と極限状況下における賢者タイムによる明鏡止水の境地でその域に到達した。

(生きる！生きてアイスちゃんど…否、色んな嬢とまだまだ遊びまくる!!そのためにも、負けてられるか!!)

生きようとする意志は何よりも強い。その思いが例えどれほど俗物的であろうともだ。

ブルーズはゼルのように観察眼が特に優れているという訳ではない。しかし己の肉体一つで戦いライオン獣人並みの戦闘力と精力を誇るレビユアーきつての肉体派である彼は、肉体の活性化についても柱以上に心得がある。

この戦いにおいても無論それを使ってきた彼だが、この極限状況下においてそれがさらに飛躍する。

(体が熱い!!全身に力がみなぎるようだ！これならば!!)

今までに感じたことのない身体機能の向上、まるで体の中心からマグマが噴出したかのような錯覚を覚える暑さ。その顔の毛並みの一部は赤く染まっていた。

未来を閉ざさんとする巨悪に追い詰められた者たちの反撃が今始まる!!

* * * * *

「す…スタックさん！ゼルさん！ブルーズさん！黒死牟さん！起きてください!!」

戦いは終わった…彼らの戦いぶりは、鬼退治に例えるのならばたった4人の隊士で同数以上の上弦を道連れにするという鬼殺隊の歴史に残るほどのものだった。だが悲しいかな、相手の…上弦級の数があまりにも多すぎたのだ。

そしてこれは誇り高き鬼退治ではない。敗者は打ち捨てられ、無様にぼろ雑巾のように転がるしかないのだ。

クリムの叫びが雨の中虚しく木霊する。そんな中、黒死牟が辛うじて意識を取り戻す。

「……天の使い……クリム……ならば私はまだ生きていますのか……」

「そうですよ！生きてるんですよ！！だから頑張ってください！！」

「……不覚であった……」

起きたと思ったらすぐに気を失う黒死牟。鬼としての再生力ももうほとんど残っていない。

「あ、ちよつと起きてください！！目を覚ましてください！！こんなところで死んじゃだめですよ！！」

クリムは決して忘れないだろう。彼らの雄姿を……スタンプが見せたドラゴンのごとき戦いぶりを……ゼルが見せた見事なまでの攻めを……ブルーズが見せた生命力あふれる奮闘を。そして上弦の鬼に恥じない再生力と長きにわたり鍛え抜かれた技をもって最後まで奮戦したが力およばず次の客が来る直前、黒死牟がもたえ苦しむようにガラスを両手で掻き巻いていた姿を……その黒死牟に地獄の餓鬼の如く、群がり覆いかぶさり貪る低級淫魔たちの姿を……

鬼：黒死牟

零

……地獄……餓鬼の群れ……これが罰……

* * * * *

「いやーやっぱ嫌なことを忘れるにはこういうのが一番だな。」
「結局こういう店に寄っちゃうわけですか……」

「そう固いこと言うなって、息抜き（イキ抜き）はたまには必要だろ？」

「いつも抜いているような気がしますが、二重の意味で…」

「……同感だ…」

火山のふもとにある町に予定よりも早く着いた一行は、旅の途中で思い出した嫌な記憶を忘れるため、いつもの如くサキユバス店探しを行っていた。

そんな彼らだが、今は別段プレイの最中ではなく腹ごしらえを行っていた。

「火属性でもないのにこんな店に来るなんて、ほんと好きねえ♡
熱くないのお？」

「熱い。」

「す、少し火力を落としたりできない？」

「無・理♡」

訂正しよう、これもプレイの一環なのかもしれない。

「何はともあれ早速。」

「あんツ♡」

箸でつかんだ肉を焼き肉の要領でサラマンダー娘の胸に当てる。すると内包される熱量により肉は見る見る焼き上がり、ちよūdい焼き加減となった。

「うん、旨い！」

そうはいつてみたものの、スタンプにはただエロいだけの焼き肉にしか感じなかった。もしも地球の日本という国の三元日にやっている格を決める番組のように目隠しをされて普通の焼き肉と食べ比べろと言われれば、まず正解する自信はなかった。

しかし違いが分かる者たちもいた。

「マジだ!!めちやくちやうめえ!!」

「魔石なんかよりもはるかに濃厚な魔力が染みわたってますよ!!」

「……肉を焼いて食せば…効果が下がるとばかり考えていたが…これは確かに…寧ろ生肉よりも…」

「エロいだけじゃねえな、ヤバいぞこれは…」

「火炎魔法じゃこんなな魔力は残りませんよ!!」

「……なんと…妖術でも不可能なのか…」

「ああ、普通は焼いた時点で分散してしまう。ここまでしつかり残ってるのは俺も初めてだ!!」

「この魔力厨共め…」

盛り上がりを見せる連中に危機感を覚えたスタンは何とかエロに話を戻そうとする。

「フフ、この乳首の形が浮き出た焼き加減、実にエロくていいよなあ。」

「ちよつとスタंकきーん…」

「(こ)もいいよな!!」

「いやそれどこの焼き跡ですか…なんか毛のようなものが？」

具体的にはアワビという貝類に似た形と毛のような何かが付いた肉だった。

「まだまだ!!暑さに耐えられるうちにガンガン行くぜ!フランクフルト二本くれ!!」

悪乗りは一度始まると加速し続ける。そんな中黙々と食べていた黒死牟は何かを思い立ったのかおもむろに動き出す。

「お、黒死牟もフランクフルトいつとくか？」

「……いや、それはいい…ただ確かめたいことがある…」

そういうや否や黒死牟はサラマンダー娘の体に手を当てる。

「ああん♡ダ・イ・タ・ン…」

「……なるほど…確かに凄まじい熱量だ…童磨の冷氣にも耐えうるやもしれぬ…」

「黒死牟さん!？」

「オイオイ何やってんだ黒死牟!？お前にかかっているのは日光に対する耐性で火には…」

慌てるゼルとクリムに対して黒死牟は感心したかのように感想を述べると、サラマンダー娘を触った方の手を上げる。その傷は既に塞がっており、見た目ではとてもやけどをした手には見えなかった。しかし熱はまだ残っているようで内部まで再生しているかは定かでは

なかった。

「ああ、そうか触れたそばから再生しているのか。いつ見てもとんでもない再生力だなオイ。」

「……その通り……だから直で確かめたかった……知らぬで後悔など……繰り返すべきではない……」

思い出されるは一週間前の苦い記憶。慢心の結果知らぬで負けたなどという言い訳などしたくもない。故に自分の体を張ってでも知るべきことは知ることにした。

「しかし熱い……そろそろ限界か。」

「俺もだ……息は耐えられるが暑さが和らぐわけじゃないからな。」

その後フランクフルトを使い一通り遊んだ二人だったが、如何に呼吸法をもつてしても暑さ自体を緩和する効果などありはしない。

「クリームは……なんか別のところが限界って感じだな。」

「ほつといてください!!」

すっかり熱くなってしまうた大太刀（意味深）を押さえながらも見るからに限界といった様子のクリーム。

「ねえどうするう？お兄さんたちい♪お望みならこの後別室に行つてえ……抱くことも出来るわよ♡」

「「死んでしまうわ!!」」

当然の意見であった。彼らの剣（意味深）は耐火性があるわけではない。しかも失えば二度と帰ってこないのだ……というよりそもそも命の危機があった。

しかしサラマンダー娘は納得しない。

「えー？こんな半端なところでおあずけえ？アフター半額でいいからさー」

「「そういう問題じゃねえ!!命に係わるんだよ!!」」

「じゃあさそちらの天使ちゃんと六つ眼のお兄さんはどうかしらあー？特に天使の子の方はすっごく辛そうじゃない!」

「え……あ……その……」

「別室行つて続きしましょ？ね♡」

そういつてサラマンダー娘はクリムを抱きかかえる。しかし不思議なことにクリムは体はもとより服すら燃えることが無かった。

「あいつ火耐性あんのかよ…」

「羨ましいいな…てかあの服何でできてんだ？」

「…確かに興味深い…天の衣…実に不可思議だ…」

「あとそっちの六つ眼のお兄さんはどうするう？私以外にも持て余してる子はいるけどお？」

六つ眼のお兄さん…誰のことかは今更言うまでもない。大方先ほど触ったときに見た目上は火傷をしなかつたので火に耐えられると判断されたのだろう。

「言われてるぞ黒死牟、どうするんだ？」

「今回は煽りじゃなくて引くべきだ。いくら再生力が高いといつても火が効かないわけじゃないんだ、あまり無理はするなよ。」

さすがに今回は自分たちも無理なので突っ込めとは言う気にならない二人。しかし黒死牟の返答は意外なものだった。

「…より詳しく知りたい機会か…良かろう…ここまで言われれば抜かねば無作法というもの…」

「さつすが!!乗りがいい人は好きよお♡」

「おいおいマジかよ…勇氣は買うが、どうなつても知らねえぞ。」

「い、一応言っておくがレビュー宜しくな…」

「…任せておけ…心頭滅却すれば炎も問題ない…」

一週間前に続き無謀なチャレンジを試みる黒死牟を見送る二人。ハッキリ言つてその背中は無謀な挑戦者にしか見えなかつた。

鬼：黒死牟

七

…サラマンダーというのは実に不可思議な存在だ…鬼であれば血鬼術で…魔術師ならば妖術を用いて…同じように炎が出せるのであろうが…ただそこに存在し生きていくだけで同じようなことが出来るとは…もしも太陽の力を…日の光を同じように扱える種族…生

まれながらにして持った種族が存在するのであれば…奴がかつて私に言っていた戯言も少しは意味あるものやもしれぬ…ただ…まぐわうためには心頭滅却し業火に耐える必要があるとだけは…書いておこう

「……この世界には奴の戯言を真実にする者がいるのだろうか…とても可笑しくはないやもしれぬ…」

「最後までヤツたのか…お前…同じレビユアーズとして尊敬するよ。」

「ただ、言いたくはないんだけどな…」

「お前ら臭い!!」

「全身から焼肉臭がひでえ!!」

「な…仕方ないでしょ!!」

「……解せぬ…」

縁壺の実写化は役者が死ぬ

食酒亭にある席に二人の男が異様な雰囲気で行き合う。二人はそれぞれ羽ペンを持ちながら、綺麗な所作で何かの文章を書いていた。

「……」

「俺のメイドさん…将来を誓い合ったのに、一緒になろうって言ったのに…畜生、チャラ男め!!ふぐうううううッ」

机に突っ伏しながらスタンは滂沱の涙でテーブルを濡らす。そしてその前にも同じようなことがあったのかテーブルにはすっかり涙の跡が染み付いていた。この様子からずっとこんな感じだったらしい。

その醜態ぶりに元々不機嫌であった黒死牟の機嫌がさらに悪くなる。そしてその不満は爆発する。

「……貴様は先ほどから度が過ぎる…全ての種族の遊郭に行くのではなかったのか…更なる高みへの…開けた道をも…自ら放棄するとは…軟弱千万…」

仮にも俗欲で《技》を見つけたスタンクが腑抜けている様に、呼吸法を教えた身としての怒りの言葉をスタンクに贈る。

その言葉にスタンは死んだ魚のような目から怒りに満ちた目へと変わる。落ち込んでいるのは事実だがそれでもレビュアーズとしての道まで自分から放棄したつもりはない。何よりレビュアーズ仲間にごここまで言われて黙っていられるほど、人間が出来ていない。

「何だと! テメエに何が分かるってんだ!! 将来を誓い合った相手を寝取られたこの俺の気持ち…分かるはずねえだろうが!」

「……貴様があの店でどのような遊びに興じていたかは知らぬ…だが…あのような粗末に過ぎる演技をする店に影響される者が軟弱千万であることは自明の理であろうに…」

「ああ!? あれのどこが大根演技だったんだ、目と頭が腐ってんじやねえのか?」

「……少なくとも今現在進行形で腐っている貴様よりはまともであ

るつもりだが…」

売り文句に買い言葉、その応酬もそこそこにスタックはガバつと椅子から立ち上がる。

「言わせておけば…上等じゃねえか、表出やがれ!!」

「……ほう、すっかり腑抜けていたと思っていたが…面白い…あの茶番よりもこちらの方が楽しそうだ…」

「ちよつ、ちよつと!二人とも喧嘩は他所でやってよね!!」

「……無論だ…このような場所で戦うなど…無作法の極みというものの」

「テメエのその腐った目と頭に衝撃を与えたら少しはマシになるか試してやるよ!!」

料金を置いて店を去った二人その様子を見てクリームは何事かとゼルに尋ねる。

「一体あの二人は何を揉めていたのでしょうか?話を聞く限りでは前に行った店のことみたいでしたが。」

「お察しの通りだと思っぜ、こいつを見てみなよ。」

ゼルはクリームの言葉を肯定すると、スタック達が去った机に残された二枚の紙を見せる。

人間：スタック

6

こだわりの寝取られ専門店。惚れた女(という設定の嬢)が寝取られる様を見てマジホでオナる訳だが…ぶつちやけシコれた。いつばい出た!我NTRに開眼せり!

…でも感情移入しすぎてずっと気分が悪い!開けちやいけない禁断の扉を開けた後悔が止まらない!やめときや良かったよ畜生オ!

鬼：黒死牟

参

背徳の極みとも言える店ではあるが…小道具の揃えは目を見張る

ものだった…しかしながら寝取り役の役者の演技は見るに堪えぬ…性格の違いは最初から理解しているためその部分の奴との違いは目をつむるが…それを加味しても…奴を僅かながらも再現しきれておらず、怒りすら込み上げる…龍のような戦力を用意できるのならそのような人材を使えば少しは良くなつたのではないかと言いたい…

「アンタたちはまた…」

紙に書かれたレビューを見てメイドリーはジト目となる。一方のクリムはその内容を吟味して首をかしげる。

「…お二人のレビューどこがおかしいですね。」

「どこが？いつものスケベな店の感想じゃない。単に当たりか外れかでもめただけじゃないの。」

「最初は僕もそう思いました。でもやっぱり変です、この二人のレビューで対極なのはお店の嬢の方についてじゃないんですよ。黒死牟さんがボロクソにけなしているのはあくまでも寝取り役の役者さんについて何ですよ。」

クリムの説明にゼルは満足げに頷く。

「その通り、クリムお前も大分成長してきたじゃないか。レビューアーズの一員として嬉しいぜ。」

「単に汚染が広がっただけじゃない!!あまりクリム君に変な事教え込まないでよ!」

「まあまあ、そう言うなって。話の続きだがスタंकと黒死牟の意見の相違は十中八九寝取り役の演技力の違いだ。」

「それってそんなに重要なことですか?」

「重要も重要、嬢ならば見た目がイメージ通りであるならば多少演技が大根であろうとスルー出来なくもないが、寝取り役はそうもいかない。そうだな…例えるならば寝取り役にチャラ男を指名したのに、実際は自分よりも立派な聖人君子を絵にかいたような奴が出てきたらお前らどう思う?」

「それは…何というかイメージが壊れるというか、『仕方ないかこの人なら…』とか変な気持ちになっちゃいそうですね。」

「分かりたくないけど、何か分かるのが腹立つ。確かに自分よりも

綺麗で性格のいい人だったら怒り以外にも諦めの感情ができてしまう……」

「おまけに黒死牟は寝取り役のモデルとなった人物との性格の違いは許容しているにもかかわらず酷評している。対してスタंकの方はこれまで見たことが無いくらいに精神にダメージを負うくらいに役者の演技が優れていた。……でもこれって普通有り得ないだろ。」

「そうですね……いくら同じ店でも当たり外れがあるといっても種族的な問題とは関係なしに演技面で差が出過ぎるのはやっぱり変です。どうしてこんな違いが出たのでしょうか？」

「さてな……スタंकがどういうシチュエーションを望んだのかはメイドという言葉聞けばある程度イメージできるし、黒死牟の方もどのような案で行くか最後に聞いた限りでは変なシチュエーションではなかったはずだ。こればかりは本人たちにしか分からねえ。」

「アンタら何どうでもいいことで真剣に考えこんでるのよ……」
スタंकと黒死牟の意見がなぜここまで食い違ったのか、それは一件の依頼から始まった。

「ついに来ちゃったな……」

この店に来るまでに二日間を要した、長旅になるわけでもなく拠点から歩いて数時間といった距離にもかかわらずだ。いつもならば股間の羅針盤に従い思い立ったらすぐ行動が彼らのスタンスであったが、ここに来るまでには相当の覚悟が必要でありそのため、今回は猶

予期間を設けることにした。

「ああ、今回ばかりは尻込みするのも仕方ねえ」

ゼルは全属性耐性持ちの強力なモンスターと対峙したかのよう
に冷や汗をぬぐう。しかし覚悟を決めたからには一歩も引くつもり
はない、その顔つきはまさに戦士のそれであった。

「ボクは興味なかったけど、ゼルの提案が面白かったからついね！」
「フッフ、こういう趣向も良いではないか、血がたぎるとい
うもの
だ
！」

一方でこの店に来ることにノリノリであった者たちもいた。悪
戯好きにカンチャルに、人を墮落させたり貶めたりすることに喜
びを覚える種族である悪魔サムターンはそれぞれ実に楽しそう
な笑みを浮かべていた。

「そういうテンションで入る店じゃねえだろ…」

「何を怖気づいておる、天使の小僧でもあるまいし。」

「クリームは仕方ねえだろ、あいつの性格だとマジで再起不能
になる可能性がある。」

クリームは店の概要を聞いた瞬間、絶対に理解できないという
顔をしてた。天使でなくても理解できないという者は多いだろ
う、その看板に書かれている文字を見れば苦手なものは脱兎の
ごとくその場から離れるに違いない。

《禁忌と喪失のNTR専門店―扉のスキマ》

「……所詮は演劇であろうに…その程度で怖気づくとは…
軟弱な
…」

黒死牟はごくごく自然体で溜息を吐きながら呟く。流石は妻
子を捨て、子孫を切り殺した男、格が違った。

「今回は依頼されての取材だ、ここから先はもう引き返せな
いから
な。」

「わざわざ聞かなくても分かっている、今から楽しみで仕
方がな
い。」

「その悪魔的考え方、羨ましいぜ…」

サキユバス店をレビューしてからというものの、『今後の参考のために』と店の調査を依頼されることがあった。既に必要経費として通常サービス分の料金を貰っているために仕事を完遂しないという選択肢はない。そんなことをすればレビューアーズとしての評判に傷がつく。

『俺、今日寝取られます…』そんな悲壮な決意をもってスタンは店の扉を開けた。

「いらっしやいませ〜《扉のスキマ》へようこそ〜」

どこか気の抜けた声で一行を迎えたのはドラゴンらしき女だった。立派な二本の角を頭に生やし、丈夫そうな鱗をあちこちに帯びている。

「まず最初に確認しておきますけど〜あくまで店内の行為はプレイであつて〜現実とは異なります〜なので怒って暴れたりしないでくださいね〜」

静かな威圧感を携えながらドラゴン嬢の口内で炎が揺らめく。どうやら彼女は店の用心棒もかねているようだ。当然スタンク達も仕事で来ているため暴れるつもりは毛頭ない。

「……龍種か…興味深いものだ…」

無いつたら無いのである!!

「レビューアーズ名義で予約しているはずなんだが、シロップちゃんいるっ…」

「あ〜ご予約いただいていたレビューアーズさんですね、一番人気のシロップちゃん居ますよ〜」

「じゃあ俺はシロップちゃんに頼むわ、あとこれプレイのシチュエーション詳細」

スタンは懐から文書を取り出しドラゴン嬢に渡す。

「いけますよ〜うちの子たちは演技力重視で研修してますので〜。特にシロップちゃんは女優顔負けですから〜シロップちゃん、力作付きでご使命ですよ〜」

文書に目を通したドラゴン嬢が手をたたくと、奥から清楚な感じの嬢が現れた。その見た目とは裏腹に白エプロンのメイド服が一部

パツツンパツツンで怪しからん程に揺れまくる。一行の目がその様子にくぎ付けになる

(……奇妙な……雰囲気の娘だ……この地と一体化しているような……もしも座敷童というものが存在するのであればこういうものなのだろうな……)

……一人はやはりズレたことを考えていた。

「シルキーです、どうぞお見知りおきを。」

「想像以上に想像通りで感動する……想像するだけで汗が止まらねえぜ……二日間で考えつくした思い出が蹂躪されるなんて!!」

「お前……最近ずつと何かを考えこんでたのってまさか」

「シチュエーション重視の店って聞いてたから、本気出してみた。」

「……貴様のその執念……敬服するべきか……呆れるべきか……」

「そういう黒死牟はどうなんだ？まさか何も考えていなかったとか言わねえだろうな。」

ゼルからの質問に黒死牟は堂々と答える。

「……店に来る直前に即興で考えた……問題は無いはずだ……」

「大丈夫なのそれ？シチュエーション重視ってことは台本も大事なことだよ。」

「……問題ない……サムターンにも確認を取った……ただ衣装や小道具があるかは疑問だが……」

「大丈夫ですよ〜衣装と小道具もあつたはずなので、この内容でも問題ないですよ〜」

さすがに黒死牟も無策で突っ込むほど愚かではない。悪魔としての経験が豊富なサムターンに直前で内容が大丈夫なのか確認を取っていた。相談される方としてはたまつたものではなかったが。

「おいサムターン、何書かれてたか教えろ、このすまし顔がどんなストーリー考えたか気になる。」

「それは……さすがに言えないが、まあ割と王道を攻めてきたなどだけ言っておく。それに少々手を加えた、問題はないであろう」

「何だよそれ、まあいい俺は俺だ。やるからには全力で寝取られを楽しんでやる。」

「……愚さが極まっているが、その意気込みだけは評価しよう……」
「のめり込みすぎるなどはもう言わねえ、骨ぐらいは拾ってやる。」
「スタンク絶対に碌な死に方出来ないね。」
「案ずるな、たとえ死んでも執念のレビューは皆の心の中に生き続けるであろうよ。」
これから自分たちも寝取られるくせに随分とのんきな一行であった。

もう顔も良く思い出せないが妻とはいわゆる恋愛婚ではなかったのは確かだ。戦国の世の武家だ、お家同士の同盟の結束を強くする意味合いが大きい政略婚ではあったが、それでも仲が悪いわけでは決してなかった。

少なくともあの頃は穏やかだった、強い劣等感を抱く対象であった弟のことを薄れさせるぐらいには。だが、その平穏は長くは続かなかった。

『もうすぐあの方がお戻りになられます……このようなことは……』

『その割には随分楽しそうにされておられましたか？』

『そんな……私は貴方が恋しい訳ありません!!私はある方が帰ってこられるまでの間が耐え難くて……』

『故に兄上に似た私とこのような行いを……全く兄上が見たらなんとおっしゃるか。』

『あの方のことはおっしゃらないでください……』

『おっとこれは失敬。では私と兄上、比べてみてどちらの方がよろしかったかな?』

『あんツ……ああ……そんな……いじわるなことを』

『私はどちらが良かったか聞いているのですよ、言わないと止めますよ。』

『○○さんの方が……』

『ん、何です?よく聞こえませんか。』

『○○さんの方が、あの方よりもいいですう!あの人の逸物よりも○○さんの方がずっと!!』

そうして二人の男女が一つになっていると、ある人影が現れる。その人物は○○と呼ばれた男とうり二つの顔つきをしていた。

『あ、あなた様!?!』

『おやおや兄上、生きておられましたか。残念……もといご壮健そうで何よりです。』

『な、貴様は!?!旅に出たはずではなかったのか!!』

『ええ、その道中で偶然にもここに立ち寄ることになりました……こうして奥方様の世話になっていたのですよ……色々。』

『……あつ……○○様ツ……』

『では兄上も戻ってこられたので私はこれで失礼する。』

『待て、勝手に失礼するな!貴様がここで何をしていたか説明するのがまだであろうが!!』

※実際の漫画に登場する人物本人とは性格が大きく異なります、当然本人たちではございませんし無関係です。そのことを何卒ご了承下さい。

(……分かつてはいたことだが……違和感が強すぎる……絶対に奴はこのようなことをしないであろうな……まあ考えていても仕方ないか……) 一連の劇を鑑賞しながら黒死牟はため息をつく。

兄の嫁と弟が結婚した事例は黒死牟が生きた時代にもあった。有名な例では初代薩摩藩主・島津忠恒(家久)の正室・亀寿は、最初の

夫であり忠恒の兄・島津久保が亡くなった後、忠恒に再嫁していたりする。黒死牟が即興で考えたのはそれを少し背德的にしたものだ。勿論いまさら言うまでもなく、当たり前のことだが彼の弟はこの役のような性格ではない立派な聖人君子だ。

(……即興でこのようなことが思いつける当たり、私がいた時代もなかなかにおかしかったのだな……)

《一盗二婢三妾四妓五妻》という言葉が地球の日本で存在していたが、今回ののはそのうちの《一盗》にあたる。人妻との恋であり、《一盗》する男を間男とも言う。そしてサムターンが言うには自身が対抗心を強く抱いている相手を間男役に据えればより効果的とのことだった。

もちろん最初は渋ったが、よくよく考えれば弟はこのようなことをするはずがないので逆に作り話としてスルーするにはちよいどいいかと思いいこの案を採用した。

(……しかしよく道具をそろえたものだ……衣服もこの辺りでは目にしないものであろうに……)

黒死牟はプレイ部屋を見渡して感嘆する。シチュエーション重視という謳い文句にたがわずこの店の揃えは非常に良かった。部屋の作りといい衣服といいこの辺りではあまりお目にかかれないものばかりであったのだが、何でもオーナーの意向であらゆる状況に対応できるよう、遠く離れた東の地から取り寄せたことがあったらしい。

『もういい!! 貴様を切り捨てる!』

『ほう、兄上が私を斬ると? 一度も私に勝てたことが無いのに随分と殊勝な……この〇〇感服いたします。』

もう我慢ならぬとばかりに寝取られ役の男優が日本刀を模した摸擬刀を抜き斬りかかろうとする。『兄上がこの国一番の侍になるならば、私は二番目の侍になりたい』という出来た弟ならば絶対に言わない台詞を吐きながら、弟役の男優も摸擬刀を構え、応戦の構えを見せる。

(……刀は実物ではないか……まあ当然か……殺生をするわけではないからな……ん?)

男優二人の剣劇を見ながら、黒死牟はある違和感に気付く。通常ならばここから兄役は弟役に斬られるが致命傷には至らず敗走し、そこから本格的に寝取られることになる予定であった。ちなみにこの案はサムターンが後から付け足したもので、憎たらしい相手が剣の腕でも勝っているならばより一層憎らしくなるであろうという悪魔らしい考えだった。

無論そのシチュエーションは黒死牟も知ってはいるのだが、その寸劇にはどこかおかしい部分があった。

(……) 奴ら…演技とはいえ戦う気があるのか…遊んでいるわけではないはずだが…)

演技とはいえ仕事でもある、故に手を抜いていいという訳では決していない。もちろんこれは殺し合いではないが、それでも最低限度のぶつかり合いというものはある。でなければ劇としては成り立たない。

(……) やる気が無いのか…はたまたふざけているのか…どちらだ？)

最初のころの演技と打って変わってのやる気のない大根演技にさすがに黒死牟もイライラゲージが溜まりだす。

役者たちの名譽のために言っておくが、彼らは決してふざけているわけでも遊んでいるわけでもなかった。彼らは彼らなりに頑張って剣劇をやつてはいたのだ。

…問題は黒死牟の要求するレベルがあまりにも高すぎたことだ。

(……) 役とはいえこのような者が…奴を演じているだと…あり得ぬ…)

黒死牟とて元となった人物と同レベルのことを求めているわけ決していない。これが劇であることは理解しているため、その要求値も可能な限り最小値にとどめてはいたのだが、悲しいかな、その最小値ですら常人にとつては雲どころか大気圏以上に高い存在なのだ。

(……) もう我慢できぬ!!)

あまりの三門芝居っぷりにイライラが頂点に達した黒死牟はそのまま立ち上がる。

「……貴様ら…さすがに度が過ぎるぞ…」

「ど、どうなさいましたかお客様？」

「なんか俺たちの演技で不味いところがありましたか……」

見るからに不機嫌といった黒死牟に男優の二人はビクリと立ちすくむ。

「……先ほどから何だ……その剣の腕は……見るに堪えぬ」

「剣の腕？ 役の性格が違い過ぎるとかそういうのではなく、剣の腕？」

「……性格の違いなど最初から理解している……そのような腕で奴を演じるとは笑止!!」

まさかまさかのキャラの違いではなく剣の腕というあまりにも意外過ぎる難癖に男優の二人は固まる。黒死牟はそんな二人にお構いなしにさらにまくしたてる。

「……最低限度の役すらこなせぬとは……それでも役者のつもりか……出直せ」

黒死牟の一喝に男優の二人は顔を見合わせる。そして心の奥からふつふつと煮えたぎるものを感じる。

「上等じゃないですか!! やってやりますよあなたが望む役ってやつをね!!」

「……ここまで言われて黙っているのは男……否! 役者としてのプライドが許しません!! どこがどう駄目だったか言ってください! 必ず演技切って見せますよ!!」

「……ただの大根役者かと思えば……なかなか言うではないか……いいだろう……ならば指導せねば無作法というもの」

(何なの、この人たち……おかしい、多分何か致命的に間違っている気がする。)

何かよく分からない方向にシフトする3人を見て取り残された女優はついていけなくなる。

こうして悪質クレーマー……もとい黒死牟鬼教官による指導が始まった。

「……遅い……その様な剣の遅さで奴の片鱗を掴もうなど笑止千万

!!

「サー！イエツサー!!」

「……もつと能率的に呼吸できるようになれ……そうすれば自然と動きも良くなる……」

「サー！イエツサー!!」

「……声が小さい……まさかもう息切れしたのではあるまいな？」

「サー！イエツサー!!」

「……少しは良くなったか……そのまま素振りを1000回続けろ……」

「サー！イエツサー!!」

当初の目的を月の呼吸でぶった切り、騎士の訓練かなにかで？と言いたくなるような光景がプレイ部屋で練り広げられる。

訓練が始まったところは黒死牟はすぐにでもこの二人は脱落するだろうと考えていたが、彼らの役者魂は本物だった。拙いながらも何とか食らいつこうとする。

「……今の貴様らに高評価はくれてやれん……壹……いや零だ」

「サー！イエツサー!!」

ちなみに掛け声や教官呼びは黒死牟が考えたものではなくこの二人が言い出したものだ。しかし何となく気に入ったのでそのままにしている。

「……その様な有様では奴を演じるなど……夢のまた夢だ、もつと精進しろ……」

「お客さくん、騒ぎがしたので来てみればこれは一体どういうことですか？うちは騎士の養成所じゃないんですよ」

謎の訓練に勤しんでいると、女優の人から救援要請を受けたドラゴン嬢が何事かとやってきた。間延びした口調とは裏腹に狼藉者は許さぬとばかりに口に獄炎を携えながら威嚇する。

その様子を見て黒死牟は嬉しそうに闘気を出し、生成した刀を構える。

「……丁度いい……貴様らも見ておけ……この程度のことが出来なければ奴を演じるなど不可能だということ……」

「後学のために勉強させて頂きます、教官!!」

「……龍退治とは……心が躍る……」

刀を構えた黒死牟がドラゴン娘へと駆け出す。当然のことながら黒死牟は大立ち回りをしたせいで店を消化不良のまま出禁になる。そして男優の二人は優れた役者となるため騎士となり、のちに騎士団の中で頭角を現すことになる。

「……その話マジか!?!」

「ああ、マジだ。後から黒死牟から聞いたから間違いは無いはずだぞ。」

答え合わせのためにサムターンのもとを訪れたゼルは、一連の騒動の一部始終を聞き大いに呆れる。唯一救いだったのは依頼人のことは誰も何も言わなかったため一応の依頼は達成できたことだが、このレビュー内容ではとてもではないが参考にできないだろう。

「こ、黒死牟さんは凄く演技に情熱的な意見を持った人だったんですね。」

「いや、ただの馬鹿でしょ。」

クリムの気遣いをメイドリーが即否定する。クリムも正直今回の黒死牟の行動はやり過ぎだと思っていたのでそれ以上は何も言わなかった。

「あくまでこれは推測でしかないのだが、黒死牟の弟はとんでもない剣士だったのだろう、それこそ勇者クラスに匹敵しかねない程だな。」

「それで剣技に並々ならぬこだわりを見せる黒死牟は素人の剣技が弟を演じるのに我慢できなくなったと、あいつらしいな。」

「それでそうなった訳ね、求道者というのも大変ね。」

サムターンの話を聞き一行は納得する。一方のクリムはかつて黒死牟が言っていた言葉を思いだしていた。

（黒死牟さんが探したい継国縁壺っていう人、その人が弟かな？きつとそうだと思う。黒死牟さんはその人と会って…）

そこから先は考えたくなかった。黒死牟は剣に生きる者だ、そんな人物が探したい凄腕の剣士と出会って何をするか…そんなことは決まり切っている。自分はどうするべきか、約束通りその人を探す手伝いをし殺し合いの片棒を担ぐか、約束を破り見て見ぬふりをするか、答えは出なかった。

「とりあえず、あまりにもバカバカしいが理由が分かったからには止めねえとな。クリムお前は どうする？」

ゼルの言葉にクリムは思考の海から回復する。そうだ、先のことも重要だが今喧嘩している二人を止めなくては…考えをいったん心の奥底にしまいクリムは答える。

「決まっています、止めに行きましょう！」

街から離れた丘の上にスタックと黒死牟はいた。周りは二人が散々暴れまわったことを裏付けるかの如く荒れ果てており、両名がただ者でない証のようであった。…まあ戦っていた理由はこれ以上ないぐらいにばからしいものではあるのだが。

「……中々に楽しめたが…もう終わりか…」

「うるせえ…ただこうやって暴れてたら馬鹿らしくなったただけだ。」

暴れ疲れたといった具合に大の字に横たわるスタンクは悪態付く。

しかしその顔は机に突っ伏していた時とは違い少し晴れていた。

「考えてみれば、あれはあくまでそういうプレイで深く考えるべきじゃねえのかもな…ま、完全に吹っ切れたとはいえねえけどよ。」

「……軟弱だな…」

「目が腐ってるやつに言われたくはねえよ…つか、お前あの店でどんなプレイを頼んだんだ？まだ聞いてねえぞ。」

「……それは…」

「黒死牟さーん！スタンクさーん！ご無事ですか？つてボロボロじゃないですか!!」

「おーおー派手に倒れて、しかもすっきりした顔しやがって。実は隠れて二人でサキュバス店に行つてたとか？」

黒死牟がスタンクにプレイ内容を話そうとしたとき、見知った人影と声が現れた。

「コイツと二人でか？あいにくそんな気分じゃなかったがな。」

「……然り…とはいえ中々に面白かったがな…」

冗談も大概にしろといったばかりにスタンクは気だるげにその場から立ち上がる。

「あー暴れまくったら腹減っちゃった…おい黒死牟、続きは食酒亭で聞かせろよな。」

「……いいだろう…」

黒死牟のプレイ内容を聞いたスタンクは酒を片手に大いに騒ぐ。

「だははははははっ!!え、何！剣の腕があまりにもお粗末で寝取り役の役をさせられないから鍛えてたら、出禁になった!?!お前マジで

ぶっ飛んでんな!!」

「……重要なことだ…貴様こそあれだけ腑抜けていたのは何だったのだ…あの無様さに比べれば私の方が幾分か真面だと感じるが」

「いや、何というか…その話を聞いていたら馬鹿らし過ぎてどうでも良くなってきたわ!ぷっ、くくくくくく思い出しただけでも頭おかしいぜ!!」

食欲が完全に戻ったスタンは黒死牟の話聞き爆笑しながら肉を頬張る。

「いやー腹が満ちてきたら一発スッキリしたくなってきたな。どうだいメイドリーちゃん今夜…」

「何か言った?」

「いえ、何でもアリマセン。」

不愉快そうに顔をしかめるメイドリーを見てスタンはさすがにと引き下がる。しかしそれで大人しくしているような男ではない、次善策をすぐに打ち出す。

「となると、憂鬱な気分を完全に吹き飛ばすためには…あの店だな!!最後に残ったこの暗いものを明るく光で吹き飛ばすとするか?」

「えーあの店ですか…僕は嫌ですよ!!」

「クリームはあの時めっちゃ光ってたよな。オークより立派なものがさ!!」

「そこは別にいいん…いや良くはないですけど、全部丸見えなんですよ!!恥ずかしくて死ぬかと思いましたよ!!」

思い出すのも恥ずかしい思い出しながら、クリームは顔を真っ赤に染める。

「……光…その店はどうのような店であつたか詳しく聞かせろ…」

「ほう、黒死牟教官はウィルオーウイスプさんのお店に興味津々でおられる。クリーム君説明してあげなさい。」

「僕がですか!?!勘弁してくださいよ…」

スタンの無茶振りにクリームは黒死牟の顔を見る。できれば外してほしいという願望交じりであつたが、真剣な表情でじつところちらを見てきたため観念し詳細を話し出す。

「え〜つとですね、あの店はウイルオーウイスプという光の精霊さんが経営するお店でして、その何といたしますか：いわゆるら、乱交をする店なんですよ。」

「……光の精霊とな…続ける…」

「普通でしたら光が強すぎて眩しいらしいんですけど：僕の場合は全部見えてしまうので…とても恥ずかしかったです!!」

「ちなみに視界だけならば《透き通る世界》を見れば確保自体は出来るぜ。ただあれはしんどいし、見えなくてもいい情報まで見えてしまうから正直お勧めできないな。」

「…随分と興味深い話だが…一番聞きたいのはその中に太陽の光を扱える者がいるかどうかだ…どうなのだ？」

「あの店にはどうか分からないが、そういう種族はいるぜ。」

ゼルの言葉に黒死牟は目を見開き深く考え込む。いるかもしれないと予想はしていたが、実際にいると聞くと驚きはさすがに隠せなかった。

「そもそも太陽光自体は様々な波長の光の集合体だ、それと同じ構成の波長を発する種族がいれば例えば日の光が届かない場所でも太陽があるのと同じ効果を發揮することが出来る。」

「……博識だな…その様なこと…今まで考えもしなかった」

「魔導士デミアの研究論文に書いてあったんだよ、事象の理解は魔法の基本だからな。つか自分の弱点くらい詳しく調べておこうぜ。」

「……言葉も出ないな…しかしあの女、やはり名だたる存在であつたか…」

人間時代は当然のことながら、鬼になってからも今の今まで日光はあくまでも弱点として忌み嫌う対象としか見てこなかった。

そもそも自身がいた世界では日光の力など太陽そのもの以外では、日輪刀の原料かそれを技によつてさらに発展させた赫刀ぐらいしかなかった。その二つでさえ、無限とも思える再生力を持つ男を殺しきるには至らなかつたのに、日光の仕組みとそれを生まれながらにして扱える者がいることはとにかく衝撃だった。

「……奴が言った戯言…形は大きく違えど…顕現していたとみるべ

きか」

「時々黒死牟さんがおっしやるその方ってどのような人だったんですか？僕は気になります。」

「…その様なことを聞いてどうする…」

「探すのに情報はあつて困らないかと…」

黒死牟の鋭い視線にクリムは若干おびえながらも、今日のことがあったため勇気を出して聞くことにした。いずれにせよどのみち聞かなければならないことであつたが、心の奥底にしまったものは隠しながらも嘘は言わずに質問する。

その様子を見て黒死牟は血酒を一口飲み答える。

「奴は…継国縁壹は私の双子の弟だ…風貌は私の目を真ん中の二つ以外をなくしたものと思えばいい…」

「お前弟とか居たんだ、初耳だぞ。」

「それでそいつとどんな因縁があるんだ？当主の座を奪われたからそのお礼参りとか」

いつの間にか話を聞いていたスタंकとゼルも興味ありげに様子进行うかがう。

「…いや、継国の棟梁は私であつた…奴は齡十になる前に家を出て…再会したのは元服を経て家を継いだ後のことだ…」

「やっぱお前、いいところの出だったか、スタंकと同じだな。」

「このおしやべりエルフが…余計なことを」

「スタंकさんもだったんですか！通りで字が綺麗だったり時々妙にきつちりしていたんですね。」

「…昔の話だ、もう関係ねえ。それよりどうしてお前は弟を探し出したんだ？別の世界だったらもう家とかそんなの関係ないだろ。」

「…確かに家は関係ない…継国の名はもう没落して久しいはずだ…私が奴に会うのは《あの時》に出来なかつたことを再開するためだ…」

「あの時できなかつたこと…決闘ですか？」

「…早い話がそうだ…私は私としての決着を奴と付けなければならぬ…」

「やっぱりそうでしたか…」

探し人のことを語る黒死牟の顔は様々な感情が入り乱れたものだった。嫉妬、後悔、羨望、憎悪…そしてその中に僅かながらの愛情が混ざっているのをクリームは感じた。

「かく暗い暗い！闇の呪文よりも暗いぜ!!それでもお前レビユアーズの一員なのかよ、同僚として恥ずかしいぜ!!」

「……そういう貴様はどうなのだ…仮に貴様に自身よりも強い双子の弟がいて棟梁の座にそいつの方がふさわしいとしたらどうする…」

「双子の弟だって？結構なことじゃねえか、俺より優秀で年も同じなら余裕でそいつに全部任せて好き勝手出来るってことじゃねえか。」

「ス、スタンクさん!？」

一触即発になりかねないスタンクの言葉にクリームは大いに焦る。しかしクリームの心配とは違い黒死牟はかすかに笑いながら答えた。

「……なるほど…貴様らしい俗物的な考えだ…だが…そうだな…もしも私が先に家を出ていたら…何が…」

黒死牟は考える。寺に出されても自分ならばどこかの段階で寺も飛び出していただろう、自身が弟よりも先に家を飛び出していたとしても身を焼く嫉妬の炎からは逃れられなかっただろう、それでもだ、もしも家を離れたのが自分で継国を継いだのが弟であれば継国の名は続いていったのかもしれない。もしも家を離れたのが自分で継国を継いだのが弟であれば自身は鬼にはならず、生き恥を晒すことは無かったのかもしれない。すべては仮定の話だ

「俺は俺だ、過去をいちいち振り返らねえ。お前もそうしたらどうなんだ黒死牟。」

「……残念だが…そう簡単にはいかぬ…」

「そうかよ、まああれこれ言うのは性に合わねえから好きにしな。」

「…そうだな…私も好きにするつもりだ…私は私の意志で…奴に挑む…ただそれだけだ」

随分と話してしまった、本当はこんなことは話すつもりはなかった。血酒で酔ったせいなのか、太陽の力を持つ種族がいることを知

り、『私たちはそう大した者ではない』という弟の戯言を少しは前向きに考えるようになったためなのか、それ以外の要因があったのかは定かではないがとにかく悪い気分ではなかった。

「ようし、辛気臭い気分を完全に吹き飛ばすためにいっちょ明るいところに繰り出すとするか!!」

「賛成だな、今度は《透き通る世界》を使わない俺本来の視界で楽しむぜ。」

「え〜!!僕は行きませんよ〜」

「結局スケベな店に行きつくわけね…まあ今回ばかりは仕方ないか、黒死牟さんもあまり思いつめないでくださいね。」

「……善処しよう……」

世ノ理ヨリ外レシ者

「…そろそろこれの処遇を決めぬとな…」

黒死牟は『デミア魔道具店』と書かれた名刺を眺めながら呟く。レビューアーズ仲間である俗物共を誘うことは非常に簡単だろう。行ってみたいと言えばおそらく快諾してくれる。問題はその中の一人が怪しい魔導士の興味対象となっていることだ。

「…しかし奴はどこに行つたのだ…店にはいなかったようだ…」

魔導士の興味対象であるクリームを探しているのだが、食酒亭にはいなかった。時間つぶしもかねて街中を探していたのだが見当たらない。どうも、あの分身使いの女からは危険なおいがする。自分だけならば多少リスクがあろうが目的のためならば飲み込めるが、仮にも異界の上位存在の一員であるクリームをあの女に引き合わせて問題ないのかと多少心配はあった。故にどうするか聞いておこうと思つたのだが、こういう時に限って探し人は見つからないものだ。

「…さすがにこのような場所に…一人では来ないか」

なんとなしに歩いていたらサキュバス街に来てしまったが、如何に俗世に染まつたとはいえ、誘われたわけでもないのにクリームが一人であるはずは無いかと思ひ直す。

「また来てねー可愛らしい天使さん♡」

…聞き間違いではないだろうか、いくら何でもまさかそこまで世も末なことは無いだろう。宗教的に見るのならば仏陀が一人で遊郭に遊びに来ていたぐらいにぶっ飛んだことが行われているようなものだ。

「…まさかな」

一応確認のために声が聞こえた方角に顔を向けてみると『動く魔法粘液プレイ マジカルローション』と書かれた店から嬢と、顔と頭上の輪っかを朱に染めた良く見知った顔が出てきた。

「……」

「あああ…誰に誘われた訳でもなく一人で遊んでしまった。僕はもう駄目だ…」

黒死牟は考えるのを放棄した。しかし探していた以上声をかけないわけにはいかないので、本人確認の意もかねて話しかけることにした。

「…何が不味い？言ってみろ…」

「何がって…天使である僕が一人で自発的に来てしまったとか、もう墮ちるところまで墮ちたとしたか…って黒死牟さん!」

急に話しかけられしばらく気づかなかったクリムだが、振り返ると見知った顔がありギョツとする。黒死牟もこういう場合どうすべきか分からず少々困り、両者の間で微妙な空気が流れる。

「どうしてここに！あ、あのこれはですね…違うんです、違うんですよ！」

「…私のような者が言うのも違うかもしれないが…世も末だな」

「言わないでください！言わないでください!!僕だって本当はダメだって分かってはいるんですよ…でも体が勝手に」

「…なるほど…既に精神まで蝕まれ、手遅れであったか」

「そういう黒死牟さんこそ今日は一人でサキュバス街に来てるじゃないですか!!」

「…いや…私は貴様を探してただけだ…」

「僕を？何かあったのですか？」

「……その輪を治す可能性があるやもしれぬ場所についてだ」



その後、先人たちの知恵を借りようとスタックとゼルに話を持ち掛けようとこれまでのいきさつを説明したところ、クリムは盛大にいじられることになった。その様子を見て黒死牟は少し酷なことをした

かと感じた。

「そうか、そうかすでに一人でやってきた後だったか」

「な、何ですかっ！み、皆さんまで!!」

「いやいや、別に馬鹿になど一切していいないぞ。俺たちは嬉しいんだお前の成長がな。」

「違います！し、仕事でしょ!?!レビューも書きましたし!!」

「いいや、もう完全にはまってるな。仕事じゃなくてもお前は行く」

「…いわく…体が勝手に動いた…らしい」

「な!?!黒死牟さん!ばらさないでくださいよ!!」

「ほれ見ろ、やっぱり依存症になってるじゃないか」

「好き勝手なことばかり言わないでください!!そんなことより黒死牟さん、今日は話すことがあつて集まったんじゃないですか?」

「そういえばそうだったな、クリムの成長ぶりにすっかり話が流れていたが、話って何だ?」

「…それを説明するにはこれを見る必要がある…」

黒死牟はテーブルに何枚かの紙を置く。

「これは、サキュバス店の広告か何かか。デミア魔道具店…これっでもしかしてクリムが行った魔法店とおなじ系列か」

「性転換の宿屋とも同じだな、魔導士デミアのプロデュース店だ。しかもこれ系列店じゃなく本店だ。」

「何かと思えば新しいサキュバス店の情報じゃないですか。というか黒死牟さんどうやってこれ見つけたんですか?…っは、もしかして黒死牟さんも僕と同じで体が勝手に…だから一人でサキュバス街に来ていたんですか!!」

「何だって!詳しく聞かせろ黒死牟。」

「…いや…私は」

「よく見たらこの店、魔法都市にあるみたいだな。しかも他の紙には地図にここからのルートが調べられて書かれてるし。」

黒死牟の言葉を見無視して一行はテーブルに置かれた紙を食い入るように読んでいく。彼らの中では黒死牟の行動は計画的にサキュバ

ス店に行く熱心なレビュアーとなっていた。

「どう見ても行く気満々じゃないか、黒死牟、お前…」

「…何だ…スタंक」

「どれだけ多くのサキュバス店巡り回って調べたんだ？魔法都市の情報とか俺も知らなかったぞー」

「さすが！クリームといい、覚えたての奴の性への情熱は違うな!!なんだか感慨深い気分になるぜ。」

「…いや…これはクリームの輪を治す可能性で…」

「いやいや、おかしいでしょ!!何でサキュバス店で輪つかの治し方が見つかるかもしれないとかなるんですか!？」

クリームの突っ込みはもつともだろう。普通に考えれば体の一部が欠損したのに医者でもヒーラーでも修理屋でもなく、サキュバス店で治し方を見つけようなどと、頭がおかしいと言わざる負えない。

黒死牟自身もぶっちゃけ自分の目的のためにサキュバス店に行くことになるとは思いつかなかったものだ。

「あー俺も最初のころは何かに言い訳付けて、通ってたな。若いころを思い出すぜ。」

「そうそう、それがいつしか生活の一部として自然に通うようになってさ。もはや懐かしさすら覚えるよ。」

「…もう良い…」

結局誤解が収まらず、自発的に行こうとしたということになっていくことに黒死牟は困惑するが、次第にあれこれ言うのが面倒になり思考放棄することにした。

「しかし、魔法都市は少々遠いな。ここからどれくらいかかる？」

「…調べた限りでは早馬で4日程だ…」

「なら、ケンタウルス輸送隊を手配するか…クリームお前は どうする？」

「ぼ、僕は…」

「遠慮するなって、お前もついていきたいんだろ？」

「は…はい!!」

こうして男たちは本来の目的とは全く関係のない方向で、それぞれ

の目的のために動くことになった。



「ほーこれが黒死牟が一押しする店か、なかなかレベルが高いじゃねえか」

街に来ている男たちが連れ歩いている女性を見ながらスタックは感嘆の言葉を漏らす。美女で巨乳のお姉さんと3日間つきつきりでイチヤイチャ生活が楽しめて、5000Gという新手の詐欺を疑う内容に内心心配していたスタックであったが、街で歩いている男たちの顔を見るにその心配は杞憂であったと知る。

「こりやなかなかの大当たりなんじゃないか？初の10点満点もあり得るかもな。」

「何だかみんなが同じお姉さんを連れ歩いてる光景って、よくよく考えなくても奇妙な感じですね。」

「…確かに…」

奇妙なデザインの街に、待ちゆく人々が同じ顔をした女を連れ歩く光景は異世界にある程度慣れてきた黒死牟も感嘆の声を漏らす。

「しかし信じられん、普通デコイ人形は一時のしのぎの身代わりでしかないのに…」

「…本来はそのようなものなのか…」

「ああ、昔捕まえた盗賊から聞いた話では普通のデコイの服を剥いだら乳も穴も何もなく、言葉も動きも単純なものなんだが、見たところ全てのデコイがとんでもなく精巧に形作られてる。こりやとんでもないことだぜ。」

ゼルは『透き通る世界』で周りのデコイを眺め感嘆の息を漏らす。微妙な違和感を除けば、それは生身の肉体そのもので、このデコイの

術者がただ者でないことの証明になっていた。

「…私も…これほど精巧な人形をこれだけの数を操る者は初めてだ…」

上弦の式であった童磨も大概狂った性能を持った人形を複数操ることが出来たが、さすがにこの街に来ている客全員分の人形を作ることは不可能だ。そんなことが出来るなら上弦の壺は童磨になっていただろう。

「こりや黒死牟が言っていたクリムの輪を治す方法があるかもって話も眉唾じゃないかもしれねえな。」

「…最初からそう言っていたであろう…それを貴様らは」

ムツとしながら黒死牟は呟く。どうやらサキユバス店に熱心な変態扱いされたことが、かなりキていたらしい

「まあそうカリカリすんなって。クリムも良かったな、気持ちイイことしながら治す手段が見つかるかもしれないなんて、レビューアーズの活動は祝福されたも同然だな。」

天使の輪を治すための行為であるならばそれは神聖なことに違いないとスタンは冗談交じりで述べる。信心深くはないスタンクだが、こういう時は調子よく便乗する。

「すみません黒死牟さん、変に疑ってしまつて。」

「…いや、私も正直このようなことで見つかるとは思ひもしなかつた…やはり世界は広いというべきか…それよりも今回は貴様にとつて有益なものになるやもしれぬが、同時に危険も伴う」

「危険ってこれからどうなるんですか!？」

危険という言葉に不安になるクリムに対して、黒死牟は説明を行うデコイを一瞥しながら呟く。以前、上司の気持ち分かる店性転換の宿屋であった時とは髪型と色、そして胸の大きさが異なっており本当の姿というものが悟られないようにしているのだろう。しかしどこか狂気じみた雰囲気はそのままであったため同じ術者であることは確かだった。

「はいみなさーん今日もご来店ありがとうございます♡お並びの間に5000G、お釣りの無いようご準備願います♪」

「…あの女からは不穏な空気を感じる…ゆめゆめ油断せぬことだ」
「良くは分かりませんが、善処します。」

「…さて鬼が出るか蛇が出るか…見ものだな」

黒死牟は鬼狩りの柱と戦うときのような気持ちでこれからの出来事に臨む。



「約束通り天使クンも連れて来てくれたのね、お姉さん嬉しいわ♪」

「…こちらとしても目的があつたため来ただけだ」

人懐っこい笑みを浮かべながら話しかけるデミアに対して黒死牟は面倒くさいなと思いつながら対応する。

「んもう、つれないわね。それよりもこれからどうします？ガイドも出来ますのでこの都市の名所めぐりもバツチリですよ。それよりここまで長旅だったんでしよう」

「…悪くはない…だが聞きたいことも積もりに積もっている…まずは落ち着けるところを探したい」

「あー長旅でしたからね、先に宿を取りましょうか。それに私の方も公衆ではちよつとやりにくいことがありますしー」

お互い人目を避けたいという利害が一致したため、二人はまず宿をとることにした。

「…さて…ここなら問題なからう…早速ではあるが縁壺の居場所を教えてくださいませんか」

「そうねえ…大体の場所は把握しているが確実にそこにいるかどうかは分からないってところかしら。最後に確認した場所自体は分かっているわ。もしも今もそこに住んでいるならばいるはずよ。」

「…言っている意味が分からん…詳しく説明しろ」

「そりゃ彼一人だけならば強力なモンスターがいる危険地帯だろうと問題ないかもしれないけど、奥さんと子供がいる状態でそれは難し

いわよ。奥さんの方は普通の人間みたいだったし。」

「……は!?」

デミアの言葉は黒死牟に衝撃を与えるに充分であった。

「見たところ彼女も転移者、しかも過去からの。それに他にも二人過去からと思しき転移者がいたわね、どうしてそんなことになったか非常に興味あるわ。」

「…待て待て! 奴が結婚? しかもどこかの領主に入ったなどではなく同じ時代の転移者だと…: どういうことだ生前はそのようなこと聞き及んだことは無かったはずだが…」

自分の知らない話を聞かされて、頭が混乱する黒死牟であったが、デミアは構わず話を続ける。

「ほらほら早く現実に戻ってきて、とりあえず私が見て知ったことから話していくわよ。」



数年前…

「追手が来たか、この村にこれ以上迷惑をかけるわけにはいかぬ。気の毒だが…」

(あ、これ本当にヤバイ。上手く言い表せないけど本当にヤバイ…) 父から手下をやられたので様子を見てくるついでに、村人たちに見せ示して来いと言われ、全く乗り気でなくここに来たドラゴンことヘジンマールは見慣れない格好の剣士を見て己の死を確信する。

全くこちらを脅威と認識せず、まるでそこら辺の草でも引っこ抜くかのように、こちらの命を命を摘み取ることが出来ると確信している

かのような所作。ゾワリとしたものがの全身を貫く。

―日の呼…―

「お待ちを!!」

喉への負担を完全に無視して、大声で咆哮すると、ヘジンマールは地面に頭をめり込ませる勢いで下げる。あまりの出来事に縁壺を含めた全員が啞然となる。

「……?」

「お待ちを! 私の名前はヘジンマールと申します、あなた様のお名前を教えてくださいませんか!」

「私は縁壺という者ではない旅人だ。そなたのその姿勢、何の真似だ?」

害は無いと判断した縁壺は刀を鞘に納め、話を聞くことにした。

「そ、それはもう、縁壺様がただならぬ御方だと即座に理解できたからです。そのような御方にこれ以外のポーズをとることが出来ましようか? いえ、できません!!」

これは自分の人生を賭けた一世一代のギャンブルだ。もしもこれでも縁壺という剣士が自分を許さぬというのであれば、おそらく自分は死ぬだろう。そして、もしも縁壺という剣士が父を倒しきれなかった場合も同じく死ぬことになるだろう。それでもヘジンマールはこの行動が一番生存率が高いと判断した。

「察するに、そなたはこの村を苦しめている輩の一味だと察するが…こちらに降伏するということで宜しいのか?」

「ははあ! 縁壺様がそれを許してくださいさるのであれば!」

「…私はこれよりこの村を苦しめている輩に話を付けに行くつもりだ。それを手伝うことも辞さないというのか?」

「勿論でございます!! 私も前々から悪いことは宜しくないと考えていましたので…」

「縁壺さんコイツを信用するのは危険です! こういう奴は自分の都合が悪くなればすぐに意見を変えてしまいます!」

ヘジンマールの言葉に縁壺の一行にいた少年が声を荒げる。ヘジンマールは肝が一気に冷えあがり、死が身近に迫り切っていることを

痛感した。

(ちよっ…不味い不味いつてこれ!!折角命拾いしかけたと思つたらこの人何言つちやつてくれてんの?!死んじやう、俺死んじやうから止めて!!)

縁壺という剣士が自分の言葉よりも、一緒に旅をしてきたであろう少年の言葉を信じる可能性は十分にある。正直もう駄目だとあきらめかけたその時、救いの手は思わぬところから現れた。

「狛治さん、この方はとても怯えています。信じてても宜しいんじゃないんでしようか?」

「恋雪さん…しかしここに来る道中も妙な輩に何度か襲撃を受けましたのですよ。それに剣道場の奴らのことをお忘れになられたわけではないでしょう!奴らも手を出さないと言っておきながら自分の欲のために約束を破つて…恋雪さんも…慶蔵さんも…」

「父がここにおられましたら、きっと更生を望むはずです。だからどうか…」

(助かった、マジで助かりそうだ!!本当にありがとうございます!あなたは天使、いや女神だ!!)

ヘジンマールは恋雪という少女の言葉にかつてないほどの救いを感じる。その優し気な眼差しも相まって彼の目には恋雪が女神のように思えた。

「…すみません声を荒げてしまつて…悪い記憶を思い出してしまつて少し熱くなつていたかもしれせん。確かにそうですね、慶蔵さんならばきつと…」

恋雪の言葉を聞き狛治という少年は警戒を和らげる。自分もかつては病に伏せる父親のためとはいえ盗みを繰り返していた。そんな自分を救ってくれた人物ならばこういう時どうするか…考えるまでもなかった。

「それでいい、狛治。争いというのは好ましくない。ヘジンマールよ…」

「は、はい何でしょうか、縁壺様!!」

「そうかしこまらなくてもいいのだがな、気軽に縁壺と呼んで欲し

い。それよりも話を付けに行きたいので道案内を頼みたい。」

『そんな気やすく呼び捨てに出来るわけないだろ!!』と心の中で叫ぶが、もちろん口には出さない。少しでも不興を買いたくないからだ。

「是非とも私にお任せを！しかしここからでは少々距離がありません。もしもご不快でなければ私の背に乗って移動していただくことも可能です…」

「よろしく頼む。すまぬが狛治、私が留守の間この守りを頼めるか？」

「はい！この命に代えましても守り抜くと誓います!!」

力強く答える少年の言葉に対して、縁壺は困ったような顔を浮かべる。

「命は簡単に投げ捨てるべきではないぞ、お前が死ぬと悲しむ者がいるのだから。すまぬがうたよ、ここで皆と待っていてもらえるか。」

「縁壺…言っても無駄かもしれないけど、あまり危ないことはしないほしい」

縁壺の妻と思しき女性は心配そうに縁壺を見る。そんな妻を縁壺は優しい眼で見ながら答える。

「うたよ、心配するでない話を付けに行くだけだ。」

「でも…」

「我らは異なる世界から来訪した者。あまり騒ぐべきではないのは分かってはいる。だが、こここの状況を見過ぎすわけにはいかぬ。」

縁壺は村の様子を見渡す。人間以外にもいくつかの種族がいたが、皆等しく疲れ、あきらめに似た目をしていた。

「それに私たちは既に圧政を強いる者たちと戦ってしまっている。どのみち決着を付けねばなるまい。」

ここに来る前に縁壺達を襲った哀れすぎる集団のうちの一つは、普段は村の住人たちが反逆をしないか見る仕事があった。しかしこの地とはかけ離れた東方の地に住む人間に似た顔立ちが突然やってきたため、外部勢力の侵攻の可能性を考慮して念のため消しておこうと襲った。

結果は…わざわざ言う必要は無いだろう。一つだけ言えるのは、うたと恋雪に配慮して狛治と縁壺は頑張ったということだ。

「ちゃんと帰ってきてくれよ…」

「ああ、私はそう大層なものではないが今度こそ守り通すために必ず帰ってくる」と約束する。後は…「ゴンド殿はどうなさいます?」

縁壺はこの旅に同行していた唯一の人間以外の種族である、ゴンドという名のドワーフに質問する。

「儂は付いていくぞ。」

「ゴンド殿、これより先は命の保証は出来かねます、この村で待機していたかどうかは出来ませぬか?」

「ぶわっはっはっは!!何を言うかと思えば、今更危険は承知の上じゃ。それにまだ儂はお主から報酬を貰っておらん、剣の極み、それを見るのがその剣に対する儂への報酬なのじゃからな!!」

ゴンドは縁壺の腰にある自分が打った刀に視線をやりながら豪快に答える。説得は無理そうだと判断した縁壺はため息を吐き条件付きで許可することにした。

「危険だと感じたらすぐに退散することを約束できますか?」

「よいぞ、しかしそう簡単に向こうが逃がしてくれるかは疑問じゃがな。お主こそ儂が人質に取られても躊躇うなよ!!これは儂のわがままでもある。」

「えーっと、話は纏まりましたでしょうか?」

「ああ、道案内を頼む。」

その言葉と共にヘジンマールの縁壺とゴンドはヘジンマールの背に乗る。一瞬、ヘジンマールの意識が遠くなる。絶対的な捕食者が背に乗って冷静でいられる生物は少ない。四肢がガクガク震え、肺が荒々しく酸素を取り込もうとする。

(こういうのを人型種族たちは、死神の鎌を首に当てられているとか言うんだらうな。今の状況はまさにそうだ…)

唯一の救いは縁壺が殺気や敵意というものをこちらにあびせてはきていないということだった。もしもそうであったならば自分は確実に漏らしていただろう、そうなって不快感を与えずに済んだのは本

当に助かったと思えた。

「そ、それじゃあ行きますよ。」

「龍に乗ることになるとは…人生とは分からぬものだ、やはり世界は広い。」

感慨深そうに一人呟く縁壹とは対照的に、ヘジンマールは恐怖を必死に押し殺し、羽ばたく。

「縁壹…どうか無事で帰ってきておくれ。」

「大丈夫ですよ、うたさん。縁壹さんは負けない…絶対に。」

「そうですね、あの人はとても強くて、凄く優しい方です。だから必ずうたさんのもとに帰ってきますよ。」

空へと飛び立つた縁壹たちを心配そうにうたは見つめる。

一方の狛治はかつてこの世界で初めて縁壹に出会った時のことを思い返す。彼とは前の世界で邂逅することは無かった、しかしかつて人ならざる種族であった時の記憶から彼がかつての上司にトラウマを植え付けた剣士であることは察せられたため、会った時は絶望感に襲われた。

実際に目の前にして、戦ってもまともに時間すら稼げないと直感で判断した狛治は事情を正直に話し何とか恋雪だけでも見逃してもらえるように頼み込んだが、彼は『守るべき者がいるのならば…絆を結んだ者がいるのであれば、その者のために生きよ。お前はもう鬼ではないのだろう。』と言いそれ以上の追及はしなかった。

結局その後、恋雪からは『勝手に一人で死のうとしないでください！』と凄く怒られたのだが、狛治は縁壹が強い以上に、自分の師と同じ温かい人物だと理解した。

「とまあこんな感じよ。」

「…奴にそのような存在がいたとは…聞いたことが無かった…いや、あの時の私は知ろうともしなかつたのか」

憎くて憧れた存在の意外な一面を聞かされた黒死牟は感慨深そうに言葉を吐く。しかしデミアからはさらに衝撃的な言葉が飛び出す。

「ちなみに今はお子さんもいるわよ、おめでとうオ・ジ・サ・マ♪」
「…何…だと」

朗報、かつて親戚のおじさんムーブしていた黒死牟、自分が知らない間に本当に親戚のおじさんになっていた。

「固まっているところ悪いけど話続けるね」

そんなこんなで敵のアジトまで乗り込んだ縁壺は

「ほう…我に物おじせぬとは、聞くだけ聞いてやろう、何が望みだ？」

「私の家族に危害を加える者は、何人であろうとも容赦はしない。だが、私は本来この世界にあまり深く関わり過ぎるべきではない者だ。故になるべくならば穏便に済ませたい。望みは村人たちを苦しめるのをやめて欲しい、ただそれだけだ。」

「フ…フハハハハ!!我に向かって我に向かって大言壮言を吐きおる。まるで勇者気取りだな。」

「私はそのような大した者ではない。聞きたいのだが、この世界では様々な者たちが共存しあっている、無論龍も含めてだ。なのになぜお前たちはそうしない、何か理由があるのか？」

縁壺としては本能的な生物の縄張りのようなものがありこのドラゴンもそれに従っているだけだと考えていたので、そこまで手荒なこととは避けたかったが、相手からしてみれば教会の最大戦力でもない勇者や大將軍でもない見知らぬ男の言葉は滑稽に思えた。故に笑いながら答える。

「決まっておろう、強いものが弱いものを支配して何が悪い。それを歪める教会や国家の犬共こそ異常者なのだ。それに虫けら共が必死に足掻いている姿はなかなかに楽しめるものだぞ、その必死さが奴らがため込んだなけなしの宝をより美しくするのだからな。」

「…弱肉強食という考え自体は自然の摂理として百歩譲って許容しよう。だが、人々を苦しめること自体の何が楽しい？何が面白い？命を何だと思っているんだ。」

「つまらぬ虫けら共の命が私の楽しみになるのだから、むしろ感謝すべきであろうに。それに今も一つ楽しみが出来たぞ！貴様を殺した後じつくりと恐怖を刻んでからあの村を滅ぼしてやる、見せしめの意味も込めてな。」

「…この世界の穢れか。」

この世界は自分が想像もつかなかったほどに、あらゆるものが美しい。自分が生きた戦国の世とは違い、あらゆる種族が平和に共存しているこの世界に妻と共に来ることができたことに対して、為すべきことを果たせなかった自分にはもったいなさ過ぎると感じているくらいだ。

しかしこの美しい世界にもそれを汚す存在がおり、あまつさえ妻をも殺そうとするのであればもはや言葉も容赦もいらぬ。

「分かった、もういい…」

縁壺から短く呟かれた言葉は驚くほど冷ややかな声なのに、感情の波というものが一切感じ取れなかった。それが途轍もなく不気味で怖かった。ヘジンマールもゴンドはもちろん、この地から離れた場所で様子をうかがっていた者さえ背筋が凍りつくような錯覚に陥る。

そしてその時は突如訪れた。

―日の呼吸―

その剣士が振るう赫刀は実に流麗な軌道を邪龍の体に描き、瞬く間に体の重要な臓器を実に正確かつ鮮やかに切り裂いた。その動きは時間にして瞬きをする間もあつたか怪しいほどのものだったが、その場にいた他の者たち…この地から離れた場所でドワーフを通してみている者も含め全員が己の体内時間を極限まで圧縮して見惚れていた。

それは邪龍の体をキャンバスとした一つの芸術の到達点だった。

それは一つの剣術の到達点だった。

それはまるで一体の精霊…いや、神の化身がこの地に降臨したかのようにだった。

(何が起こつたというのだ!? 殺気や敵意も一切感じられなかった!! いやそもそもいつ刀を抜いたのだ?... いやそんなことよりも斬られた所を再生せねば...)

ドラゴンの生命力は強い、普通の生物ならば確実に死に至るであろう急所への同時破壊も致命打には至らず、再起することも場合によっては可能だ。ましてや自分は龍種の中でもとりわけ強い個体だ、この程度ならば死には至らないはず。

そう思い体内のエネルギーを傷の再生へとまわす。しかしその時ある異変に気付く。

(傷の治りが遅い! どういうことだ、俺は光、毒…いや様々な属性に對しても耐性があるはず! 何だというのだこれは?)

再生自体は出来ているが、自身の予想よりも若干遅いのだ。まるで傷口を何かを詰められて再生が邪魔されているような感覚。本来ならば自分はそういった攻撃に對しても耐性があるはずなのだ。だが、この痛みは決して幻覚などではない。

それでも彼は知ることには無いが、これはまだ幸運な方だった。もしも光に弱い種族ならば彼はこの何十倍も苦しみ悶え、傷口を永続的に浸食され続けたのだから。

(駄目だ間に合わない...このままでは!!)

足掻くため攻撃に転じようとも、剣士の初撃で体の重要機関は全て損傷しているためすぐには出来ない。

そして当然ながら相手もそれを待つほどお人よしではなかった。

(そうか、これが死…圧倒的強者による搾取。)

自分がまだ幼き頃、生存競争を経るときに感じたあまりにも久しい感覚。その感覚が心を支配する中でも彼は自分でも驚くくらいに比較的穏やかだった。種族共存を謳う下らない教会の尖兵共に殺される最期よりも、圧倒的に強い個に敗れる方がまだ自分らしくていい。

「おお…何という事じゃ…太陽の神…日の神が降り立って…」

ゴンドは滂沱の涙を流しながら、呟く。彼は元々縁壺という作家が自分の作った剣という名の筆がどのような芸術を描くかを見たいがために、刀を無償で作り、無理を言って旅に同行したのだが、今彼の目の前で描かれた作品は想像をはるかに超えた雄大さと美しさを兼ね備えたもので

(勝った！俺は勝った!!生き残ったんだ、マジで降伏して良かった！にしてもあれだけ強いんだったら最初に言ってくれ…って戦いもせず降伏した俺が言うのも変か。)

「そう大層なことではない、勝負は時の運であった。もしもかの龍の動きがもう少し早ければ死んでいたのは私かもしれん。正直背筋がひやりとしたものだ」

(いやいや、絶対嘘だろ!!)

ヘジンマールは確信した、もしも先に攻撃したのが父親であったとしても、多分縁壺は普通にそれに対処し、結果は何も変わらなかっただろうと。

(あーでも、降伏して正解だったなあ。こんなとんでもない人がちよくちよく現れる世界だったらどの道俺たちのような組織は遠からず滅んでただろうし。)

胃がキリキリと痛むのを我慢しながらもヘジンマールは安堵して

いた。

ここに来る道中彼は元居た世界でさぞ名のある剣士であったのだろうと褒めてみたところ、『いや、私はそう大した者ではない。為すべきことも成し遂げられず守りたいものも守れなかった者だ。私程度の才覚を凌ぐ者など今この瞬間にも産声を上げている。』と返事が帰ってきたので、ヘジンマールは『アンタみたいなのがそうそういたまるか!』と言いたるところであったがそこに突っ込むのは服従した身では野暮というものであろうと自粛した。

(もし縁壺様が言ってることが本当だったらヤバすぎだろ：日本とかいう場所：)

縁壺の音色からは嘘が全く感じ取れなかったため、もしも彼の言うとおりであるのならば、縁壺レベルの人物は彼の世界ではそう珍しいわけではないということになる。彼がいた世界からは転移者が時たまやってくるとかつて話には聞いていたが、そんな修羅の国の人員が敵に回るならばここで大人しくする意志を見せて、静かに暮らすのは大正解であったと言えよう。

(でもこの組織まだ残ってるどころあるんだよね)

警備を担当していた悪魔は自身の話を聞いて、既に可能な限りの資産を持ってここから離れているだろう。

彼曰く『私が対処するように契約を結んでいるのは教会関係者と国家関係者だけです。無所属の転移者相手に関しましては契約に含まれておりませんので、これは契約違反ではございません。問題があるとするれば契約内容に転移者に対する対処を入れなかった頭目にこそございます。』と実に悪魔族らしい言い分であったが、もしかするとこの機をずっと待っていたのではないかと邪推したくなる手際の良さだった。

「と、ところで縁壺様、残党に関しましてはいかがいたしましたでしょうか？」

「そうであったな…逃げた輩に関してはこの世界の者たちを頼るほかない。散り散りに逃げた者を全員捕まえることは私にも不可能だ。」

『アンタだったら逃げた輩全員追い詰めて処分できそうだがな』と思ったがそれが主の望みであればそうしようと思った。

「いや、私はそのようなものは望まない。私はこの美しい世界で、今度こそ家族と静かに暮らすことだ。小さな家がいい、愛する人の家族が見え、手を伸ばせばすぐに繋げ届く距離。それが私の望みだ。」

「(この人それマジで言ってるの!? あんなに強いのに!!)で、でしたら今回の件は組織の内乱で滅んだということにしておきましょう。それであれば縁壺様が目立つことはございません。」

「ああ、そうしてもらえると助かる。私たちは本来この世界に深く関わり過ぎるべきではない存在だ。」

一応今回の戦いで何かあった時のために組織にいた悪魔との連絡手段をヘジンマールは持っているため裏工作は可能だろう。当然のことながら有名にならないためには、村に労働させるために繋がりがあつた役人どもも目立たぬように処理しなければならぬ。目立てば教会の連中が来てしまう恐れがある。

その作業を考えるとまた頭痛と吐き気がしてくるが、やらないわけにはいかない。失敗したら命が無いものだと思えるほかないだろう。

「かしこまりました!!この全身全霊を以て、御身のために働かせていただきます!!」

「太陽の神が降り立って…何と美しいのじゃ!!」

「…私は何かしてかしてしまったのであろうか?」

未だに滂沱の涙を流しながら自分の世界に入り浸るドワーフと恐怖と胃痛で震えるヘジンマールを見て縁壺は心底不思議そうにつぶやく。

無論、縁壺は自分が前の世界で常人よりも丈夫に生まれたことは知ってはいるが、ここは見たことも聞いたこともない種族や景色が数えきれないくらい存在する世界だ。なので自分程度の存在など全然珍しくもなんともないと思っていた。

「…とまあ私が知っている範囲はこんな感じよ。あれだけの力を持つていながら望みが、『今度こそ家族と静かに暮らすこと』だの『愛する人の家族が見え、手を伸ばせばすぐに届く小さな家がいい』って言うんだからびびくりしちゃうわよね」

「…奴らしいといえば、奴らしいな…昔から欲というものがまるでなかった」

自分の知っている縁壺要素が出てきたことに対して黒死牟はどこか安堵する。特に本人は控えめなつもりなのに、ぶっ飛んだ行動をするのは昔から変わっていないという点に懐かしさすら覚える、これぞ自分の知る縁壺だ。

「それで今度はあなたの番だけでも、あなたは私に何を望むのかしら？」

「…私の望みは——」

デミアの話を一通り聞いた黒死牟は自分の望みを答える。かつてやりきれなかった望み、そのための第一歩。

「…可能だと貴様は考えるか？」

「ん…何とも言えないわね、転移者の中でもあなたのような種族は初めてだから…って普通の魔導士なら言うところでしょうけど、この私にかかればそんなに難しいことじゃないわよ。とりあえずあなたの体組織を採らせてもらえるかしら？」

「…良かろう」

デミアは持ってきた注射器を黒死牟に刺し、血を採取し始める。その最中にデミアはある疑問を問いかける。

「でも、いいのかしら？多分私だったら欠点だけを解決した状態に仕上げてあげること出来るけど。」

「…いや、これで良い…これでなくては意味がない」

「随分と物好きね。まあ、気が変わったらいつでも言っちゃおうだ

いね。」

デミアには黒死牟の考えがまるで理解できなかったが、生態サンプルさえ手に入るならば特に気にすることは無いかと割り切る。それに黒死牟の願いはこの生態サンプルから開発できるかもしれない薬を作るうえで通るであろう道であつたためその被験者として最適だと考える。

「…それと可能であればこの痣の副作用を治す薬も作れるか？」

「縁壺サンにも同じような痣があつたけど、それってやっぱり何か意味があるのね。」

「…これは力が増す寿命の前借だ…これに酷い形で覚醒してしまつた者がいる…さすがに不憫だ」

思い出すも忌々しい出来事である『淫魔の狂喜乱舞』での醜態、その際に痣に覚醒してしまつた者がいた。黒死牟としても戦いや修練の過程で痣に覚醒してしまうのであれば特にどうこうするつもりはなかつたのだが、さすがにあのようなことで寿命の前借をしてしまうのは戦士としてあまりにも不憫に過ぎたので、可能であれば治療法を頼むつもりだつた。

「見たところあなたはその寿命の前借から逃れているみたいだから、この血から解決策を探ってみるとするわ。」

試験管に移された血を眺めながら妖艶な笑みを浮かべるデミアに對して、黒死牟は本当にこいつに任せて大丈夫なのかと感じた。

「それで提案なんだけど私があなたの望みをかなえることが出来たら一つ頼みたいことがあるのよ。もしもあのイレギュラー君と戦うことがあるんだつたら、血を少しでも採ってきてくれたらありがたいなって。」

随分と無茶なことを言うもんのだと黒死牟は思った。今まで戦いで傷を負つたことが無い相手から血を採って来てほしいとか、そんな余裕はどこにも無い。

「…一応善処してやろう」

「頼むわね♪」

「…しかしなぜ奴にそこまで拘る？貴様のことだ、単に物珍しさや

強さの秘密を解き明かしたいだけではないだろう」

「そうねえ…簡単に言うとな彼が世界の法則から明らかに外れた存在だからかな。どう考えても彼って前の世界の地球じゃ生まれそうにない存在でしょ？だから世界の法則から外れるってどういうことか調べてみたいと思っただけ。」

「…世の理を乱す者が…その点については同意だ。」

「それにこのお願いはあなたにとっても悪いことじゃ決してないと思うわよ。彼の生態サンプルがあればあなたを”縁壺”にすることも出来るかもしれないわよ。」

その言葉を聞き、黒死牟は目を見開き固まる。デミアが言った提案、それはまさに黒死牟がかつてずっと抱いてきた願いそのものだったからだ。デミアはさらに悪魔の笑みとも言わべき表情を浮かべ、その方法を説明し始める。

「クローン技術というものがあって…あ、クローン技術っていうのは簡単に言うと生物の体から採れる設計図を基に対象と同じ肉体を製造する技術のことなんですけど、これがあればあなたも”縁壺”になれる——」

―月の呼吸― 壺ノ型 闇月・宵の宮

デミアの言葉を最後まで待たず、黒死牟は腰に差した刀を反射的に抜刀して横薙ぎに一閃する。月輪の斬撃がデミアを両断し、二つに分かれた体が音を立て床に倒れた。

「…それ以上は貴様には関わりのないことだ…」

倒れたデコイを一瞥すると少しだけピクリと動くが、やがて活動を停止したのか動かなくなり、煙のように霧散する。しかし黒死牟は油断することなくドアの方をにらみつける。

「あらあら、随分と乱暴するわね。普通だったらこれでサービス終了なんだけど、今回は私が誘った身だし、先に不躰なこと言ったから今回はカウントしないわ。」

「…貴様の下らん遊びに付き合う気はない」

「ごめんごめん、お詫びにあなたにかけられていた防護魔法をもつと強力なものにしてあげるからさ。」

黒死牟は自身の刀に目をやる。刀の一部が窓から差し込めた日光によって焼き切れており、防護魔法を一部解除されたことを認識する。

「…前の人形の仕業か…」

「正解、私のデコイはリヨナプレイにもある程度耐えられるように作られてるのよ。だからあなたにかけられた防護魔法を解除するくらいの時間は十分にある。ちなみにこの街にはどれくらいのデコイが存在しているでしょーか♪」

上司の気持ち分かる店

性転換の宿屋で体液（意味深）を採取したと言っていたが、既に自身の弱点と自分にかけてられた防護魔法の種類も把握済みだったのだろう。そしてこの街に存在している人形の数からいって自分を太陽で焼き殺すのは訳が無いだろう。

覚悟はしていたが罨ともいえる環境に自ら飛び込んだことに対して少々迂闊過ぎたかと考える。

「…食えない女だ…気味が悪い」

「でもあなた分かってここに来たんでしょ？罨に飛び込んでも成し遂げたい何かがあるから…つとこれで今までの防護よりもさらに強力になったわよ。」

「…貴様のことだ…奴にも同じようなことをしたのであろう？」

「あの時はもうちよつと手荒かったわね。色仕掛けが絶対に無理そうだったから、戦闘用に調整したデコイを十数体送り込んだわよ」

「…奴にとつてはいい迷惑だな」

黒死牟は縁壺に同情した、こんな狂人に目を付けられるなどハツキリ言つてたままっただけではない。送り込まれたデコイについてはどうなったか聞かなかつた、聞かなくても大体察せられるからだ。

「失礼ね、ちゃんと後で回復魔法をかけて、その上でお詫びに異世界の暮らしを裏からサポートするつもりだったわよ…でも見事に瞬殺されたわ。本体で行つてみようかとも考えたけどいくら何でもリス

クが高すぎるから、その場合は「目」を付けるだけにしたの。後は最悪寿命で死ぬのを待って遺体からサンプルを頂戴すればいいかなって♪」

「…正直貴様は依頼を達成したら死んで欲しいと願う」

「ひつどいわねえ、これでも彼が安心して暮らせるよう裏から手を回したりしてるのよ。その対価にちよつとだけ貰うのよ。」

「…貴様と話していると頭が痛くなりそうだ」

かつてはこの世に生まれてこなければよかったのにとさえ思った弟に対して幼少期ぶりに本気で同情した。

「そんなことよりもまだ生体(表記揺れ)サンプルで採り終えてないものがあるのよ、それを採らせて頂戴な♪」

「…血は既に採り終えたであろう…肉も必要なのか？」

「違うわよ、採りたいのはあなたの精液よ」

「……」

曰く、血液と同じで生物の全情報が入っている液体で、初見のサンプルを知るためにこれほど適したサンプルは無いとのことだった。その話通りならばクリムもスタंकの言う通り気持ちイイことをしながら治す方法を模索されているということだろう。あの天使(割と穢れた)がこの狂人の本質を見ないまままでいられそうなのはいいことだと言える。

「…貴様のような輩に無作法というのは憚られるが…目的のためであるならば…抜かねば無作法というものだろう…」

黒死牟は釈然としないながらも、目的のためならやむなしと先ほど抜いた刀とは別の刀(意味深)を抜くことを決意した。

世ノ理ヨリ外レシ者（後編）

「あなたのここ…本来あったはずの何かが抜けているみたいだったからそこをいじくってみたらずいぶん面白いことになりそうね♪」

「…貴様…よもやそこまで…」

何故黒死牟が窮地に陥っているのか、それはデミアが自身の魔力を黒死牟の体内で循環することで、鬼舞辻無惨が自身以外のすべての鬼に仕込んでいた呪い…この世界に来て外れていたそれをデミアは簡易的に再現したためだ。

「安心していいわよ、呪いを再度植え付けたとかそのようなことはないから。フフフ、だから心置きなくいっぱい気持ち良くなつてねーそれそれ♪」

「…ぬ…このようなことに屈する…私では…」

しかし無惨製の呪いのように死んだり大きく傷がついたりするようなものではない、せいぜい『悔しい、でも感じちゃう』となつてしまう程度だ。本当にやばいものであるならば黒死牟もなりふり構わず反撃に出る。デミアはそのぎりぎりのラインを楽しんでいた。

「さっすが元上弦の壱さん、我慢強いわね。でもあとどのくらい持ちかしらっ？」

「…ぬかせ…私を倒したくば…今の三倍は…何!!」

「そっか三倍必要なんだ、じゃあお望み通り三倍にしちやおうかしら♪」

「まだだ…まだ終わらぬぞ…」

「強情ね、いいことを教えてあげるわ。あなたが相手しているデコイは普通の客相手するときの6倍は魔力を込めているの、ガチの戦闘ならそれでも難しいでしょうけど今の状況ならどうでしょうかね？」

デミアの言葉を聞いた黒死牟は冷や汗が流れ落ちる感覚を覚える。しかし彼も侍を志した身、ここで果てる気はない。もう二度と生き恥をさらさぬと決めたのだから。

「散々絞り尽くすとはな…全く以て度し難い…」

「ごつめーんちよつと珍しいサンプルが手に入りそうだったから気合はいちやつただけなのよー許してくれないかしら♪」

「…ここまで…誠意も何もない謝罪は初見だ…清々しさすらある。」
血だけでなく半透明の白い液体も散々絞り尽くされた拳句に見せられた、誠意を全く感じさせないたずらっぽい笑みの謝罪に対し、黒死牟は怒りを通り越し呆れすら覚える。

「そもそも…本当に…それほど量の量が必要なのであろうな？」

「当然よ、新薬の開発にはサンプルがたくさんいるものなのよ。」

どんと胸を張って自信満々に答えるデミアに黒死牟は『胡散臭いなコイツ』といった目を向けるが、よくよく考えればデミアが胡散臭かったのはすでに周知であったため、考えても仕方が無いと結論付ける。

そもそも彼女以上に自身の目的のための物を作れる可能性がある存在を知らなかったため、頼らないという選択肢はない。

「…此度は何も言わぬが…下手な利用を考えるのであれば…その時は…」

「使わない使わない、ちゃんとした目的にしか使わないから。ちよつとは信用してよ♪」

「…信じられる…間柄では無かろうに」

「えーそんなこと言われるとお姉さん哀しいわ。じゃあさじやあさ私を知ってることもつと教えてあげる。そうね、例えばあなたが生きた時代よりも後のことを話してあげようか？」

「そのようなもの…私には必要ない…向こう側など…」

黒死牟はこの世界には興味を持つているが、それはあくまでもこの世界に可能性を見出したからであって、元居た世界そのものにはそこまで未練はない。それに縁壺がこちらに来ていなければ猶更聞きたいことなどない。

「あら、あなたが死んだあと向こうの世界はとんでもなく変わった

のよ。特に戦いについては太陽と同じ原理の爆弾だつていう核爆弾とか凄いわよ。」

「何?!…日輪と同じだと…詳しく聞かせろ…」

日輪と聞き黒死牟の目が変わる。もはや性であるのかもしれない。「いいわよ、といつてもこれは私も又聞きだし話してくれた人も作つてたわけじゃないつてところだけは注意してね。」

曰くその爆弾は太陽が活動するにあたっての反応と同じ核融合なる現象を起こし、数百、数千万の命を奪うことも可能で、さらに放射能という長きにわたり残る匂いも色も何もない毒を広範囲にばらまくという。正直聞いていて信じられ無い程だが、短い付き合いながらデミアがこういった事柄に対しては嘘はつかないだろうということぐらいは理解できていたため恐らくは真実なのだろう。

「日輪の力を…爆弾に…やはりにわかには信じがたいが…事実であるならば…もはや剣技など意味をなさぬ世界になり果てているというのか…無常な…縁壺…貴様の言う…たどり着く場所が同じというのはこのような意味であつたのか?」

自身がずつと目指していた日輪の力が、まさかまさかの技も魂も不要な爆弾になり果て、刀など完全に駆逐され、弟の言っていた戯言が歪んだ形で顕現したとしか思えぬ時代にえも言えぬ悲しさと無常さを覚える。しかし話はそこで終わらなかつた。

「まだ他にもあるわよ。あなたたちの時代つて月を眺める文化つてあつたかしら?多分あつたはずだとは思うけど。」

「…ああ…」

当然だ、自身の呼吸の名の元となつたのは空高くに浮かぶ月が元なのだから。しかしそれを知つてか知らずかデミアはとんでもないことを口にする。

「あなたが死んでから50数年後に人類は月に行くことになるつて言つたらどう思うかしら?」

「待て待て…それは何の比喩だ…まさか月とはあの空高くに浮かぶ月のことではあるまいな!!」

自身の生きていた時代では神聖なものとして扱われていた月に人

が行ったなど、さすがにそれはないだろう思うが、先ほどの信じられない爆弾の話を知くとあり得ぬとは言い切れなくなる。

「アポロ1号とかいう宇宙船があるんだけどそれが人を乗せて：ああ、あなたにもわかりやすく言うなら空高く飛べる船が月に行ったという感じね。つてちよつと大丈夫？」

「月に：人が：太陽の爆弾：あり得ぬ：私が求めたのは：そのような：歪んだ形：ではない」

あまりにもそれまでの常識からぶつ飛んだ、それこそ文明開化における技術の進歩のスピードすら超えた自身の世界のその後を聞いて黒死牟は若干放心状態になる。戦国時代生まれには少々刺激がきつすぎたようだ。

「：ともあれ：人が太陽の力を：手にしたというのであれば：鬼などもはや闊歩できぬであろう：まあ今更私が気にすることではないが」

そこまで人間の技術が進んだ世界ならば鬼は鬼殺隊が存続しているようがいまいが、駆逐される運命にあると黒死牟は悟った。恐らくは鬼の首領である鬼舞辻無惨も生きてはいまい。だがそのことに対して特に思うことは無い、もう黒死牟は鬼には興味が無いのだから。

「私からすればあなたの弟の方がよっぽどトンでもな存在なんだけどね。核兵器や宇宙船はあくまでも向こうの世界の法則の範疇の中で作られたものなのに対し、聞く感じだと縁壺サンは向こうでもその強さだったのでしょうか？法則も何もあったもんじゃないわよ。」

「奴については：今更驚きはせぬが：貴様にそこまで言わせるとはな：他にはどの様な話がある？」

「おや、興味が無かったんじゃないのかしら？」

「：…ついでだ：聞いておけるものはすべて聞いておく：…」

「いいわよ、もともと私を講義目的で借りる人もいるくらいだし。」
その後も黒死牟はいろいろな話をデミアから聞くことになった。曰く人間が片手で手持ち出来る電話、曰く様々な種類の光を出す装置がとんでもなく小型されて実用できること（これにより隠れ住んでいる鬼も駆逐されたと確信）、曰く日本に水素爆弾と同じような毒を撒

き散らす核兵器が二度投下されたこと（日本がそれでも滅びなかったことに黒死牟は驚いた）、曰く飛行機という空飛ぶ船が何百人もの人間を乗せ、ものすごい速さで世界を飛び回ること、曰く空のさらに上の宇宙という空間には太陽すら飲み込む黒き星（ブラックホール）が存在すること、どれもこれもこれまでの常識を完全に破壊するには十分な内容だった。

「クリムよ…貴公は何か妙なことをあの女からされたりしたか？」

「変なこと？いえ特には、最初はちよつと不安でしたけど、魔法使いのお姉さんとのデートは、とても楽しかったです。」

「…どのように過ごしたのだ？」

「街を観光したり食事をしたり彼女がいるとこんな感じなのかなって気分になって、でも最後は消えると一緒に遊んだことも忘れちゃうのかなって、すこし寂しくなったりもしましたけど次に来たときも、ちゃんと覚えてくれてるようなのでまた来たいです。」

「…そ、そうか…満足そうで何よりだ…」

黒死牟としてはデミアとそんな生活などしようものなら、心休まる時が一時もないと思えたのだが、さすがにレビューアーズとしてある程度活動してきた中で多少は空気を読むことを覚えたためクリムの嬉しそうな表情をあえて崩すようなことはしなかった。

「黒死牟さんは何かあったのですか？」

「…いや…私も目的は達した…問題は無い…はずだ」

「そうかそうか達したか、どこか浮ついた表情してたからもしやと思っただが、達したなら良かった。」

「今回はお前が主催者だったからちゃん満足できたようでも何よりだぜ。」

「…貴様らの思うような意味ではないがな…そういう貴様らはどう

だったのだ？」

「そりゃ最高だったさ。何と言っても魅力は3日間ずっと遊び放題というその異常なコスパだろ。朝はおいしい朝ごはんまで作ってくれるし、昼は遊びに行ったりとイチヤイチャ感がとんでもねえ。あれで値段が普通の店の一時間と同じくらいとかよつぽどのロリコンか貧乳至上主義者以外、満点以外の選択肢はないな」

「…満足そうで何よりだ…」

ある程度予想通りのスタックの感想に黒死牟は特に突っ込みを入れなかった。ここで反論して戦うというのも楽しいのかもしれないが、今回は黒死牟としても衝撃的なことが多すぎたため、ある程度クールダウンする時間が欲しかった。

「俺は期間中、魔法について懇切丁寧に、斬新かつ高度な授業をして貰ってたな。あんな魔法概念がひっくり返るような高度な授業、普通に習ったら何十万Gかかるか分からんぞ。しかも休憩エツチも出来る、間違いなく満点だな。」

「…成程…そのような目的であるならば…此度の店は最適であったと言えような」

デコイとはいえデミアから直接的に授業を受けられるのであればゼルのような魔法詠唱者にとってはまさに最高の店と言えるのだろう。黒死牟もかつて呼吸法を学び始めたころは、高揚感を感じたものだが、それと似たようなものだと思えばこの喜びも納得できる。

「で黒死牟、お前の方はどうだったんだよ？」

「そうだな…多少釈然としない点はあったにせよ…目的の大半は大きく進んだ故満足ではある…それに…」

（貴様のかつての戯言…『私たちはそれ程大そうなものではない長い長い人の歴史のほんの一欠片』…よもや我らの故郷で為されているやもしれぬとはな…時代の流れとは存外馬鹿にできものやもしれぬな）

「黒死牟さん、もしかして笑っています？」

クリムは黒死牟の顔を見てある変化に気付く。今まで黒死牟は笑うことは少なく、笑うときも好戦的な笑みであったが、今はどこかも

物憂げながらも達観したような付き物が少し落ちたような顔だった。

「本当だ、お前のそんな顔初めて見るぜ!!お前そんな顔できたのかよ!」

「剣で戦うとき以外にも笑うことが出来るなんて、びっくりしたぞ。」

「…失礼な輩だ…だが…そうだな…確かに私は狭い世界しか見てなかったのかもしれない…そのきっかけを作ったことだけはほんの少しだけ感謝してやろう。」

「素直じゃねーな、店で楽しかったなら素直になりやいいのに。」

後日彼らのレビューは町から村へ、人から人へ、瞬く間にばらまかれ広がってゆくことになる。

とある山間にある果樹園では

「なんだよこれ!」

「ちよつと俺…ミカン山売ってくる!」

目先の快樂のため土地を売ろうと画策する者が現れ

とある都市では…

「こ…こりや研究なんかしている場合じゃないぞい!」

「俺、今日から錬金術に乗り換える!」

目先の利益のため無謀な分野に挑戦する者が現れ

とある戦場では…

「かかかか…彼女だつてー!」

「行きたい!超行きたーい!」

「全軍!ただちに出撃だ!」

「た:隊長!軍規違反は重罪では」

「うるさい!死罪が怖くてサキュバスが抱けるか!目標!魔法都市
!」

目先の欲望のため軍機違反も辞さない輩が現れ

またとある村では

「全く…このような不浄なものを書く輩の気が知れん。」

青年はその紙を一瞬見て…思い切り破り捨てた。

「一体どのような面しているか一度拝んでみたいものだ…つと俺が
今破いたのか。」

かつては盗みを働いていたとはいえ、基本的には武人氣質かつ愛妻
家であった青年からしてみれば、遊郭に入り浸り感想を拡散するよう
な輩は全くもって言語道断だと思えた。もしもそのような輩が目の
前に現れたら、自身の妻や恩人一家の目を汚す恐れがあるので拳で対
応してやろうと心に決めた。そう考えると性急に破いてしまったの
は失敗だったのかもしれない。

(そういえばさっきの紙、一瞬俺が知っている奴がいたような気が
したが…気のせいかな。)

破く前に一瞬見えた表記に自分が知る名前と顔が見えたような気
がしたため、思い返してみるが、自身の知る者の中にサキュバス店に
客として入り浸っている者はいなかったため(かつての同僚の内の人
はあくまでも情報収集と狩場に使っただけ)、何かの思い過ごし
であろうと青年は結論付けた。

「そんな誰とも知れない輩のことよりも、今後は家やあの人たちの
家にはこんなものが行き届かないようにしておかないといけな
い。」

鬼：黒死牟

十

……かねてより行くつもりであった店ではあったが…この店を仕切る女の技量は確かに素晴らしいと言えるだろう…分身たちは見た目こそ同じなれど様々な場所の文化や種族にも詳しいので…妖術や知識…さらには客に合わせた性格の変化を駆使するのでそれぞれの種族、思想、文化に合わせた戯れが可能だ…わが故郷の日ノ本及び地球の歴史すら知っているのはさすがに驚きであったが…難点は希少な種族の場合は…何をされるかわからぬ気味悪さがある点か…この女の本質は非常に厄介ではあるだろう…基本的には客には見せぬらしいが…ともあれ…この女は私が必要とする者の準備の大半を可能としているため…非常に不本意ではあるが…これまでの常識を覆してくれた礼も含めて…非常に不本意ではあるが…十とした

同じ頃、魔王城にて。

「久しいなデミアよ、此度は何用だ？」

「近々調べたいものがあるから、高純度魔導測定器借りてもいいかしら。」

「それは構わんがアレはどうなったアレ？地球からの転移者たちがよく言う飛行機とかいう技術。アレはこちらで再現できそうか？」

「無理無理、この世界でそんなもの飛ばしても魔素の壁に耐えられずにあつという間に爆発四散…」

「えー飛行機超魅力的だったんだけど…数百人、数百トンも音速超えて世界中に運べるとか魔法なしでもおつり来そうな技術なのに」

「…爆発四散するのがこれまでの考えだったんだけど、最近例外にできそうな存在を発見をしたわ。」

「それはどんなものだ、教えろ教えろ!!」

「新しい理論を発見した訳ではないけど、数年前に異世界…つまりは地球から来たある剣士を解析することね。」

ちなみにデミアはあえて言わなかったが可能性はもう一つある。天使の輪の一部を解析し、この世界との接触のオンオフを切り替え魔素の壁はおろか空気抵抗の影響すらも無視して移動する方法。これまで発見されなかった天使が突如この世界に現れたということは本来の完全な彼らは下界における法則が当てはまらない故に干渉不可能な種族ではないかと仮説を立てていた。

もともとこの方法は一步間違えば教会全体を敵に回すため、大規模な商売には決して向いていないという欠点があったが。

「して…その異界の剣士というのはどのような存在なのだ?」

「うーんと…そうね、簡単に言うならば異世界転移者の妄想である『異世界に転生して俺TUEEE!!』を素で可能なスペックの肉体に聖人並みに謙虚な魂を詰め込んだ存在かしら。」

「…さっぱり分からん。もう少しまともな例えは無いのか?」

「じゃあ、さつき飛行機をこっちで作ったら魔素の壁に耐えられずにあつという間に爆発四散と言ったけど…もしもその法則から抜け出せる力を持った存在がいるとすればどう思う?」

「それは確かにとんでもないことだな。しかしそ奴は剣士というのであつて、運び屋ではないのだろう。なれば具体的にどのように法則から外れておるのだ?」

「察しの通り、別に彼自身は別に空を飛んだり凄腕の運び屋だったりするわけではないわ。最初から説明すると彼がいた世界、つまりは地球に住む人間たちは基本的にはそこまで身体能力が高いわけではない、故に道具を使つての殺しに特化する傾向がある。転移者たちが話す兵器類がその最たる例ね。」

「ああ、核兵器とかぶつちやけやりすぎなくらいだしな。ああいうのはこの世界には要らぬ。」

現在のオーク政権下で平和と秩序が曲がりなりにも保たれているこの世界では魔素だの法則だのを抜きにしてもこの世界には無用の長物。ああいったものは蟲毒のような世界にこそ必要なもので、魔王デスアビス自身も仮に政権を取れたとしても再現するつもりのないものだった。

「そんな中でその剣士は私が戦闘用に調整したデコイを苦も無く短い時間で破壊し竜種を事も無げに切り捨てた、しかも底を全く見せず。そして一番重要なのはその強さは地球にいたころから変わらずに有していたという点よ。」

「そんな……ことが可能なのか?!ここにきてから強くなったではなく、元からその強さだと……あり得ぬ!!」

その言葉にデスアビスは目を大きく見開き驚愕する。その剣士の強さにはない、デミア謹製のデコイや竜種を倒せる存在という点だけで考えるならば、この世界においても魔王や教会の兵器共ならば可能であろう。彼女が驚いたのはここに来る前からその強さだったという点だ。

デミアとて地球に直接行ったわけではないため、地球での法則を完全に知っているとは言えない。だがこれまでの転移者たちの話からおおよそどのような法則が働いている世界なのかは理解しているだろう。だからこそ彼女が世界の法則を超えたと言ったのが信じられ無かった。

「地球の人間が地球で振るえる力の限界値と物理法則をはるかに超えた力を発揮できる存在。つまりは世界の法則を超えた存在という訳か……とんでもない奴がやってきていたものだ。」

「さすがに私も驚いたわよ。でもほぼ間違いなく事実よ。だからこそ凄く面白いのよ♪」

デスアビスとは対照的にデミアは実に楽しそうな表情を浮かべる。

これまでデミアは様々な発見をしてきた。新しい魔法や画期的な新薬、数えればそれこそきりがなし。だがそれはあくまでも世界の法

則の中でまだ発見されていなかった法則や組み合わせを発見しただけで、世界の法則そのものを超えたわけではない。そんな中に現れた世界の法則を超える存在。デミアにとって天使の輪と同じくらいに興味深い存在だ。

「あく可能だったら彼の体の隅々まで調べつくして何が違うのか見てみたいわ♪いや彼は死んでからこの世界に来たらしいから魂も見てみたいわね」

「確かに世界の法則を超えることができれば莫大な恩恵があるであろうが教会の連中がどう思うか。下手に面倒ごとになっても困るぞ。」

「新しい輸送法の開拓くらいなら信仰にそこまで影響しないからうるさくないんじゃないかしら。そもそも教会は転移者云々に関してはそこまでうるさくはないことだし。」

「おお、なればもしその剣士の仕組みを解明できれば、夢だった飛行機が夢でなくなるやもしれぬというか。で、具体的にはどういう風にその剣士を調べるのだ?」

「情報によると彼は80過ぎ位で寿命で死んだみたいだからそこがねらい目ね。ただし寿命で死ぬ間際でも剣術はそのままだったらしいから気を付けないといけないわね。」

その情報を聞いてデスアビスはげんなりする。

「滅茶苦茶すぎる…幽霊になっても戦えるとか言われたらさすがに嫌になるぞ。」

「心配ないわ、そんなことができるなら彼が殺したがっていた鬼舞辻無惨とかいう生物がその後ものさばることはなかったでしょうし。というわけでその時になったら彼が住んでいる場所と教会に根回しお願いね。」

「…政権が取れたらな。」

「彼が寿命で死ぬまでにいけるかしら?そこだけがどうも不安だわ。」

タイムリミットはあと60年ほどだが、悪魔族が与党になるには数百年かかると考えているデミアはため息をついた。

「ま、政権を取るための政治活動資金についてはちよつとした当てがあるんだけど聞く…」

「無論聞くに決まっておろうに!! 早く言うのだ!」

即答且つ今までで一番力強い返答だった。資金が大切なのは例え世界を隔てても変わらないということがよく分かるやり取りであった。

「慌てない慌てない、この間採ったばかりのある転移者さんのサンプルを使った、画期的な新薬の開発何だけどさーコレ実用化出来たら多分凄く売れると思うんだよね。」

ホワイト企業と輪廻転生（体験版）

「吸血鬼とは鬼と似通った種族であると考えていたが…まさかこうまで違うとは…」

「そんなに違うのか？前にお前から聞いた話からしたらどつちも血を好んで真祖と眷属がいて結構似た種族だって話だったのに。」

「生態はな…だが組織の在り様としては真逆としか言いようがない…天国と地獄との差という表現すら生ぬるい」

「前の世界でいたところそんなに酷かったのかよ…」

どちらが天国でどちらが地獄かはスタंकは敢えて聞かなかった。そんなものは黒死牟の表情を見ればすぐにわかる。

「…無論だ…貴様らはあの店の受付の娘を覚えておるであろう？」

「ああ、結構かわいかったしサービスも良くて上手だったな。あれで匂いさえ問題なければ8点か9点付けてたな。」

「ワシとしてはその匂いが致命的すぎるんだが。」

「そのような事を言っているのではない…あの娘が最初自分の脳を取り出して仕事を放棄していたことは覚えているな？」

「あれは驚いた、脳みそを入れた後の変わり身にもな。」

「仮に同じようなことを…鬼の始祖である鬼舞辻無惨が目によれば連帯で関係のない他の者の頸も容易く撥ねていたことだろう…」

「滅茶苦茶じゃねーか!!心狭すぎだろそいつ」

「関係ない奴まで粛清対象かよ…俺200年以上冒険者やっていろんなもの見てきたけどそんな酷い組織無いぞ。」

「ワシもそんなところには絶対に勤めたくないな、というかお前より400年近くそんなところにいられたな。」

ブラック企業勤続350年の黒死牟がホワイト企業の実情を知ったのは少し前にさかのぼる。



「あーおいうーいらつはーひひ」

「デリベル侯爵…と言ったな…この継ぎ接ぎの死体らしきものは…何だ？」

それはしゃべる死体だった。片手に脳みそを持ち、手をぶんぶんと振り回すがまるで知性というものを感ずることが出来ない奇妙な物体であった。透き通る世界で体の隅々まで見てみると、何人かの体をつなぎ合わせて作られたように見える。

「受付だ、十年に一度も様子を見に行かないから脳みそを外してしよつちゆうサボっておるだけだ。これ、いい加減起きよ。」

「左様か…いや待て!?!…こ奴はお主の眷属であるのか？」

「そうだが、それが何か？」

「信じられぬ…その様なことが可能なのか…」

「こやつはゾンビであるからな、そのようなことは朝飯前よ。」

「いや…その様な意味で言ったわけではない…」

デリベル侯爵の言葉に黒死牟は大きな衝撃を受ける。

この眷属がガチャ感覚で適当に作って放置された存在ならば、黒死牟も特に何か思うことはなかったであろう。しかし始祖の邸宅の近くにおいて曲がりなりにも役割が与えられている者が仕事をよくサボるなど、かつての上司の元では絶対にあり得ないことだった。

「そもそもアンデッドはぶつちぎりて他種族からの性的な人気がない種族ですし。どーせ大してお客さんも来ませんし？だったらもう公爵様パトロンの下、安定収入でここでボーツと佇んでいたほうがマシかな…って」

「…有り…得ぬ…その様なことが…まかり通るといふのか!」

脳を元に戻し、見違えるように理性的になったゾンビ娘の言葉に大きな衝撃を黒死牟は受ける。当然だ、もしもかつていた組織でそんなサボり方をすれば恐らく上弦であっても処分されたであろう。ついでに他の上弦も連帯で罰を受けること間違いない。なのにこの娘は後ろめたさはもとより、恐怖も全くなく、さも当然のように主人の前で寄生しながらサボっていると宣言した。

「…貴公は…このような惨状を見て…何も思わぬのか?」

さすがにいくら何でもこの物言いには何か言うだろうと期待を込めてデリベル侯爵の方を見るが、彼からは部下に対する怒りも何も見えず、まるでこれが普通だと言わんばかりに自然体だった。

「何と言われてもな…正直いつものことであるし、こやつらの生存税についても別に気にする程のものでもない故、特に何か思うことなどないな。」

「…馬…鹿な…」

かつての上司とはビジネスライクな関係であった自分は十分マシであったが、酷いときは上司の気分一つで幹部が連帯責任のような形で粛清されることも横行していた職場とはあまりにも違い過ぎた。

吸血鬼と自分たちの世界の鬼がある程度似ている種族であることは知っていたが、組織の空気がここまで違うとは全く持って想像していなかった。

「何故だ…何故こうまで違う…」

異なる世界だとか、文化の違いがどうかそんなチャチな理由などとは断じて違う決して超えられないブラック企業とホワイト企業の差の片鱗を突き付けられた黒死牟はただただ啞然とするほかなかった。

「私も…今にして思えば何故あのような組織にいたのか…あの侯爵の眷属であればもう少し生き恥を晒さずに済んだであろうに」

もつと仕える相手はちゃんと選ぶべきだったと後悔する黒死牟。そんな黒死牟を三人は同情的な目で見る。

「まあ、今はそんな糞みたいなブラック組織の一員じゃねえんだからもつと楽しいくって前向きなこと考えようぜ、何なら街に帰ったら早速サキュバス店に行くか？今回の仕事で前の魔法都市への遠征の分は取り戻せし。」

「貴様の頭はそればかりだな…だが確かに今はあのような組織の一員ではない故前向きに考えるべきか…それに私としても早めに消化しておきたい店がある」

「お、もう次行く店決めてんのか、どんなところだ？」

「水槽のはーれむ…という名の店だったか…貴様らは行ったことは？」

「無いな、つーことは新規の店か、こりやまたレビューアーズとしての腕が鳴るぜ。ゼルとブルーズはどうする？」

「ワシは今回パスする…早く街に帰ってお気に入りのサキュ嬢と遊びたい」

ブルーズは少々疲れていた、それは遠征のせいだけでなく先の店で挿れるところもなく骨をしゃぶることしかできずにいたため気分が落ち込んでいるためだ。

なので次は冒険よりも確実な癒しを体が欲しているため、今回の参加は見送ることにした。

「その店なら俺も前に魔法都市で聞いたな、食酒亭らへんでいい店やってっつてないかってな。詳細は楽しみが減るから聞かなかつたけど店の名前は多分黒死牟が言ったのと同じだったはずだ。」

「あの魔女さんがおすすめの店ねえ、安心できるとこなのか性転換宿のようなキワモノなのかどっちなんだろうな？」

「…真っ当な店であるわけが無かろう…」

性転換して女になったり、どう考えても頭の螺子がいくらか飛んで

いるようにしか思えない魔女の分身がいる店と同じ系列の店がまともであるとは、さすがに黒死牟も考えてはいない。

「そのあたりも新規のサキユバス店開拓の醍醐味なんじゃねえか。ヤツたことが無いことに挑戦するこれぞレビユアーズだな。」

「今度はもう少し平穏であることを願いたいかな…：そういえばあの妖術師で思い出したがブルーズ…：貴様最近痣のようなものが体に発現するようだが」

「痣？ああ、そういえばこの間確認したら毛だけでなくその下の皮膚も変色していたぞ。」

黒死牟の質問を聞いてブルーズは左目のあたりを撫でながら答える。左目の傷跡の部分は毛ではなく皮膚が出ているため、前に鏡で見るときに毛だけでなく皮膚の色も変わっていることが確認できたのだ。

「それは25までに死ぬ一種の病の兆候だ…」

「25?!ちよつと待て!!何故今になってそれを話した!?!」

「…案ずるな…すでに手は打つてある…」

「そ、そうか…」

「魔法都市の…遊郭を仕切る女に…：対抗策を依頼している…：奴ならば恐らくは…」

「いやいやいやいや、おかしいだろ?!なんでそこでサキユバス店なんだよ!!医者とかじゃないのかよ!!」

「正確には魔道具店だがな、あのデコイはあくまでも魔道具扱いでサキユバス店にかかる税金はかかっていないらしい。」

「む…あの分身どもは…：道具扱いになっているのか…：知らぬことであつた」

「どつちでもいいわそんなこと!!嫌だワシ死にたくない!最後に行ったサキユ嬢が骨とか死んでも死に切れん!!」

「…その執念があれば貴様も死後幽体となることが出来るやもしれぬな…」

「嫌だ、幽霊じゃやることやれ無いではないか!ワシはもっと生きたい!!」

「ブ、ブルーズ落ち着け!!あの魔女さんならきつと治療薬を作れるから…だよな黒死牟?」

「既に必要な材料は渡してある…問題は無いはずだ」

「ワシは絶対に生きるぞ、生きてアイスちゃんのところに行くぞー!」
半分発狂しながらお気に入りのお熊獣人の名を叫ぶブルーズを見て、黒死牟はどこか懐かしい気分になる。

(かつての私も…心中ではこのように取り乱していたのか)

今はかつてほど生に飢えてはいない、いないがそれでも見届けたいものはある。そのためには“巖勝”として納得できるような結末を迎えねばならないことを今回知った。



「あの…そんなに見つめられると恥ずかしいです／＼」
「端正で美しい…このような霊は冒険者としての活動の中でも見たことが無い…足が不完全ではあるもののそのようなことは些末なこと」

ニンマリとした笑顔を浮かべながら自分が指名した嬢を眺める黒

死牟。

透き通る世界で体をじつくり眺めても当然のことながら、皮も肉も骨も内臓も存在しない。だが、確かにそこに存在している。

「素晴らしい…極限まで練り上げられた霊体の完成形…初見なり…面白い…」

一応彼の名誉のために言っておくと、黒死牟は特殊性癖に目覚め、弟もドン引きする変態になり下がった訳では決してない…無意味ではないのである!!

「あの、そこまで褒めてもらえるのは嬉しいんですけどどうして私を選んだんですか？確かに私は幽霊ですから匂いとかは無いですけど挿れたり触ったりは出来ないんですよ。」

レイコには疑問だった。この黒死牟という客はどう見ても武人といった感じの人物で、まかり間違っても金縛りで抜きたくても抜けな（意味深）状況に快感を覚えるような人物ではないとの印象だ。なにあえて自分を選んだということは何か理由があるのだろうか。

「それは…そなたに聞きたいことがあったからだ…」

「聞きたいこと、何でしょうか？」

「死後…世に留まる方法だ…奴がかつて言った戯言…それが真実になるか否か見極めたい」

「幽霊になる方法ですか。もしかしてあなたに関係する誰かが言った言葉があなたの未練ですか？」

「そうだ…正確にはその一つだが…もう一つはどのような形で生きている間に決着をつける必要がある」

「さすがに今の話だけだと判断するのは難しいので宜しければもう少し詳しく教えていただけませんか？」

黒死牟はどうすべきか悩む。普通であれば自分の過去を初対面の相手に話すことはまずありえないが、これほどまでに理性と人の形を保った霊は次いつ見つかるか分からない。

しばらく悩んだ末に、黒死牟はこの機を逃す手は無いと判断しすべてを話すことにした。

「良かろう…全てを語るとしよう」

黒死牟は重々しい雰囲気を携えながら語りだす。

人間であった時は戦国時代の武家の双子の兄として生まれ跡取りであったこと。

当初は哀れみ、母離れが出来ていないと見下していた弟が実は己より遙かに才に恵まれ、優れていたこと。

その弟は母親が他界したことを告げると、家に波風を立てないように自分から身を引きどこかへと旅立ったこと。

さらに母親の日記を読み弟は「母離れが出来ていない」のではなく「病で弱っていた母に寄り添い支えていた」ということを知りすべてにおいて先を行かれていたことを知り弟に対して臓腑が焼け付くほど嫉妬を抱き、その存在を心の底から憎悪したこと。

その後、十年あまりの間に剣技を極め、非の打ち所がない人格者へと成長を遂げた縁壺と再会し、再び嫉妬と憎悪の炎が再燃したこと

その強さと剣技をどうしても我が力としたかったため、家も妻も子も捨て必死に弟の後を追い続け、痣を発現させて全集中の呼吸を学んでいくが、それでも弟にはまるで届かなかったこと。

それでも年月をかければいずれは追いつくかと思っていたが、痣とは寿命の前借りであり25才になる頃には死亡する代償を伴うものということを知り、修行に費やす猶予もないことを知り焦った自分のもとに悪魔の誘惑が舞い降り、それに乗り人間を止め本来は退治すべき化け物となったこと。

そして年月がたった夜、本来であればとつくに痣を発現させた副作で死んでいるはずの弟と再会し刃を向けるなら殺さねばならないとするが、弟は老体となつてなお全盛期と変わらぬ動きをみせ、自分は刀を抜くことすら出来ず一閃され、次の一撃で頸が落ちると確信するが、弟は直立したまま寿命で息絶え、半ば勝ち逃げされた形で最後まで弟を超えることができなかったこと。

その後無意味に数百年生きた末に、殺される間際自分が如何に醜い存在になり果てていたのかに気づき、心の底から憎んでいたはずの弟こそが彼の目指していた『侍』であったことによく気づいたこと。

すべてを黒死牟はレイコに話す。

「私の話は…これくらいでよからう…」

(重!!ちよつとこの人の話、めちやくちや重いんですけど!!いやいやいやいや、こういう話って普通教会の懺悔室とかでする話でしょ!!)

風俗店の本番前の軽い世間話を聞くくらい感覚で話を聞き始めていたら、想像をはるかに超えるほど重い話をされ、レイコは困惑する。正直聞いていて無いはずの心臓が締め付けられるような感覚だった。

(それでも頑張るのよ私!!後輩が出来るんだったら先輩としてちやんとアドバイスしないと)

それでも後輩になるかもしれない者に対して先輩として意地を見せねば格好がつかないと気合を入れなおす。

「黒死牟さんの話を聞いての私見ですけど宜しいですか?」

「構わぬ…忌憚のない意見を頼む」

「恐らくですけど、黒死牟さんが今のまま幽霊になれば地縛霊もしくは悪霊になるかと思えます。それも想像を絶する強力さ、私なんかとは比べ物にならない程の強さでただただ戦いを求めるだけの満たされない幽鬼に…」

「やはり…そうか…」

特に驚いた様子を見せず黒死牟は一人納得する。

「もしもそれを何とかしようと思えば、自分の納得する答え…黒死牟さんの場合でしたら弟さんに勝利するかそうでなくても納得する決着をつけるしかないと思います。」

「縁壺とは一度相まみえる必要があるか…そちらの話…参考になった…これにて失礼する…」

満足げに退出しようとする黒死牟、しかしそうは問屋が卸さなかった。

「…む…体の動きが…鈍い…」

足に重りをつけられたかのような感覚を黒死牟は覚える。

「ちよつと待ってください。勝手に失礼しないでください、見抜き

がまだでしようが。」

「成程：抜かねば不作法というものか：」

この後、オプシヨンサービスの金縛りで身動きがうまく取れず、幽霊サキユ嬢にいいように罵られ視姦されそうになるが、気合で金縛りを脱し、触ろうとするが、やはり幽霊を触ることはできず、苦勞しながらも身体操作と氣力を駆使し何とか頑張つて『抜かねば不作法』を達成した。

鬼：黒死牟

七

……奴の戲言の真偽を確かめる方法：その確信が得られた故：此度は収穫であつた：だが金縛りをかけられた状態では抜く物も抜けず：何とももどかしい：最終的には技と氣力で破つて何とか達成したが：あれは容易ではなかつた：しかし靈となつても金を要求されることになるとは：このあたりの解決法はまた考えなくてはならぬな

「…要は輪廻転生の一部を体験するというのか…これはまた及びもつかぬことを」

遠征から帰ってきた黒死牟は予定通り〈水槽のハーレム店〉へと赴いたが、店の概要を聞き改めて異世界とは人知の及びの付かぬ場所だと再認識する。そして思う、この世界の遊郭は時々どこか発想がおかしいと。

「輪廻転生？それはどういったものなのですか？」

「かつて私のいた世界の宗教…仏教というもののだが…その教えには魂は天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道の六つ世界を生死を繰り返して未来永劫ゆくというものがある…その中の一つである畜生道を恐らく体感できるのであろう」

「異世界の宗教では魂は繰り返すのですか、随分と変わった考え方ですね。」

仕える女神のシステムとはまた違った宗教観にクリムは改めて黒死牟が別の世界からやってきたのだと考える。

「名前からすると天道つてのがいわゆる天国みたいなもので、楽しいのか？」

「快樂は多いが…最終的に迎える苦しみは地獄以上でもある…」

「結局全部駄目なのかよ!!」

「おまけに…生き物を一つでも殺せば地獄行きの罪となる…」

「凄くきつい戒律じゃないですか!!そう考えると女神さまは大分優しかったんですね。」

「あくまでも仏教という宗教では…というだけだ…実際は私のような存在がいる以上あまり意味無き事ではあるがな」

「まあそれもそうか。それよりもだ、水槽を選べと言われても何が悲しくて虫けらと交尾しろとか一体どうすりゃいいんだよ…」

「ほう…性欲の権化と思っていた貴様にも無理というものがあるとはな…これは驚きだ」

「お前な、人を一体何だと…しかしあの貝随分と気持ちよさそうに絡まつてるなオイ。よーし貝にするか!」

「これから…畜生道を体感するというのに随分と…気楽なものだ…しかしここまで来た以上その前向きさは見習うべきか…しかし選ぶとなるとどうすべきか皆目見当がつかぬ」

綺麗に陳列された多くの水槽の中に、いろいろな種類の魚や貝、甲殻類がいるが、どれを選べば良いか全く以てさっぱりであった。そもそも鬼にしても人間にしても、刀を握れる生物としての生き方しか知らなかったためそれ以外の生き方など今更イメージできるものではなかった。

(さてどうしたものか…何だ…あの珍妙な生き物は…魔物ではないみたいだが…)

いくつもの水槽の中で、これまで見たことのない、ひときわ鮮やかな奇妙な生物を見つけた黒死牟は折角なのでその生物に憑依してみることにした。

(物は試しか…)

目をつむってしばらくすると、何ともいえない浮遊感と共に体から何かが抜けてゆくような感覚に陥る。しかししばらくするとそれは収まる。

「…憑依したのか…少し体を動かすとするか…!?何だ…この動かし

辛い体は……」

無事に何事もなく憑依することが出来た黒死牟は目を開け、体の様子を確認するため体を動かす。しかしその動きはあまりにも緩慢すぎた。それはかつて最強の侍を志した黒死牟にとっては到底受け入れられるものではなかった。

「侍を目指した者の末路か……これが……いや……私のような咎人には似合いだということか……」

畜生道に落ちる恐ろしさを体感し、本当に元に戻れるのか若干不安になる。だが驚きはまだそこでは終わらなかった。

「兄さんお腹すいたね。」

「しゃべっている暇があったら食料を探せ。」

「でもいつもだったら、いい加減食事が降ってくるのにやってきそうにないよ。僕たち何か悪いことしたのかな？」

「そんな考え意味がない、どれだけ善良に生きていたって神は結局、守ってはくたさらないんだからな。」

この水槽には黒死牟（ウミウシ）以外にもウミウシが存在している。それはそうだ、この店のコンセプトは水槽内の生物に魂を憑依させ、好き勝手にやるというものであるため、いくらかの数の個体がいないと成り立たない。

「……奴もこの世界に来ていたのか……しかも二人……いや片方は……無一郎ではないな……」

少々口調と顔立ちがキツめな方は無一郎ではないのだろう。かつて戦ったときの彼とは雰囲気が違う、おそらくは双子の兄なのであろう。

「我が子孫たちがこのような場に来るとは……世は無常なり……」

自分の子孫が年若いにもかかわらずこのような場……異世界の遊郭に来てしまったことに対して何とも言えない気持ちになるが、ここで黒死牟はあることに気付く。

「……いや待て……無一郎は遊郭……しかもこのような際物の極致のような場に来るような男であったか？」

無一郎とは一度、しかも戦いの場でしかやり取りは無かったが、そ

れでも彼が遊郭に遊びに来るような男ではなかったということぐら
いは黒死牟も分かる。というより自分の子孫で、しかも半身がちぎれ
ても戦意を失わず自分に一矢報い勝利の糸口を切り開いた男が年若
いの遊郭に入り浸っているなど考えられない。

「…であればあの姿は何故？…成程…これは今の体に私の感覚が入
り込んでいたためか…」

黒死牟はこの奇妙な現象が、自分の美的感覚が今の体とどうかした
ために起こったものだとして推測する。恐らく目の前の双子は無一郎た
ち本人ではなく、この体（憑依しているウミウシ）の子孫なのだろう。
故に本来の自分の体であった時には珍妙な生き物にしか見えなかつ
たのが、その生き物に憑依している今は無一郎の姿に見えるのだ。

「しかしそろそろ空腹も限界だな…仕方がないアレをやるか。」

「アレをやるの兄さん？でも手ごろなのがあるかな…」

「いるじゃないかそこに。」

「あ、本当だ！丁度いいぐらいのがいるね、あれなら僕たち二人なら
何とかかなりそうだね。」

黒死牟があれこれ考えている内に、例の双子（実際は双子どころで
はない）のウミウシが向かってきた。その雰囲気から自分に対して戦
意を持っていることを黒死牟はすぐさま察した。

「ほう…私に向かってくるか…その意気やよし…」

かつて自分の子孫と戦った時のことを思い出し、懐かしさを覚えな
がらも手加減は無用と考え臨戦態勢に入る。

「こちらも抜かねば…刀は今が無いが…抜かねば無作法というもの
…」

——月の呼吸——

…しかし何も起こらなかった。

「…どうということだ？…技が出ぬ…もう一度だ」

——月の呼吸——

…しかしやはり何も起こらなかった。

「馬鹿な…今はあの時のように力を吸われておらぬはず…だが身体能力が上がった様子すらない…これは一体…」

刀を使った斬撃が出ないことは仕方ないにしても、呼吸法による身体能力の向上すら全く感じ取れないことに黒死牟は焦りを覚える。かつて鬼食いの少年の技で自身の力を吸い取られていた時と違い、今は何かに力を吸い取られている感覚は全くない。にもかかわらず長年培ってきた月の呼吸が使えない、その理由を黒死牟は思案する。そしてある可能性に行きつく。

「…まさか…この体は呼吸の仕組みが…根本から異なるというのか!?!」

黒死牟の読みは当たっていた。仮にこの体が肺呼吸であるのならば、最低でも身体能力の向上はできていた。

だが悲しいことに、今の体…つまりはウミウシの体は肺呼吸ではなく鰓呼吸なのだ。いくら呼吸法の達人といえども、根本から呼吸の仕組みが違う生き物の体では呼吸法が使えないのは当然だった。

「よし、捕まえた!」

「ようやくご飯が食べられるね、頂きます。」

「…ぐ…貴様ら…まさか…」

自分のところまでやってきた双子はそのまま黒死牟（ウミウシ）に文字通りの意味で食らいつく。その様子に黒死牟は正気を疑う。自分もかつて子孫を磔にしたり、切り殺したことがあるが、それでも食べようとまでは思わなかった。故に二人の正気を疑う。

「美味しいね、兄さん。」

「よもや…先祖を食うとは…貴様ら正気なのか!?!」

「仮にそうだとしてもお前の血も細胞も俺達の中にはひとかけらも残ってないよ。」

それでも何とか反撃を試みようとするが、いまの黒死牟はウミウシだ。当然刀など扱えないし、長年培ってきた呼吸法も体術もこの体では使えない。ウミウシ初心者の黒死牟では結局数の差をひっくり返すことは出来ずにそのまま食事となる。

まあ、かつて自分の意志で鬼となり、人を喰らい、子孫さえ切り殺

してきたのだ。自分の番が来たとしてもそれは因果応報で仕方がないことだろう。

『初めてのお客様に申し上げます。取りついたオスの調子がイマイチよろしくなかったり、あるいは散々楽しんでもう精力が尽きてしまった場合は別の体に移って引き続きお楽しみいただけます。』
しかし捨てる神がいれば拾う神もいる。魂に直接聞こえて来た声はこの状況を打開する可能性を示すものだった。

「何と…その様なことが可能なのか…如何様にすればよいのだ？」

『ボディチェンジと頭の中で唱えるだけでOKです』

「こうか？…」 ぼでいちえんじ”…よし、今の私にもはや油断は存在しない…次は倒す…」

別のウミウシに憑依した黒死牟は早速、先の双子を倒すべく行動を開始する。だがその道中で黒死牟はある個体を発見する。

「あれは!?…間違いない…参る!!」

黒死牟は確信する。その個体はこの水槽…否、この種の中でも理を超えた強さを持った存在だと確信できる姿をしていた。当然黒死牟としては挑む以外の選択肢はなく、先ほど自分を喰らった双子を無視して、遅い体ながらも一目散にその個体に向かう。

「お劳しや…兄上」

「ぐ…無念…次だ…次こそは…」 ぼでいちえんじ”…」

だが、その個体はあまりにも強く黒死牟は再び食事となり果てるのであった…

その後も幾度もその個体に挑むが、勝利を収めることはかなわなかった。



「次だ…貴様…何をしている…」

「あら、目が覚めたの。憑依魔法術式に不具合は無いみたいだけど、どうしてかしらね…もしかしてあなた変な遊び方していた？」

目を覚ました黒死牟の目の前にいたのは自分の腕に注射器を刺して、血を採取している協力者の姿だった。

「何をしているのかと聞いている…」

「そりゃもちろん新薬（金持ちから金を巻き上げるための治療薬）の材料を採ってるのよ。」

「…（不穏なものを感じるが私の関知するところではないか）…だからと言って何も今でなくても良からうに…」

「まあまあ、細かいことは気にしない。それよりもあなたの血を調べてみて分かったことだけど始祖である鬼舞辻無惨を鬼にした薬、随分と興味深い組成をしているわね。魔素が無い世界で体を作り変えるためだからこんな風になったんだとは思うけど。」

「…奴は薬で鬼となったのか…初耳であった…」

「面白いのはこの薬は先天性の遺伝疾患や免疫異常、生まれもつての体の欠損にも効果があるってことね。これは売れるわよ♪」

「金の亡者め…」

「研究っていうのはいつだってお金がかかるものなのよ。それにあなただって私が無償で協力しているよりも何か利益があって協力しているって方が安心できるでしょ？」

「違い無いか…」

「それで今日は材料採取…じゃなかった、試作品を渡しに来たんだけどこれがあれば多分前に言ってた痣の副作用を抑えられると思うわ」

そう言つてデミアは黒死牟に一本の注射器を手渡す。

「ほう…もう完成したのか…」

「そこは私だからね、サンプルがあつて組成さえわかれば後は簡単よ。あ、そうだもう一つ伝えておくことがあるわ」

「…何だ？」

「あなたがいた水槽にあった不具合を治しておいたわ。これで共食いはしなくて済んで思う存分ヌメヌメできるわよ♪」

「……」

黒死牟は思った。いくら何でも子孫や弟に見える存在とそんなことする程、自分は腐って無いので今更そんなこと言われても困ると

「どうしたのだ…食べぬのか？」

出された料理を前にして引き攣った顔をする一行を黒死牟は訝しむ。

「いや、この貝が普通にかわいい子のバター炒めに見えて…」

「俺もエビが…治るのかなこれ」

どうやら先日来訪したサキユバス店での経験から、料理として出された海老や貝が女の子に見える病にかかってしまったらしい。

そんな面子をメイドリーと黒死牟はジト目で見、呆れかえる。

「頼んでおいて何訳の分らないこと言ってるのよ、海老は海老、貝は貝じゃない。」

「全くだ…所詮は妖術で憑依した一時の仮初の肉体であっただけであらうに…」

「憑依魔法の存在自体は知っていても、ああいう店に行ったのは初めてだったからどうしてもその時のことが頭に浮かんでしまうんだよ。」

「思い入れの度が過ぎる…嘆かわしい…ところでメイドリーよ…」

「はい、ご注文ですか？」

「この店ではウミウシという生物は取り扱っておらぬか？…取り扱っているなら是非頼みたい」

「ウミ…ウシ？すみませんそれを使ったメニューは聞いたことが無いので多分ないと思います。」

「それは残念だ…」

自分の子孫や弟と同じ顔をしたウミウシが同じウミウシである自分を美味しそうに食べていたのを見て食べていたのを見てふと思いついたことを言ったのだが、残念ながら食酒亭では取り扱ってはいないらしい。

「お前もしっかり影響されてるじゃねえか!!」

「む…私としたことが…不覚であった」

鬼：黒死牟

参

…六道輪廻の畜生道を体感できる店だ…実際に畜生になって思ったのは畜生の世界は想像よりも過酷だということだ…刀は握れない、呼吸法は上手く機能しない、おまけに子孫や兄弟は平然とこちらを喰らおうとする…別に私は敗れた訳では無い…ただ身体が思うように動かなかっただけだ…次は私が勝つ